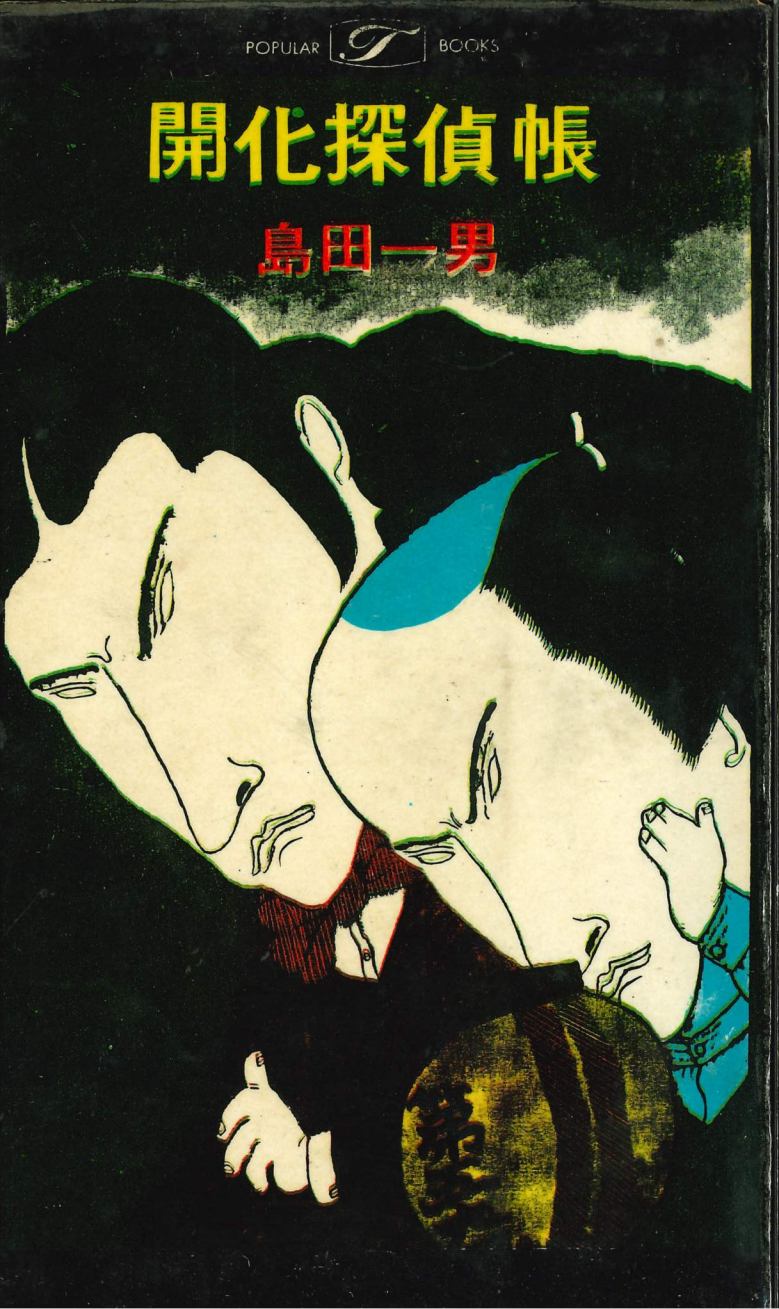
POPULAR BOOKS

開化探偵帳

島田一男



POPULAR T BOOKS

開化探偵帳

島田一男

明治も西南戦争近く……御一新後、古きものと、新しきものが入り混って戸惑う庶民が、旧弊打破と文明開化の新しき波の中で、つぎつぎ起こすさまざまな事件を、人で賑わう仲見世を始め、矢場・水茶屋の集まる奥山、芝居小屋の並ぶ猿若町、花の名所の向島、不夜城・吉原も程近く、浅草伝法院に置かれた警視庁第五大区第八小区巡査屯所に配属された探索方が、あたたかい人情と、巧みな推理でその謎をとく、郷愁の明治の風物を背景に描いた時代推理……ＮＨＫテレビ好評連続放映……。

開化探偵帖　島田一男

ＮＨＫテレビ連続放映

郷愁の明治の風物を背景に書下した時代推理

明治も西南戦争近く……古きものと新しいものが入り混って戸惑う庶民が、押し寄せる文明開化の波の中で、つぎつぎ起こすさまざまな事件を、人出で賑わう仲見世を、人出で賑わう仲見世を始め、矢場・水茶屋の集まる奥山、芝居小屋の立並ぶ猿若町、桜の名所の向島、花の不夜城・吉原に程近い、浅草伝法院に置かれた警視庁第五大区巡査派出所に配属された探索方が、あたたかい人情と、巧みな推理でその謎を解くテレビ化推理……開化探偵帳・島田一男

0293 3070020 5180 雄源社 320円

開化探偵帳

島田一男

桃源社　ポピュラー・ブックス

目次

第一話　ざんぎり一刀流……9
第二話　屯所裏袋小路……69
第三話　改暦二の酉囃子……127
第四話　西洋柱ごよみ……185

開化探偵帳

装幀　山藤章二
挿絵　東　啓三郎

第一話　ざんぎり一刀流

1

明治七年の九月末……。

青く澄み切った秋晴れの空に、ブーッ……と、鈍く長く法螺貝の音が響く……。浅草奥山の見世物小屋――振武大撃剣会の小屋の前に立った、赤い陣羽織の男が吹き鳴らすホラの音だった。

小屋の正面には、普通の見世物の場合と違って、華やかな絵看板などはなく、出場剣士の流名と氏名を書いた名札がズラリと並べられ、また紅白の吹き流しが、折からの秋風に飜っていた。

撃剣会の人気は上々のようであった。――円明二刀流の石上修蔵、天明一刀流の小谷竜軒、直心流居合の玉乃新吾など、徳川末期の江戸で知られた一流の武芸者が出ていることと、弥生流小太刀の鈴木浪路、静流薙刀の若月かつらなどの女剣士が参加していることが、撃剣会の評判を呼んだらしい。

撃剣会の小屋の右は上方曲芸の見世物、左は娘芝居の大一座が小屋をかけていたが、奥山の御見物衆は、凡そ見世物らしくない撃剣会の方に集まっていた。

「――侍の表芸も、入場料二銭の見世物になるとは、情なかこつでごわすなア」

群衆に揉まれながら、撃剣会の看板を見上げていた伝法院屯所の探索方門司勝之助が、同僚の新宮寺京介にささやいた。

「時よ時節と云うやつさ。武士の表道具と云われる刀や槍が二足三文で売り飛ばされている当今なんだ。仕方がないだろう」

ホラを吹いていた赤い陣羽織の男が、サッと赤地の軍扇を開いた——

「——さアさアお早く。ただいまより神道一刀流の名人大沢司大先生と、女ながらも静流薙刀の使い手若月かつらさんの一本勝負だ。さアさアお早く！　一人二銭だよ、一人二銭！」

京介が、ちょいと勝之助に目まぜをして、赤い陣羽織に近づいた。

「失礼だが、貴公のお名前は？」

京介が小声でたずねた。

「わしか？　玄水流剣法の佐々木一心斎じゃが……」

「われわれは伝法院屯所のもの。入ってもよろしいかな？」

「屯所？　いや、これは御苦労。どうぞどうぞ」

小屋の中は、既に見物で満員だった。

中央が相撲の土俵のように一段高くなっており、中年の男が木刀、二十六、七の女が薙刀を構え、キッと睨み合っている。——神道一刀流の大沢司と、静流薙刀の若月かつらだった。

この他にもう一人、ちんまりとした老人が、扇子を握って二人の様子を見守っている。老人の胸には、——審判　小谷竜軒……と書いた名札がつけられていた。

大沢司と若月かつらは、激しい打ち合いを続けた。が……、見るものが見れば、それは一種の申し

合せ、武術や武芸と云えるものではなかった。

「――京介どん、こげん試合は、見とうなかッ」

門司勝之助は、薩摩の剣法示源流の使い手だっただけに、腹が立つらしい。

しかし、一般の見物にそんなことはわからない。わーわーと喚声をあげて声援している。やはり、女剣士若月かつらの名を呼ぶものが多かった。

やがて、かつらが――えいッ……と一声！　大沢の木刀をビシッと跳ね飛ばした。

「――勝負ありッ！」

竜軒の扇子が、サッとかつらへ挙げられる。

見物が、ドッと喝采をする。――御見物衆期待通りの結末となったわけである。

「京介どん、出もそう！」

勝之助は、とうとう我慢が出来なくなったらしい。

と、この時、わーッと、小屋の表から喚声が聞えて来た。

「――この野郎ッ！　舐めやがってッ！」

「――おれ達をなんだと思うッ！」

「――おそれ多くも鎮台さまだぞッ！」

そんな濁み声も響いて来る。

「勝ッつぁん！」

京介は、勝之助を促して、表へ飛び出した。

「――あー！」

京介と勝之助が、思わず息を呑んだ。

鎮台の兵士三人が泥酔して暴れていた！　ひとりは、赤い陣羽織の佐々木一心斎の胸ぐらを摑んで振り廻し、他の二人は、ゴボー剣を抜いて頭上にかざし、逃げまどう女子供を追い廻している。

若い女が、何かにつまずいて、パッタリ倒れた。

「ひーッ！　助けてェーッ！」

「へへへ……。女ッ、鎮台さんが、可愛がってやるぞッ……」

酔っぱらい兵士のひとりが、千鳥に乱れる足を、踏みしめるようにして、倒れた女に近づいて行く。

群衆は遠巻きにして、声も出せないでいる。その中には、数人のポリスも混っていた。が、――相手が悪い……、後難をおそれて、手が出ないのだ。

「勝ッつぁん、片づけようか？」

「うン……。よか！」

京介と勝之助がうなずきあった。京介は、倒れている女へ駈け寄って行った。勝之助は、振り廻され、こづき廻されている一心斎に近づいて行く……。

殆んど同時に、酔っぱらい兵士二人が地面に叩きつけられていた。

「わッ！」

と、群衆がはやし立てる。

「なんだァ、貴様ッ！」

残った兵士が、ゴボー剣を振りあげて、京介へ飛びかかった。

「お静かにッ！」

京介が、ピシッと兵士のきき腕に手刀を打ち込むと、ポロリと剣を落した。
「巡邏方ッ、この三人を縛りあげろッ！」
京介の言葉に、啞然としていたポリスが、二、三人ずつ兵士に飛びかかり、高手小手に縛ってしまった。
そこへ、駒形の浅吉が素ッ飛んで来た。——旧幕時代、浅草一帯を縄張りにしていた御用聞き。いまは警視庁嘱で、伝法院屯所の手先きをしている。
「あ、旦那方、大丈夫ですか？」
「なァに、兵士ちゅうても、酔っぱらいじゃ。片づくるのに、造作はなか」
「で……、この三人を、どうしますんで？」
それには京介が答えた——
「一応屯所へ引ッ立て、探索方詰め所につないでおく」
「でも旦那、相手が鎮台坊主じゃ……」
「兵士であれ、ポリスであれ、庶民に迷惑をかけるものは取締らねばならぬ。おれは筋を通してる積りだ」
「そりゃア、理屈はそうですけど……」
「心配するな」
京介はポリス達に、兵士三人を屯所へ連行するように命じた。
「浅吉、その辺りを調べてくれ。兵隊坊主の帽子や剣が落ちてる筈だ」
それから京介は、撃剣小屋の出入口に近づいて行った。そこで、佐々木一心斎が、集まった仲間の

剣士達から、引ッ掻き傷の手当てを受けていたからである。
「お怪我はどうです？」
「いや……、大したことはござらん」
一心斎が、苦が笑いをした。
「しかし、よく我慢されましたなァ。玄水流の一心斎先生ともあれば、あんな百姓あがりの鎮台兵など、物の数ではなかったでしょうからなア」
「いやいやいや、相手が悪うござるよ、相手が……」
そう云う一心斎に続いて、集まっていた剣士達も一斉に口を開いた——
「——左様、鎮台兵ではあとがうるさい……」
「——世が世であれば、あのような成り上り者に、おくれをとるわれわれではないッ！」
「——しかし、時に利非ずじゃ。も早や、武芸などで世を渡る時世でないのじゃよ」
「違うぞッ！」
勝之助が、噛みつくように云った——
「四民平等、武士と町人百姓の差別な無うなりもした。が……、武術な亡びもはん！　おいは示源流ば学んだ。いま、おいの心を支え、体ば護っちょるのは、この示源流じゃ。重ねて云う。おいは確信しちょるッ。——武術な亡びもはん！　どうじゃ、京介どん？」
「そう……。おれも武術が亡びるとは思わないな。武術は、戦うための技ではなくなるかもしれぬ。だが、これからの日本人の魂を鍛えてゆくもの……と云えば、やはり武術だろうな……」
そう云いながら、京介は集まった剣士達を見廻した。男が五人と女が二人、もうひとりやくざッぽ

い若い男が、一同の中に混っていた。
男女七人の剣士の中には、既に見覚えのある顔が幾つかあった。——赤い陣羽織の佐々木一心斎はもとより、試合審判の小谷竜軒、女剣士に敗れた大沢司……。更にその大沢と闘った若月かつら……。もうひとりの若い女は、弥生流小太刀の鈴木浪路なのであろう。
残った二人の剣士は……。京介は小屋の正面の名札を見上げた。
——円明二刀流　石上修蔵……。
——直心流居合　玉乃新吾……。
——鏡智流槍術　鷲尾左門……。
この三人の中の二人なのであろう。
「——おい、若いの……」
京介は、やくざッぽい男へ呼びかけた。
「お前も試合に出ているのか？」
「え？　へへへ……、御冗談で。あッしは撃剣会の太夫元の若いもんなんで……」
「太夫元？　武術試合の撃剣会にも太夫元がいるのか？」
「そりゃア、先生方じゃ見世物興行は無理ですからねェ。やっぱり太夫元がいて、商売の方を取りしきらなきゃア」
「で、その太夫元と云うのは？」
「山寅の親分で……」
「山寅？」

「ヘェ……。御一新までは、十手・捕り縄をおあずかりしていた御用聞きの山谷の寅吉親分ですよ。あッしはそこの若いもんで亀戸の銀次ッて駈け出しなんで……」
「バカ者！　始姓創氏の達が出た明治の御代だ。山谷の寅吉だ、亀戸の銀次だ……などではとおらない。姓名を名乗れ、はッきりと」
「それが……、へへへ……、門前てェんで。門前銀次郎……。変んな名前なんで、あッしゃいやなんですよ。親父が亀戸天神の神主に名前を相談したら、——お前は天神さまの門前町に住んでるから門前にしろ……ッてね、全く冴えねェ話なんですよ。だからあッしは、亀戸の銀次だッ……てね、この方がずーッとイキですから——」
ベラベラと喋り続ける銀次の言葉が、ダッと飛び込んで来た浅吉によって打ち切られた——
「——旦那ッ！　殺しですぜッ！」
「——殺しッ!?」
「へいッ！　山寅が、殺されてるんでッ」
「山谷の寅吉かッ!?」
浅吉が、大きくうなずき返した。
「場所は？　場所はどこじゃ!?」
勝之助がたずねると——
「この小屋の裏で！」
浅吉は、小屋の左側の方を指さした。

2

山谷の寅吉は、カッと両眼を開いた、凄まじい形相で、仰向けにぶッ倒れていた。——年齢は、五十五、六と云うところであろう。

右の脇腹の辺りに出来た血溜まりが、ジワジワと拡がっている。そこのところに傷口があり、まだ血が吹き出しているのだ。——と云うことは、殺されてから、まだ、余り時間はたっていない……。

場所は、撃剣会と娘芝居の間の狭い通路だった。——その通路を三間ばかり行くと、撃剣会の小屋の裏の出入口——俗に云う楽屋口になる。

通路の巾は三尺ばかり……。通行人は、縦一列になって歩かねばならない。

「——こらァ、斬り殺したのではなか……」

血が吹き出している辺を調べていた勝之助が、京介を見上げた。

「着物な、切り裂れちょりもはん」

「うン。右の脇腹をひと刺し……と云うところなんだろう。浅吉、仏の着物を剝いでくれ」

浅吉が、すぐ、怖れげもなく、死体の帯に手をかけた。

「勝っつぁんよう……」

浅吉が着物を脱がせている間、辺りを見廻していた京介が、勝之助に話しかけた——

「小屋と小屋の間は三尺足らず……。ここで使える得物と云えば、なんだろう?」

「まンず短刀、短剣、脇差し程度の刀でごわしょう」

浅吉が、あッと、驚きの声をあげた。

「旦那! こいつァひでェや!」

浅吉はそう云いながら、裸にした死体の傷口を手拭いでぬぐった。

「ほう!」

京介も、傷口をのぞきこんで呻めいた。

脇腹に、鉢割れた無花果のような穴があいていた。しかも、そこから、腸の一部が、はみだしそうになっている!

「こいでは、ひとたまりもなか! グサッと刺し、グリグリグリと抉ったものじゃ、この傷は……」

「傷の深さは?」

「うム……」

勝之助は、傷口へ、ソッと指を入れて中をさぐった。

「かなり深かか……。その割りに傷口は小さか」

「と云うことは?」

「短刀、短剣なら、もっと傷口が大きゅうなっちょる筈じゃ」

「——鉄砲傷には似たれども、まさしく刀で抉った傷……と云うのは忠臣蔵七段目のセリフだ」

「いや、刀なら、短刀より太か傷口になりもす」

「短刀でなし、刀でなし……」

「もっと細身のもんでごわす」

浅吉が、おずおずとたずねた——

「じゃ、槍と云うことになるんですかね？」
「しかし、こン通路は巾三尺。いかな短槍といえども、ここで槍を使いこなすちゅうのは、余程の腕でのうては――」
勝之助が、ふッと口をつぐんだ。
「どうした勝ッつぁん？」
「こん撃剣会には、槍使いがおりもうしたな？」
「うン。確か、鏡智流槍術で、名は鷲尾左門……」
勝之助が、グイッとうしろを振り返った。そこには、詰めかけた撃剣会の剣士達が、制服の巡査に押えられて、山寅の死体を眺めていた。
「おはん達の中に、鷲尾左門はおッとか？」
勝之助がたずねたが、誰も答えなかった。
今度は京介が、剣士達へ近づいて行った。――さっき見かけた、名前の知れぬ剣士二人もそこに来ている。
「――貴公のお名前は？」
京介は若い方――三十がらみの男にたずねた。
「玉乃新吾だ」
「あー、直心流居合の……」
京介は、もうひとりの、中年の剣士へ顔を向けた――
「あなたは？」

「石上修蔵です。円明二刀流、四十六歳」
「これはこれは、御丁寧に……。鷲尾先生がみえぬようですなア」
「さア……、拙者は……、何も存ぜぬが……」
「結構です。では、御一同。しばらくの間、楽屋にお控え願いましょうか……」
剣士達はブツブツとつぶやきながら、ゾロゾロと楽屋口から入って行った。
その一番うしろからついて行く亀戸の銀次を京介が呼び止めた――
「おい、山寅の女房子どもは？」
「それが、親分は独り者なんで……。いえね、親分の身の廻りの世話はあッしがしてたんです」
「まだ女ッ気無しで過ごせる年でもないだろう」
「そいつはどうも、あッしの口からは……」
浅吉が、小鬢の辺りを小指で掻きながら、照れ臭さそうに話しだした――
「実は、あっしと山寅は、浅草を挟んで張り合った仲なんで……」
「あー、山寅も御用聞きだったそうだな」
「へェ、なかなか腕のいい御用聞きで、あっしなんか年中出し抜かれてましたよ」
「では、なぜ警視庁に入らなかったのだ？」
「それが、屯所勤めにはいろいろと、厳しい身状調べがありましてね」
「つまり、山寅には御用聞き当時不正があったと云うわけか？」
「いえ……、不正と云うよりは、これの癖が悪いんで……」
そう云って、浅吉は小指を出して見せた。

「女か？」
「へェ……。ま、死んだ男のことを悪く云いたかアねェんですが、実は山寅は手当り次第でしてねェ。ひでエこともありましたよ。御一新ちょいと前でしたが、山寅に手ごめにあって首をくくった女がありましたよ。聖天町の質屋の後家さんでしたがねェ」
「そいつは悪どいなァ……。銀次……」
京介が振り返った。——えッ……と、銀次が飛び上りそうな様子で顔色を変えた。
「どうした？」
「いえ……、ボンヤリ親分のことを考えてるところを出し抜けに呼ばれたもんで……」
「山寅の、何を考えてたんだ？」
「いえ、何ッて別に……」
「隠すなよ。女のことだろう。お前、山寅ンところに長いのか？」
「いいえ、一年足らずで……」
「一年いっしょにいれば、いろんなことが判る筈だ。——敵があったか、なかったか……。誰かから恨みを買っていなかったか……。知ってるだろう」
「いえ、親分を殺すほど憎んだり、恨んだりなんて……」
「心当りは無いのか？」
「へェ……。まるッきし……。親分は、——銭は親子でも敵同士にする……ッて、貸し借りはよッぽどのことでなけりゃアしねェ方でしたし……」
「殺しの動機は銭金だけとは限らないさ。たとえば、女出入りのいざこざだって、刃物三昧をするバ

カ者は珍らしくねェからな」
「でもゥ、いまの相手は後家さんですから——」
そう云いかけて銀次が、ハッと口を押えた。
「どこの誰だい、その後家さんは？」
「旦那……。それは……、勘弁して下さいよ」
浅吉が突然、ドーンと銀次の肩をうしろから突き飛ばした。
「はっきり申し上げるんだッ！　他のことじゃねエッ。人殺しの御詮議なんだぞッ！」
いい呼吸だ。こうたたみ込まれると、相当な悪党でも、ついゲロをしてしまう。
「済いません、旦那……。相手の女と云うのは、薙刀の先生なんで……」
「若月かつら!?」
「へェ……。いつも、花川戸の船宿で……。なにしろ三百石どりの御旗本の御後室さまですからねエ、親分も夢中でして……。若月先生にはかなり貢いでたようで……。現にきょうだって、若月先生に渡す、まッさらな太政官紙幣を二十枚——」
「二十円か？」
「へェ、紙入れに入れて——」
「浅吉ッ！」
京介が浅吉を見た。浅吉がゆッくり首を横に振る。——さっき死体を裸にしたが、そんな財布は見当らなかった……と返事したのだ。
「京介どん！」

勝之助が、グイッと腕組みをした。
「こらァ恨みでごわすか？　それとも、物とりでごわすか？」
「わからんなァ……」
それから京介は、ふッと言葉の調子を変えた——
「勝っつぁん、済まんが浅吉と、武芸の先生方から一応事情を聞いてくれないか。おれは屯所へ帰って、三人の鎮台坊主の始末をつけてくるから……」

3

その頃、伝法院屯所の探索方詰め所では、外廻りから戻って来た同心あがりの探索方藤井弥太郎が、顔色を変え、ソワソワと、大黒柱につながれた鎮台兵三人の廻りを廻っていた——
「知らねェぞ！　京介のやつ、飛んでもねェことをしやがって……。難波、庄司さんは？」
「はい、組長はいま、所長室に行っておいでです」
書役の難波巡査が答えた。——京介、勝之助、それにこの弥太郎は、いずれも二等巡査探索方だが、難波は三等巡査だった。
「そうれみろ……。いま頃庄司さんは所長と、鳩首協議ッてところだ」
「まアまア落付きなさいよ、藤井さん……」
下働きのお源婆ァさんが、弥太郎に熱いお茶をいれて持って来た。
「何をッ！　これが落付いていられるかッてんだ。とにかくいま東京で巡査と兵隊坊主は犬と猿。その犬が猿を三匹もふン縛ったんだから、こりゃアただでは納まらねェ」
「そんなことより藤井、山谷の寅吉親分を知っとるだろ？　殺されたッてさ」
「てやんでェ！　寅吉が殺されようが、馬作が首を吊ろうが、この兵隊坊主の始末の方が——」
そう云いかけた弥太郎が、ハッとお源を見た——
「おい、誰が殺されたッて？」
「山谷の寅吉親分だよ」
「えーッ！　あいつとは古馴染みだ。町奉行所以来だが……。あの野郎、女癖が悪かったからなア……。誰が行ってるんだ？」
「新宮寺さんと門司さんが……」
「京介が!?　あの野郎、そんなことより、兵隊坊主はどうする積りなんだ!?」
そこへ、探索方組長の庄司小警部が、汗を拭きながら奥から戻って来た。——庄司孫右衛門、四十八歳。もと会津藩江戸留守居役、いうなれば旧賊軍だが、いまは新設された警視庁の小警部である。
明治七年一月……。警視庁はポリス三千人によって発足したが、そのうちの二千人は鹿児島士族。あとの一千は全国から募集。この中には、旧幕臣や、佐幕派大名の家来だったものも含まれていた。
奇妙なことに、維新戦争で、最も激しく官軍に抵抗した会津士族や福島士族で、ポリスになるものがかなりいた。——新政府の要路にはとても用いられないと諦め、新らしい警察と云う世界に新生の道を求めようとしたのであった。
庄司小警部は、長年のお留守居暮らしがすッかり身につき、角のない、やわらかな人ざわりだったが、一面、どこか気の弱いところがあった。

いまも、屯所長の大警部大木市郎太と、鎮台兵の始末を相談しているうちに、すッかり汗をかいてしまったらしい……。

「――庄司さん！」

弥太郎が、庄司のところへ駈け寄った。

「どうするんです、あの三人!?」

「どうするも、こうするもなかですよ、――くらい酔うて、庶民に迷惑をかけるものを取り押えるのは、当然のことじゃ……と、所長はいうていられる」

「だけど庄司さん、何ごとか起りそうな気がするのですがねェ……。たとえば、鎮台兵がこの屯所を取り巻いて、責任者に詰め腹を切らせるとか……」

「そ、その責任者とは、わしのことかッ!?」

すると、クスクス笑いながら、京介が入って来た。

「庄司さん、御心配なく。三人の兵士を縛らせたのはわたしです。いずれ鎮台から誰かやって来るでしょう。その話し合いの結果、誰かが腹を切らねばならぬ……となったら、わたしが切ります」

「だ、だけどよゥ、京介……」

弥太郎が、苛立たしげに云った。

「せめて縄だけでも解いて置く方がいいんじゃないか。いつまでも縛っておくなァ穏やかでねェよ」

「いやア、おれは兵士達に縄をかけるときから、筋道が通るまではこの縄は解かない……と決心していたんだ」

「しかし、兵隊坊主の姿は、ちーッとひど過ぎるよ」

「その通り、制服のボタンは千切れ、帯剣は鞘ばかりで、刀身はなくなり、三人共帽子もかぶっていない。頭のてッぺんから足の先きまで泥んこだ。これが、グデングデン酔っぱらッて暴れ廻った何よりの証拠。もし鎮台から誰か来たら、この姿を見せてやるんだ」

とたんに、大きな口髭を跳ねあげ、肋骨の飾りをつけた制服を着た下士官がひとり、ぬッと、詰め所へ入って来た。

「わしが、鎮台の使者だ……」

庄司小警部が、あたふたと前へ出た。

「これはこれはわざわざどうも……」

「あんたが責任者ですか？」

「左様左様。探索方組長庄司孫右衛門です」

「わしは、東京鎮台第十三大隊、軍曹戸田政之進……。兵士がお世話になっているとのことなので、引取りに来ました」

「いや、お待ちしちょりました。おい、新宮寺、早よう縄を――」

「しばらく！」

戸田と名乗った軍曹が、大手を拡げて京介の前に立ちふさがった。

「貴公達は、探索方と云われたな？」

「左様……」

京介が答えた。

「探索方と云えば、人殺し、押し込み、火つけ、こそ泥、スリ、掻ッ払いを捕えるのが役目と思うが？」

「その他、博奕、かたり、喧嘩口論を取締り、夜鷹も捕えるし、家出人、迷い子、酔ッぱらいの世話もしますよ」

「では伺おう。国を護る兵士に、不浄の縄をかけた理由は？」

「不浄の縄ではないッ！　情の縄ですッ」

「そのようなごまかしでは納得出来ぬッ。話がわかるまで、三人の縄はとかさぬぞッ！」

「解くも解かぬも、始めッからいやがらせをする積りでおいでになったのでしょう」

「黙れッポリスッ！」

軍曹がまッ赤になって怒鳴った。

縛られている三人の兵士も騒ぎだす――

「軍曹どの、やっつけて下さいッ！」

「こいつ等、われわれを踏んだり蹴ったり……」

「敵をとッて下さいッ。頼みますッ」

庄司小警部と弥太郎はオロオロしている。難波は屯所長室へ注進に走り、お源婆ァさんはかまどの蔭で小さくなっている。

だが、京介は腕を組み、じッと、軍曹を睨みつけていた。

「どけ小僧ッ！」

軍曹が、京介に噛みついた――

「貴様達木ッ端では話にならん！　屯所長を出せッ！」

「出てもよかか？」
こだまのように、屯所長大木大警部の声が跳ね返って来た。
「何ッ!?　出て来いッ！」
「あわてるこつはなか。今ゆく……」
サラッと、仕切りの襖が開いた。と、軍曹の顔色がサッと変った。軍曹だけではない。庄司も京介も、弥太郎からお源婆ァさんまで、茫然と大木を見詰めたのだ。
屯所長大警部大木市郎太は、いつのまにか大警部の制服を、陸軍中尉の軍服に着替えていた。
軍曹が、あわてて挙手の礼をした。
「おいが屯所長じゃ。陸軍中尉兼一等大警部大木市郎太……。覚えちおけ」
「はッ！　わたくしは――」
「わかっちょる。ところで、おはん、その三人ば引取りに来たちゅうが、東京鎮台長官三浦梧楼少将の命令で来たのか？」
「いいえ……。そ、そうではありません」
「では、第十三大隊長の命ば受けて来たのか？」
「ち、違います……。自分の一存で参りました」
「そいでは折角じゃが、三人な渡すこつはなりもはんな。順序として、三人は警視庁へ送る。その上、陸軍少将兼大警視川路良利閣下より、東京鎮台三浦長官へ……と云うことになったら、おはんはどうする？」
「は!?」

ポカンと口をあけた軍曹の肩を、京介がポンと叩いた。
「おい……、仲よくしようや。三人の兵隊坊主を連れて帰るんだね」
「わ、渡してくれるのか!?」
「渡すよ。三人共帽子や剣を失くしている。こちらで探して、みつかったら、すぐ大隊の方へ届ける」
「いやア……。いろいろと迷惑をかけて、相済まん……」
軍曹は、大木大警部から、すッかり毒ッ気を抜かれて、京介にまで頭を下げた。
「全くだ。この三人には迷惑をかけられたなア。おかげでわれわれ探索方は、これからひと苦労だ」
「と云うと？」
京介が、庄司と顔を見合わせてから、苦が笑いをした――
「人殺しだよ……。暴れ廻る兵隊坊主の騒ぎにまぎれて、大の男がひとり、虫のように突き刺されて死んじまったのさ……」

4

十五分後に、京介は撃剣会の小屋の横に立っていた。丁度そこが、楽屋――剣士達は仕度部屋と呼んでいるのだが、そこの表になっているとみえ、掛け莚の壁越しに、剣士達のヒソヒソ話が聞えて来る……。
「江戸も変ったねェ……」
しわがれた声が、嘆かわしげに云った――

「ド百姓あがりの鎮台兵が肩で風を切り、薩摩の芋侍がポリスで、――おい、こら……と喚めく……」
「大沢さん、江戸ではない、いまは東京ですよ」
若い声がそう云うと、すぐ別のひからびた声が、若い声を押えた――
「いや、またすぐ江戸になるよ」
「ほう、本当ですか？」
「決まっているではないか。徳川家が倒れ、太政官政府が出来た。しかし玉乃、新政府とは何か？」
「小谷さんは、――新政府とは、薩長の藩閥政府……と仰有りたいのでしょう」
「左様……。庶民はガッカリしとるよ、これなれば寧ろ旧幕府の方がよい……とな」
「では、遠からず、新政府が倒れ、徳川幕府の世になると仰有るのですか？」
「その通り！　そして、われわれの武術もまた、花が開く……」
この会話は、老剣士小谷竜軒と、居合抜きの玉乃新吾の間に交されているのだ。
また一ソ、別の声が加わった――
「違うなア……。わしゃそう思わんよ」
この声には聞き覚えがあった。赤い陣羽織でホラを吹き、酔ッ払い兵士に引きずり廻されていた佐々木一心斎の声である――
「時代でござるよ。世の中がどう変ろうと、これからは、洋式軍隊の時代じゃよ」
「なんじゃ、あんなピーヨロドンドンの兵隊行列！」
小谷竜軒がいきり立っている。
「いや、問題は武器だよ。兵隊坊主はスナイドル銃を持ち、剣を吊る。上等士官はサートベロにピスト

ール……。そして合戦ともなればドカンドカンとアルムストロング砲を撃つ……」
それに、玉乃新吾が同調した――
「お説の通り、もう居合斬りだ、二刀流だと云っている時代ではないようですなア」
「しかし、居合斬りも二刀流も飯のタネだ」
また別の声だ。――円明二刀流の石上修蔵である。
「せいぜいいまのうちに撃剣会を催し、銭儲けをしておかねばならぬ。その意味に於てだ、太夫元の寅吉に死なれたのはまずいねェ……」
京介の頬に、ふッと、かすかな笑いが浮かんだ。――この武芸者達……。新らしい世の中から取り残された古き時代の剣士達が、御用聞きあがりの悪賢い太夫元を刺し殺す……などとは考えたくなかったからである。
「――あー、うるさいのゥ……。なにをガヤ〳〵ヤと騒いどる……」
またまた別の声だった。
「お主こそのんきなッ！」
佐々木一心斎が、呆れたように云った――
「鷲尾……。寅吉が殺されたぞ！」
「太夫元の寅吉か!?」
「左様左様左様、お主が酔いつぶれて、グースカと眠っているあいだに、寅吉はこの世からあの世へとお国替えじゃ」
「いや、わしは、そんな気がしていた……」

京介の顔が、キッと引きしまった。——いまの声の主は、槍術の鷲尾左門……。話の様子では、酔って、ずッと仕度部屋で眠っていたらしい。

「そんな気とは、どんな気だ？」

小谷竜軒の声である。

「寅吉は、畳の上で死ねぬやつ……。そう考えていたのじゃよ。一体誰が殺したのだ？」

「それはいま、探索方が、客席で調べている……」

そこまで聞いて、京介は掛け莚を離れた。

ガランとした客席では、勝之助と浅吉が、女剣士の若月かつらから事情を聞いていた。

「あの兵隊騒ぎのとき、おはんはどこにおいやった？」

相手が武家の女だけに、勝之助の言葉は、薩摩なまりながら、丁寧だった。

「わたしはその舞台で、大汎さまと立会うておりました」

「いや、その試合は、おいも見ちょッたが、騒ぎは、おはんが勝ったあとで起こったのじゃ」

「では、わたくしは、仕度部屋に戻ったことでしょう」

「——でしょう……？」

「はい、いつもそうしておりますから……」

かつらの言葉は冷やかだった。

「仕度部屋には、誰かおりもしたか？」

「寅吉どのが、浪路どのを、船宿へ誘うておりました」

「鈴木浪路どんを、船宿へ!?」

「はい……。もうひとり、鷲尾左門さまが、横になっておいでした」

「寅吉は、鷲尾ちゅう男の前で、浪路どんを船宿へ誘うちょったと申さるるか？」

「鷲尾さまは、酔いつぶれておいでした」

「浪路どんな、なんと答えもした？」

「そのような汚らわしいこと、わたくしの耳には入りませぬ……。ただ、寅吉どのが、——ではあの三十円はどうしてくれる……と申しておりました。当節は武家娘も、お金に転ぶものが多いとか……。浪路どのもいかがでしょうか？」

「そう云うおはんはどうじゃ？」

「わたくし!?」

かつらが、グッと胸を張り、眉を逆立てて勝之助を見た。が……、芝居がかったそんな態度に驚くような勝之助や浅吉ではない。

浅吉が、さらッとした調子で云った——

「お前さんと寅吉の仲さ……」

「無礼なッ！　わたくしは旗本若月数馬の妻でございますッ」

「もと旗本の後家さんも、当今は銭に弱いんじゃねェのかねェ……」

「黙れッ！　お役柄とて許しませぬぞッ！」

「ふざけんねッ！　お前ェと寅吉の仲は、ネタがあがってるんだッ」

「ほう……。それは面白い……」

かつらは、平然と、微笑さえ浮かべて浅吉を見詰めた——

「そのネタとやらを見せて頂きましょうか？」
「な、なんだとッ!?」
思いがけぬ逆襲に、流石の浅吉が、グッと言葉に詰まった。——たいていのお調べの場合、——野郎、ネタはあがってるんだッ……と一発噛ませると、——親分、おそれ入りました……と白状する。それが江戸以来の御吟味だった。
ところが、若月かつらは、おそれ入らなかった。
「さ、見せて戴きましょう、その証拠を」
「いや、証拠ではない。証人だ……」
そう云いながら、京介が入って行った。——勝之助と浅吉が、ホッとしたように、京介を見上げた。
「証人と申されましたな？」
「左様、花川戸の船宿の女将、女中、それで足りなければ船頭……。あんたと寅吉のことを知っているものを幾人でも揃えますよ」
かつらが、スーッと、大きく息を吸い込んだ。——京介がとっさに打ったハッタリが、意外な効果をあげたのだった。
「でも、寅吉どのを殺したのは、わたしではありませんよ」
「しかし、少くとも寅吉を殺す動機はあった」
「どんなことでしょう？」
「寅吉はあんたに飽きた。そして、浪路さんに手を延ばした。そんなことは、あんたの誇りが承知しない」

「ホホホ……」
かつらが、さもおかしげに笑った。
「諸政一新、旧弊打破……。明治の女は江戸の女ではありませんよ。女も袴を着け、靴をはき、馬に乗る……。男と同じ権利を握ったのです。つまり、独り身のわたしが、男を可愛がったのは、男が芸者遊びをしたり、吉原へ行くのと同じことですよ」
「では、あなたの方から寅吉を可愛がってやったのですか？」
「いいえ、遊び相手のひとりです。だから、寅吉どのが浪路どのに手を出そうが、水茶屋の女と遊ぼうが、わたしはなんとも思いませんね」
「それにしては、時々寅吉から銭を貰っていたのはどう云うわけかなァ？　現に今日も二十円——」
「お待ち下さい！　わたしはお金など、一文も貰っておりませんよ。わたしも生身の女、男がほしかった。ただそれだけのこと。遊女、売女といっしょにされては迷惑です」
「よくわかりました。仕度部屋へお引きとり願いましょう……」
かつらが立ち去ると、勝之助と浅吉が同時に大きな溜め息をついた。
「新宮寺の旦那、相当なタマですぜ、あの女！　裸にひんむけば、太政官紙幣は必ず——」
「いや……、持っていないな。もし懐中の中にあれば、あれだけの啖呵は切れるものじゃない。他をさがすんだなァ……」
巡査がひとり入って来た。——兵士の帽子二ツと、ゴボー剣一本を持っている。
「これが、みつかりましたが、どうしますか？」
巡査は、帽子と剣を勝之助の前へ差し出した。

「ふン、それが無うては鎮台兵は大困りじゃろう。早よう届けてやれ」
「はい！」
すると、何思ったか、京介が巡査を呼び止めた。
「ちょいと、その剣を見せてくれ……」
京介はゴボー剣を受けとると、鍔もとから切ッ先まで見上げ見降したが、すぐ巡査を振り返った——
「他に、帽子を一ツと、剣を二本、大至急さがし出してくれ。屯所の力でさがして届けると、鎮台の軍曹どのと約束をしたのだ……」

5

鈴木浪路は若月かつらと違って、育ちのよさを思わせる、しとやかな娘だった。
「おはん、今夜船宿で会うよう、寅吉から云われた。それに違いなかかな？」
勝之助がたずねると、浪路は、素直にうなずいた。
「はい、誘われましたが、断りました」
「そうかな？　断れん筈じゃが……。おはん、寅吉から三十円借りとるじゃろう？」
「借りております。でも、今夜のことは、断りました」
「寅吉が、よう承知したのう」
「承知などいたしません。三十円をすぐ払えと申しました」

京介が、やれやれと云った表情で、浪路のそばへ行った。
「いまお前さんが云ってることは、重大なことなんだ。今夜船宿へつきあうか、三十円払うか、二ツに一ツだ、返答しろと寅吉が迫った……と云う。これは、人殺しの動機と考えられるかもしれない」
「でも、本当のことですから、包み隠さず申し上げたのです」
「で、お前さん何ンと答えた？」
「何んとも答えません。わたしが答える前に、小屋の前の兵隊騒ぎが持ち上ったのです。寅吉どのは、あたふたと楽屋口から出て行き、わたくしは、この客席を通って、表へ出ました」
「寅吉とは？」
「その時が最後でした」
「もし、騒ぎが起らなかったら、お前さんは何ンと答えていただろう？」
「わかりません。余り無体なことを云われれば、斬りつけていたかもしれません」
「その時他に誰かいたかな？」
「鷲尾さまが眠っておいでした」
京介が浪路を引きとらせると、浅吉が大きく息を吸いこんだ。
「同じ女でも、若月かつらとは天と地の違いですねェ。あんなに馬鹿ッ正直に喋られると、危かしくッて、こちらの方がハラハラしちゃいますよ」
「あの娘は、小太刀を使うのだったな？」
「へェ、弥生流で……。あ、そうか！　小太刀ならあの狭い路地でも——」
「おれの考えは違うんだ。浪路は、——余り無体なことを云えば、斬りつけたかもしれぬ……と云っ

た。とッさの場合、弥生流小太刀の浪路は、寅吉を斬り倒していただろう。ところが、事実は刺し殺されていた」

「旦那は、あの娘を助けたいんですね？」

京介は、勝之助を見て、ニヤリと笑った。

「おれも人の子だよ。清らかで美しいものは護ってやりたい。どうだ勝ッつぁん？」

「いやァ、おいは女は苦が手じゃ。京介どんや、弥太郎どんのごつ、うもう扱うことが出来もはんのでなア」

するとその時、いま話の出た藤井弥太郎の険しい声が、仕度部屋から聞えて来た——

「——誰んだ、この槍は!? 正直に云わねェとためにならねェぞッ！ なアなアなア先生方よ。昔は町奉行所が侍を調べるのは厄介だった。殊に相手が直参ともなれば、手も足も出せなかった。しかし屯所はそうじゃねェんだッ！ 官員だろうが、役人だろうが、怪しいやつは誰でもとッ捕えて調べる！ そこんところをよーく腹に入れて返事をしろッ」

京介は、勝之助と浅吉を促して、仕度部屋へ入って行った。

困り切った表情の剣士達のまン中に、弥太郎が突ッ立っていた。——弥太郎は短い槍を一本握っている……。

「わしのじゃよ。わしの槍じゃよ」

仕度部屋の隅の方から答えた男があった。

「名前ェは？」

弥太郎が、カサにかかって訊ねる。

「鷲尾左門……」

「あー、鏡智流の先生かい……。なんだッて撃剣会の楽屋へ、こんな真槍を持って来てるんだ？」

「ハハハ……、恥かしながら、看板じゃよ」

「看板？」

「——拙者は槍使いでござる……と云う看板。いや、わしだけではない。他の剣士諸公はみんな真剣を持って来ている。若月かつらどのは薙刀をここに置いておいでじゃ」

「その槍を、なんだって楽屋の床下に隠しておかなきゃアならねェんだ!?」

「全く、奇妙きてれつなことじゃねェ！」

「とぼけンなッ！」

弥太郎が、鷲尾左門を怒鳴りつけた。

「どうしたんだ、弥太さん」

京介がたずねた。

「カンだよ、カン……。狭い通路、刺し傷……と考えると、あとは、——短槍……と続く」

「それはおれ達も考えた」

「そこであたしゃ、聞き込みを続けた。すると、その兄ンちゃんが、楽屋に一本槍がある……と喋っているのを耳にした」

そう云って弥太郎が指さしたのは、太夫元の若いもの亀戸の銀次だった。

「いいえ、あッしゃア、鷲尾先生がどうのこうのッて云ったんじゃありませんよ。ただ仕度部屋には、本物の刀や槍や薙刀があるッて話してただけなんだ」

「その通りだよ。だけどあたしにゃピーンと来た。で、早速ここへ来てみると、刀や薙刀はあったが、肝腎の槍がねェ。それで、あちらこちらとさがしてみたところ、床下の奥の方に放り込んであった……と云うわけだ」

それから弥太郎は、槍の穂先きを、京介の目の前へ差し出した。

「何か気がつかねェか？」

「む？」

京介は、ジッと穂先きを見詰めた。——穂先きの根元、千段巻に近い辺りにくもりがある。——懐紙をとり出して、その部分をソッと拭ぐってみた。

赤くなる！

「どうだ、京介？」

「血のようだな……」

「だろう！　こいつァ血ノリを拭きとったあとなんだ。しかもこの槍は鷲尾左門のもので、鷲尾左門は鏡智流槍術の名手だ」

「もしッ！」

出し抜けに、浪路が弥太郎へ声をかけた。

「その槍は、確かに鷲尾先生のでございます。でも、年中、部屋の隅に立てかけてありました。誰でも持ち出すことが出来た筈です」

「しかし……」

浅吉が首を傾げた。——

「さッきのお前さんの話では、兵隊騒ぎで、お前さんが表へ駈け出して行ったとき、この仕度部屋に残っていたのは鷲尾さんひとり……と云うことだったね？」

「わたくしは、——鷲尾先生が眠っておいでだった……と申上げた筈です」

「あー、なる程！　確かに、そう仰有いましたよねェ……」

鼻白ろむ浅吉に代って、弥太郎が口を開いた——

「鷲尾さんよ、お前ェさん、ずッと眠っていたのかい？」

「さア……」

「さア!?　ふざけちゃいけねェ。お前ェが眠っていたなら、槍は誰にでも持ち出せた。だがよ、起きていたのなら、誰も槍に手を出せなかった筈だ。と云うことは、槍を使えたのはお前さんだけと云うことになる」

「しかし、そう云われても困る」

「困ることはねェだろう。眠っていたか、起きていたか、それだけのことなんだ」

「ところがわしは、酔っている間のことは、何も覚えとらんのじゃよ。——生酔い本性たがわず……などと云うが、あれは嘘だな」

「で……、寅吉をどう思う？」

「ハハハ……、あれは、人間の屑だよ」

「浅吉！」

弥太郎が、鷲尾左門を指さした——

「先生を屯所へ御案内しろ。探索方の溜まりで、酔ってたあいだのことを、ゆッくり思い出して貰お

うじゃねェか……」

「へェ……。さ、行きやしょう」

鷲尾左門は、浅吉に促されると、悪びれずにゆッくり立ち上った。が……、京介は、左門の両手の指が、ブルブルと、小刻みに震えているのを見逃がさなかった。

「鷲尾先生ッ！」

浪路が、追いすがるように声をかけた。

「あー、浪路どのか……」

「先生ッ、なぜ申し開きをなさいませぬッ！　寅吉を憎んでいたのは、先生の外にも多勢……。わたくしだってあのような男――」

「浪路どの！――瓶の如し……じゃよ、瓶の如し。おわかりかな……」

左門はそんなことをつぶやきながら、おぼつかない足どりで、浅吉について仕度部屋を出て行った。

そのあとを追って、京介、弥太郎、勝之助も小屋を出る……。

「なんでェ、馬鹿にしやがって！――屁の如し……だなんてぬかしやがった」

弥太郎がそう云うと、京介が大声で笑った。

「やい、京介！　何がおかしいッ!?」

「弥太さんよ、――屁の如し……じゃないんだ。――瓶の如し……。古語に曰く、――口を守る、瓶の如し……ッてね。一旦口から出した言葉は、瓶から流れた水のように取り返しがつかない。つまり、云わでものことを云うな……と鷲尾は浪路をたしなめたのだよ」

「けッ！　漢語なんか使いやがって、気にいらねェ野郎だ！」

すると、勝之助が、ムスッとした表情で云った――

「おいは、浪路が云うた言葉が気に入りもさん！　――寅吉ば憎んじょッたのは、鷲尾だけではなか……と云うちょッた。おいは、この線ば、徹底的に洗うて見もすぞ……」

6

京介は、屯所に保存されている古い記録を調べてみた。――何れも、浅草地区に関する出来ごとの記録で、これは町奉行所から引きつがれたものであった。

記録の中には、幾つか、御用聞き山谷の寅吉の扱ったものがあったが、何れも筋の通ったもので、寅吉に手落ちはなかった。

もし、昔の出来事で、何者からか寅吉が恨みを買っていたとすると、寧ろそれは逆か恨みだ……と京介は考えた。

それほど、悪事に対する寅吉の処置は正しいものであった。しかも、新政府は寅吉を警視嘱にはしなかった。その理由は、浅吉が云うように寅吉の身状が悪い。女出入りの激しさのため……と考えてよいようであった。

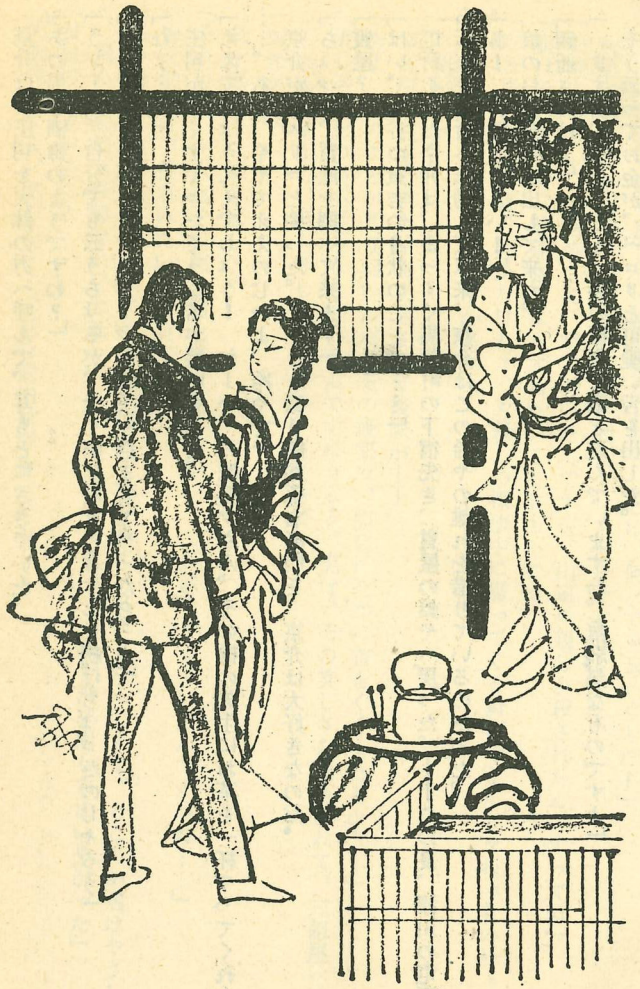
京介が、記録を調べ終って詰め所へ戻って来ると、組長の庄司小警部が鷲尾左門を調べていた。

「名前は鷲尾左門。四十七歳。東京府士族……。そうじゃな？」

「左様……」

「もと直参か？」

「左様……」
「何か、お役についていたのかね？」
「講武所槍術教授方心得……」
「なる程……。つまりは、槍の指南役ちゅうわけじゃ」
「左様……」
「講武所が廃止されたのは、いつじゃったかねェ……確か、慶応二年……」
「左様……」
「その後は、何をしとったのかね？」
「酒を呑んでいた」
とたんに、傍らで調書をとっていた難波巡査が怒鳴りつけた——
「なんだッ、左様……。左様……。なんでも左様で片づけているかと思うと、こん度は、——酒を呑んでいた……。そんな返答があるかッ！」
「わしは、まじめに答えておる積りじゃ。講武所が廃止され、やがて維新の戦争じゃ。わしは上野で彰義隊に加わり、五稜郭では籠城軍に参加したが、戦いは敗戦につぐ敗戦。わしは何度官軍に斬り込んで行ったかわからぬ。しかし、結局は死神から見離されて、江戸へ——いや、東京へ舞い戻って来た。それ以後は、自分でもどうして生きて来たかわからぬ。人間、死に場所を失うとみじめじゃよ。昼となく、夜となく、ただ、酒を呑み続けていた。覚えているのは、それだけじゃよ」
鷲尾左門は、咽ぶように、低い声で語り続けたが、声も手も震えていた。
「庄司さん……」



京介は、庄司を火鉢の方へ呼んで、耳もとにささやいた。
「あの男、酒毒のようですね？」
「うン……。自分でも云うちょるが、全く酒びたりの暮らしを続けちょったのじゃろう」
「どうです、一杯……、キューッとお茶を呑ませてやったら……」
「む？……」
庄司が、くすぐったそうな苦が笑いをした。
「ええでしょうええでしょう！　おーい、お源婆ァさん。その槍の先生にお茶を一杯やってくれんか……。あー、冷やでええのじゃよ、冷やで」
京介がクスリッと笑った。——こう云う庄司孫右衛門を、京介は大好きなのだ。
「ちょッと、質屋を調べて来ます」
「質屋？」
「はい、山谷の寅吉の身状のことで……」
屯所を出た京介は、まっすぐ黒船町の下宿先き、質屋の鈴やへ戻った。——この夏、深川の屯所から伝法院屯所へ転勤して以来、京介はこの鈴やの離れを借りているのだった。
「あ！　お帰りなさい！」
娘のお金が飛び出して来た。
「親爺さんは？」
「いますよ、ひとり……。裏の椽側で猫と遊んでいますわ。無邪気なものですよ」
そう云ってお金が、ペロリと可愛い舌を出した。

「馬鹿野郎！　親を捕まえて無邪気なもの……とは、何ンてェ云いぐさだ！」
主人の長十郎が、小さな髷をのッけた頭でノレンを分けて出て来た。
「お帰りなさい、新宮寺さん。噂で聞いたんですが、山寅の親分が殺されたんですッてね」
「実はそのことで、親爺さんにたずねたいことがあってね」
「だと思いましたよ。何かなけりゃ、人殺しの探偵中に帰ってくる新宮寺さんじゃねェものねェ……。三組屋のことじゃねェんですか？」
「三組屋？」
「聖天町の質屋ですよ。おまきさんて後家が——」
「あ！　そのことが知りたいんだ。その後家は、寅吉のために首をくくったとか……」
「美し過ぎたのが不運のもとだったんですねェ……。実は、その美しさを見込まれて、三組屋へ嫁入りしたんですがね、嫁入りして六年目に、亭主がポックリ……」
「病死か？」
長十郎はうなずき返した。
「それ以来、一人息子の梅之助を抱えて、女手一ッで質屋をやっていたんですがね……」
「梅之助とは、役者みたいな名前だなァ」
「左の肩口に梅の花みたいなアザがあってね、梅之助てェ名にしたんですよ。ところが名はやさしいが、飛んでもねェ野郎でね、十五か六ンとき、侍になるッて、家を飛び出しちまいやがった」
「質屋の息子が侍に？」
「天狗党ですよ、水戸の……。ほら武田耕雲斎一派の……」

「知ってる。天狗党の筑波山旗あげは元治元年だ」
「十年前ですよねェ。ところが天狗党は敗け戦、仲間に入ったものはお尋ね者。そこへ目をつけたのが、かねて後家のおまきさんを狙ってた寅吉親分でねェ。——梅之助をかくまってるだろう……ッて、毎日三組屋へ押しかけ、とうとうおまきさんを手ごめに……」
「悪い野郎だなァ」
「おまきさんは、死んだ亭主に申しわけがない……と」
「首をくくッたのか？」
長十郎が、いたましげにうなずいた。
「あたしは三組屋とは親しくしておりましたので、すぐ駈けつけたんですよ。書置きがありましたよ。——憎いのは山谷の寅吉。恨めしいのは山寅。梅之助、敵を討っておくれ……ッてね」
「町奉行所から検視があったろう？」
「でも、その前に寅吉親分がやって来て、書置きをどッかへ隠しちゃいましたからねェ」
「寅吉はお構いなしか？」
「長いものには捲かれろッて時代でしたからねェ……」
長十郎は、いまさらのように溜め息をついた。
「さッきの話の三組屋の息子——」
「梅之助ですか？」
「戻って来たのか？」
「死んじまったッて話ですよ」

「どこで？」
「筑波山で……。天狗党員と云っても、剣術も柔術も知らねェ質屋の伜でしょう。わーッと斬り合いになったら、どうにもなりゃアしませんよ」
「生きてたら、二十五、六ッてわけだなァ」
「ええ……。でもねェ、十年の間音沙汰なしですからねェ、やっぱり死んじゃったんじゃありませんかねェ……」
京介はお金の給仕で、早やめの晩飯を食うと、そそくさと鈴やを出た。
「——あら、京介旦那……」
広小路に近づいたところで、うしろから華やかな声を掛けられた。
紅梅そばのおかみの妹、芸者の小梅が駈け寄って来た。
小梅、この夏の末まで、深川のヤグラ下で左褄をとり、かなりの売れッ妓だったが、急に看板を返して、浅草から出たのだった。
——姉さんといっしょに暮らしたかったからですよ……と、小梅は云っているが、実は、浅草に転勤した京介を追いかけて来たことを、紅梅そばの姉夫婦はもとより、弥太郎や勝之助も知っている。
「なんだ、今頃普段着で……。お茶ッ引きか？」
「フフフ……、今夜は京介旦那休み番でしょ。だからどっかへおいしいものでも食べに連れてッて貰おうと思って、お座敷を断ったんだけど……」
「悪いが、今夜は駄目だ。人殺しなんだ」
「聞きましたよ。でも、弥太郎旦那が、槍使いの下手人を召し捕ったとかって——」

「鷲尾左門か……。あの男が真犯人とは思えないなァ……」
「あら、そう……」
小梅が、真剣な表情で首を傾げた。
「じゃ、あのこと、話した方がいいかしら？」
「あのこと？」
「いまさッき、髪結いさんで聞いたのよ。丁度撃剣会の前で兵隊騒ぎのあった頃、髪結いの梳き子さんが、あの近くを通りかかったのよ。小屋の表は大騒ぎ……。おっかないから裏の方を通ると――」
「誰かを見かけたのか？」
「ええ、女のひとを……」
「女!?」
京介が、意外な思いで訊ね返した。
「そう……。しかも、袴をはいて、白鉢巻きをしていたと云うんだけど……。娘芝居との間から駈け出して来て、撃剣会の楽屋口へ」
「撃剣会の女剣士か……」
「心当りがあるんですか？」
「撃剣会には女剣士が二人いる。薙刀の若月かつら……、小太刀の鈴木浪路……。二人共、寅吉を殺す理由を持っている」
「まア！」
小梅が、怖ろしそうに目を見張った……。

7

弥太郎は、駒形の浅吉を連れて、夜の奥山へ入って行った。
水茶屋や矢場の集っている方は灯し火が華やぎ、まだかなりにぎわっていたが、見世物小屋はいずれも暮れ六ツ限り……。辺りは闇に包まれていた。
「旦那……、撃剣会の小屋へ行くんですか？」
「う？　うン……。どうも気になるんでなァ、ひとりでに足がこちらへ向いちまったんだ」
「気になることッて……？」
「あの槍の先生だよ」
「鷲尾右近で？」
「そう……。血のついてた槍を証拠に、有無を云わさず屯所へ連れてッたものの、どうもあの先生、憎めねェんだよなア」
「そりゃア、酒毒にやられてますからねェ」
「いやア、幾度も戦場で矢玉の中をくぐって来たせいか、人間離れした、仙人みてェな面をしてやがる。色気もねェ、銭もいらねェッて面構えだ」
「人間色気と欲ッ気が無くなりゃア、仏さまみてェなもんですよ」
「そこなんだ。そんな鷲尾左門が山寅を殺したり、二十円掻ッ払ったりするだろうか？　そう考えると、あたしゃ飛んだ勇み足をしたんじゃねェかッて気がしてねェ、わけもなくこの小屋へ来てみたく

——」

弥太郎が、急に言葉を切り、足を止めた。

「どうしたんです、旦那!?」

「しッ！」

弥太郎が、撃剣会の小屋を指さした。

折からの星あかりに、小屋の前に立っている女の姿が眺められた。——女は武家ものの姿で、お高祖で顔を包んでいる。

「——おいッ！」

出し抜けに弥太郎が女に駈け寄って行った。

「こんな時刻に、何をしてるんだッ!?」

「はい、わたくしは……」

女が顔をあげた。——頭巾の蔭の白い顔は薙刀の女剣士若月かつらだった。

「なんでェ、お前ェさんかァ」

「はい……。実は、今日の出来事で、すッかりいやになってしまいまして……。もう明日から撃剣会に出るのはやめようと思いましたが、仕度部屋にわたくしの薙刀が置いてあります」

「それをとりに来たのか？」

「はい……、いけませんでしょうか？」

「いや……、自分のものを持って帰るのを、いけねェなんて云わねェよ」

「では、持ち帰らせて頂きます……」

かつらは、出入口の掛け金をはずして小屋へ入って行った。

「旦那……。女の癖に奥山の暗がりを独り歩きとは、いい度胸ですねェ」

浅吉が呆れたように云った。

「そりゃアお前ェ、あの女は薙刀の先生だからなァ」

「旦那、大きな声じゃ云えませんが、腕ッ節の強い女なんて、可愛ッ気がありませんねェ」

「その強い女を寅吉は抱きやがった。あいつァ案外、いか物食いだったらしいなァ」

「旦那、旦那……。仏の悪口は云いッこなし。丁度この辺りで殺されてたんですよ。余りひでェことを云うと、寅吉がドロドロドロと化け出るかもしれませんよ」

「よせよッ！　あたしゃお化けと沢庵の古漬は大嫌いなんだ」

そんなことを話しながら、弥太郎と浅吉は、山寅が倒れていた路地を通り抜けて、撃剣会の小屋の裏へ廻った。

突然、ギャッと、凄まじい悲鳴が、小屋の中から響いて来た。

「旦那ッ！」

「中だッ！」

弥太郎と浅吉は、二人いっしょに、楽屋口の扉にぶッつかって行った。

掛け金はかかっていたが、掛け小屋のやわな扉だ。ダーンと吹ッ飛ぶ。

中はまッ暗だ。

ダダダダッと、表の方へ走る足音！

「野郎ッ！　待てッ！」

弥太郎が、客席へ素ッ飛んで行った。
ガタッと、床几の倒れる音が響いた。——逃げる曲者がつまずいて倒したのだ。
「旦那ッ！」
浅吉が、仕度部屋から叫んだ。
「誰かいますぜッ！」
この言葉に、ふッと弥太郎が立ち止まった。その間に、黒い影が一ツ、脱兎のように表へ飛び出して行った。
入れ違いに、出入口からカンテラが駈け込んで来た。
「——こらッ！　誰かおるのかッ!?」
怒鳴っているのは巡査らしい。
「おれだおれだ、探索方の藤井弥太郎だ」
「あー、藤井さん……。こんな時刻に、いけんしたとですか？」
「いま誰か飛び出して行ったろ？」
「はア……。こそ泥でも入ったのではなかかと思うて来て見たとですが……」
奥から浅吉の声が聞えて来た——
「旦那！　来て下さいよッ。倒れてるなァ、若月かつら先生のようですぜッ！」
「何ッ!?　おいッ、カンテラだッ。ついて来てくれッ……」
それから二十分後に、息絶えた若月かつらのまわりに、弥太郎を始め、京介、勝之助、浅吉が取り巻いていた。——京介と勝之助は、巡査の急報により、屯所から駈け付けたのであった。

「着物の上からではッきりとはしねェが、傷口はどうやら、寅吉のときと同じようだぜ」
弥太郎が、京介と勝之助に説明した。
「では、やっぱり槍でござすか？」
「と云いてェが、槍は鷲尾左門を引ッぱってくとき、屯所へ持ってッてしまったからなァ」
すると京介が腑に落ちないと云うように、小首を傾げた。
「どうも、かつらの死に様が気になるなァ」
確かに、若月かつらの姿は異様だった。——仕度部屋と客席との仕切りの莚壁に寄り添うようにして突ッ伏している。しかも、右手は敷き莫座をまくッて、床下へ手を突ッ込み、左手には短い鉄棒を握りしめていた。
「この様子から判断すると……」
京介が死体を見詰めた。
「かつらは敷き莫座をまくり、鉄棒で床板を持ち上げ、右手を床下へ入れたところを、グサリッ……。右の脇腹を突き刺された」
「でも、右は壁ですよ」
浅吉が言葉を挟んだ。
「壁と云っても莚壁だ。とんがった刃物なら、莚越しに突き刺すことが出来る。見ろよ……」
京介が、莚壁の一部を指さした。——その部分の莚が小さく切れて、黒ずんでいる。——間違いもなく血潮がこびりついているのだ。
「ところで京介どん、死骸の恰好じゃが……」

勝之助が、京介に説明を求めた。
「待ってくれ……」
京介は、冷たくなった若月かつらの右手を床下から引きあげた。
「――おーッ!?」
弥太郎、勝之助、浅吉が、殆んど同時に驚きの声をあげた。
なんということであろう!? かつらの右手の指は、しッかりと、縞の財布を握りしめていたではないか！
「けッ！ ひとをコケにしやがってッ！」
弥太郎が、吐き出すように云った。
「――もう撃剣会に出るのはいやになったから、薙刀をとりに来た……なんて云いやがって、実は、この財布を取り出しに来やがったんじゃねェかッ」
「ところで、この財布だが――」
「京介よ！ 野暮なことは云うねェ。これは寅吉の二十円入りに決まってるじゃねェか」
「だろうな……」
京介は、かつらの指を一本々々伸ばして財布を離させ、中から太政官紙幣をひと束取り出した。――二十円だった。
「こらァ、驚きもした。まッこと女は魔物じゃ……。取り調べンとき、――わしは後家じゃ。生身の女じゃ。男ば可愛がって何ンが悪かか……と云うちょッた若月かつらが、寅吉殺しの下手人とは――」
「待った！」

京介が、勝之助の言葉を押えた。
「若月かつらも殺されてるんだぜ」
「左様……。寅吉はかつらに殺され、かつらはまた何ン者かに――」
「いや、殺しの手口も、刃物も全く同じだ」
「では京介どんな、下手人はひとりと考えちょるのでごわすか？」
京介がうなずいた。すると弥太郎が、やれやれと溜め息をついた――
「――京介よ……。えれェことになっちまったなァ。あたしゃ面目玉を踏みつぶしちゃったよ」
弥太郎が、渋い顔でおでこを叩いた――
「あたしゃ鷲尾左門をとッ捕えた。ところがその左門は夕方からずーッと屯所の溜まりの中だ。若月かつらを殺せる筈がねェ……。今度ばかりは大黒星だよ」
「気にするなよ。一番怪しいと思われる鷲尾左門が、弥太さんのおかげで助かった……。そう思やァくよくよすることはない」
「なる程……。あたしの力で鷲尾左門が濡れ衣を着ねェで済んだッてわけか。つまりあたしゃ左門の大恩人だ。そう考えるといい心持ちになって来たよ。あー、有難てェ！」
弥太郎は憎めない男だった。
「浅吉……」
京介が浅吉を呼んだ――
「剣士の中に若手が二人いたな、二十代の」
「へェ、直心流居合の玉乃新吾と円明二刀流の石上修蔵……。二人共二十七、八でしょう」

「その二人の身もとを洗ってみてくれ」
「じゃ、この二人の中に!?」
京介は首を横に振った——
「万事は、調べてからのことさ……」

8

「——左様かァ！　あの若月かつらどのが殺されたか……」
翌朝、庄司から昨夜の変事を聞かされた鷲尾左門は、格別の感情も示さず、淡々と語り続けた——
「昨日、わしは仕度部屋で眠っていた。酒に体を蝕ばまれたわしは、撃剣会で試合をする時の外は、眠ってばかりいるのじゃよ。が、バタバタとあわただしい足音に、ふと、目をさました。若月かつらが、楽屋口から駈け込んで来たのじゃ。かつらは、敷き莚をめくると、どこからか鉄棒を持って来て、床板を起こしていた……」
「おはん、それをなぜ昨夜のうちに云うてくれんかったのじゃッ！」
庄司小警部は、いかにも残念そうだ——
「そうすればだ、若月かつらを捕えていたであろうし、従ってだ、かつらは殺されるようなこともなかったわけじゃ」
「ところが、わしには云えんかった。と云うのは、若月かつらが立ち去ると入れ違いに鈴木浪路どのが入って来た。そして……」

左門は、咽ぶようにノドを詰まらせた——
「浪路どのは、サッと、わしの槍に駈けよると、穂先きを調べ、自分の鉢巻でグッとしごいてから、槍を茣蓙の下に隠して出て行った。——つまり浪路どのは、わしをかばってくれたのじゃ。若月かつらのことを云えば、わしは目ざめていたことになり、浪路どののことも云わねばならぬ。それで、昨夜は、どうにも云えなんだのだよ」
京介が前へ出た。
「鷲尾先生、先生の槍に、なぜ血がついていたのでしょう?」
「わからん！　全く不思議じゃ」
「庄司さん……」
京介は、庄司小警部へ顔を向けた。
「どうやら兵隊騒ぎの最中に、三人のものが、眠っている鷲尾先生のそばへ行ったようですな。第一は謎の人物、恐らく男でしょう。この男は、寅吉を刺し殺し、血に汚れた手のまま仕度部屋へ忍び込み、鷲尾先生の槍の穂先きに血をこすりつけて行った」
「その時鷲尾どんは——」
「勿論、眠っておいでした。目をさましたのは、駈け込んで来た若月かつらの足音のためです」
「かつらは下手人ではないのかね?」
「違いますね……。かつらは、路地に倒れている寅吉をみつけ、その懐中から二十円入りの財布を抜き、仕度部屋の床下にかくした。昨日、寅吉から銭を貰うことになっていたかつらだけが、財布の中に太政官紙幣の束が入っていることを知っていたのですからね」

「そして、夜中にそれをとりに行って、今度は自分が刺されたちゅうわけか……」
「だと思います」
「では、鈴木浪路は？」
「あの娘は、ただ鷲尾先生をかばっただけ……、わたくしはそう思います」
「となるとだ、下手人の見当はどうなるのじゃね？」
勝之助が口を開いた——
「神道一刀流の大沢司はあの日、試合料の値上げ申し出て、寅吉から蹴られちょる。また円明二刀流の石上修蔵は、三円の前借を寅吉に申し入れ、これまたキッパリ断られちょる……」
「カネに恨みは数々ござる……じゃねェ」
庄司小警部が冴えない洒落を云ったとき、浅吉が細長い包みを抱えて戻って来た。
「浅吉、頼んでおいたことは、調べてくれたか？」
京介がたずねた。
「ヘェ、玉乃新吾は八百石どりの旗本の次男坊ですよ。十五、六ン時から、鏡智流道場の麒麟児と云われてたそうです」
「なる程……。石上修蔵は？」
「伊勢の津の地侍なんで……。御一新のとき、新政府に使って貰おうと思って出て来たようです。でも、ツテが無くって官員になれず、撃剣会などに出るようになったらしいんで……」
「わかった。御苦労だったな」
「いいえ、お役に立ちましたか？」

「立ったとも！　これで目標を一ツに搾れそうだ……。それはなんだい？」
京介が、浅吉の抱えている包みを指さした。
「あー、これは昨日の兵隊坊主の帽子と剣ですよ」
「めっかったのか？」
「ヘェ、巡邏方がみつけたんで……。ひでェじゃありませんか、一本のゴボー剣は、撃剣会の裏の閻魔堂の池に放り込まれてたそうです。あの池は水がひからびて、泥沼になってましてね、ゴボー剣は泥の中に突ッ立ってた……と巡邏方が云ってました」
「その泥ンこの剣を見せてくれ……」
京介は浅吉からゴボー剣を受け取ってジッと見詰めていたが、それを庄司小警部の前へ持って行った。
「庄司さん、思ったとおり、この剣はタップリ血を吸ってますよ」
「こ、この剣が!?」
「寅吉と若月かつらの血だと思います。一見に汚れているようですが、黒ッぽいのが血、赤ッぽいのが泥ですよ」
「しかしだ、寅吉と若月かつらは槍で——」
「この先細のゴボー剣で突き刺して抉る……。ちょうど槍で刺したのと同じような傷口になる。そうは思いませんか？」
「従ってだ、三尺足らずの狭い路地ででも自由に使えた……ちゅうわけか？」
京介が、その通り……とうなずいた。

「庄司さん、撃剣会の小屋へ行って来ます。弥太さんが先生方を集めている筈ですから……」
撃剣会の小屋の裏表には、巡邏方が六、七人ずつ、警棒を抱え、厳重に見張っていた。——この物物しさで、身に覚えのある連中の度胆を抜く……、これが奉行所仕込みの弥太郎のやり方なのだ。
仕度部屋には、剣士全員が集まっていた。尤も、屯所にいる鷲尾左門は来ていないし、若月かつらは棺桶の中に入っている。
剣士の方にもうひとり、太夫元の若いもの亀戸の銀次も顔を出していた。
そして、仕度部屋の出入口には、弥太郎が、銀磨きの十手を持って突ッ立っている。
京介と勝之助が裏口から入って行くと、弥太郎がニヤリと笑った——
「さてと、ボチボチ吟味を始めるか。白い黒いの結末がつくのももうすぐだ」
「これは怪しからん！」
昨日、兵隊からこづき廻された佐々木一心斎が口をとがらせた。
「貴公はわれわれの中に、下手人がいるとお考えか？」
「いるねェ。あたしゃアね、昨夜のその野郎が若月かつらを突き刺し、表へ逃げるのを見ているんだ」
「それなれば、いまさら吟味することはござるまい。いや応なしに召し捕られてはいかがでござる」
「一応理窟だなア。ただね、見るには見たが影だけなんだ。なんしろ夜中の小屋の中にゃ灯りがなくて、まッ暗だったんだ……」
なんともシマらない弥太郎の調べ振りに、京介が苦が笑いをしながら、前へ出た。
「これから、おれが吟味する。よいかな、御一同、まず、生まれた年を云うて頂こう」
「年でございますか？」

浪路がたずね返した。
「左様……。だが、御老体お二人——一心斎先生と小谷竜軒先生、それに浪路どのはよろしい……。まず、大沢どのは？」
「弘化元年だ。三十一歳」
「干支は？」
「辰年……」
「次ぎ……」
京介が、石川修蔵を指さした。
「嘉永元年……。さる年。二十七歳」
「結構でした。では、玉乃先生……」
若い玉乃新吾は、不愉快そうに答えた——
「嘉永二年……。酉年……。二十六歳だよ」
「よろしい。次は、お前だ」
京介が、亀戸の銀次を見た。
「え!? あ、あッしもですか!?」
銀次が、驚いてたずね返す。
「何年生れだ？」
「へェ……。あのゥ……、か、嘉永……五年なんで……」
「幾つになる？」

「え？　えー、二十三で」
「それにしちゃア、ふけて見えるな。干支はッ？」
「そ、そのゥ……、う、うま――」
「馬鹿野郎ッ！　自分の干支を知らねェのかッ。嘉永五年はネズミだッ」
「す、済みません！　じ、実は――」
「実はも団扇も、聞きたかァねェ。銀次ッ！　何年生れの何年だッ!?」
「か、嘉永二年、と、酉年……」
「玉乃さんと同じだ。二十六だな？」
そう云いながら銀次に近づいた京介が、やにわに、グイッと銀次の左襟を押し拡げ、肩をひんむいた。――肩口に、クッキリと、梅鉢型のアザが浮かんでいる。
「あッ！　な、なにをしやがるッ！」
「おい、梅之助……」
「えッ!?」
「お前は、聖天町にあった質屋三組屋の倅梅之助、そうだろ？」
「ち、違う！　お、おいら亀戸の銀次だッ」
「往生ぎわが悪いぞ……。お前のお袋おまきは寅吉のために首をくくった。だからお前は、お袋の恨みを晴らそうと、昨日寅吉を刺した」
「し、知らねェ！　おれじゃねェッ！」
「それだけなら、お上も情をかけて下さる。ところがお前ェは、寅吉殺しを酒毒でわけのわからぬ鷲

尾左門におっかぶせようと、左門の槍に寅吉の血を塗りつけた。まだある！　若月かつらが寅吉の死体から財布を抜きとったのを知り、或いは、殺しの現場を見られてるかもしれぬとの不安から、かつらを狙って、これまた刺し殺した」
「違う違う違うッ！　お、おれは、槍なんか使えねェッ」
「いいものを見せてやろうか？」
京介が勝之助を見た。すると勝之助が、かくし持っていた包みを開いて、泥と血にまみれたゴボー剣をとり出した。
銀次の顔色が、サッと変る！
「寅吉は、子分のお前から狙われているとは夢にも知らず、安心し切っていた。だから兵隊騒ぎで表へ出て、路地でお前に会ったときスキだらけだった。お前は、わけなく刺せたわけだ」
「だ、だ、だけど、お、おれは――」
「よせよせ、もう逃れられッこはないんだ」
そう云った京介が、突然手を伸ばし、銀次の右裾をパッとまくりあげた。――向うズネに、ベッタリ膏薬がはってある。
「その傷はどうした？　昨夜若月かつらを刺し殺し、夢中で暗がりを逃げるとき、いやッてェ程向うズネを床几にぶッつけた。これが本当のスネに傷――」
「糞ッ！」
銀次がダッと、仕度部屋から飛び出そうとした。
が……、その前に、勝之助と弥太郎が立ちふさがった……。

明治八年二月、銀次の梅之助は、重流刑十五年を宣告された。——死刑をまぬがれたのは、母親の仇を討ったと云うことと、若月かつらの素行の悪さが梅之助の量刑に幸いしたことは否定できない。

そして、春浅い二月末、梅之助は流刑地の北海道へ送られて行った……。

第二話　屯所裏袋小路

1

明治七年十月始めの夜……。

新東京は、冷やかな夜霧にスッポリと包まれ、伝法院屯所の正門には、大提灯のともし灯がチロチロとまたたいていた。

伝法院には幾つかの門がある。——いま、霧に濡れて巡査が立番しているのが仲店通りに面した正門。広小路に開いた南門——俗に裏門。観音堂との連絡口になっている北門——俗に忍び門。他に花屋敷口、門跡口、大願寺口など数ヶ所の通用門……。

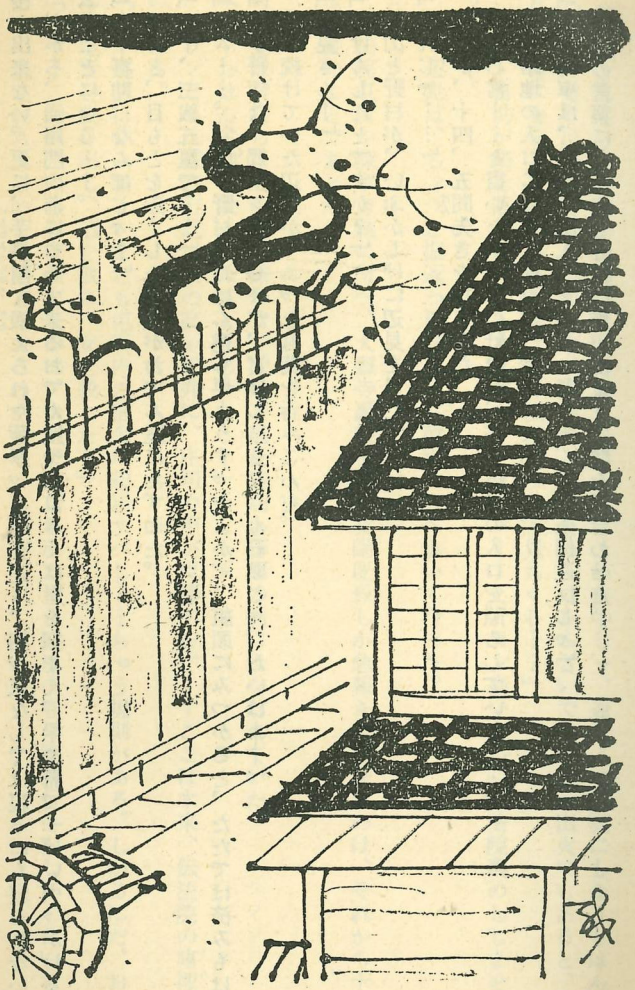
その大願寺口の暗い地面を、ポッカリ、淡い光が、赤ッぽく照らしていた。小さな担ぎ屋台のおでん屋の掛け行燈の灯だった。

「——冷えるなア、こん夜は……」

辺見二等巡査は、ゴクリッと燗酒をあおると、一本箸でコンニャクを突きさした。

「ヘェ、もうすぐお酉さまですからねェ」

「お酉さま？　そら、どげんこつじゃ？　薩摩にはなかこつじゃが……」
「へェ。十一月の酉の日に、浅草田ンぼの大鳥神社へおまいりしますんで……」
「どんがら、十一月にも酉の日は二度も三度もあるじゃろう」
「ですからね、一の酉、二の酉と云いますんで……。三の酉のある年は火事が多いって云われてますよ」
その時、通用門の扉をソッとあけて、黒い影が二ツ、ソッと屋台に近づいて来た。——四等巡査の野村と谷山だった。
「あー、辺見さんごわすか！」
野村と谷山は、しゃっちょこばって敬礼をした。
「よかよか。二等巡査も、四等巡査も、腹ンへるこつでは変りがなか」
「いやァ、屯所の賄いの飯では、腹七分目にもなりもさん。悪いとは知ッちょりもすが——」
「しーッ！　そいば云うではなか」
辺見が谷山の言葉を押えた。
明治七年一月十五日、太政官布告によって警視庁が誕生した。創立当初は巡査三千人。それが忽ち四千五百人、五千人と増員され、いまこの伝法院屯所——第五大区第八小区巡査屯所には、屯所長大警部大木市郎太以下、小警部二人、探索方三人、巡査四十五人がいる。
巡査は全員、屯所内で合宿することになっていた。着るものも、昼夜、勤務と非番とをとわず、制服に限られていた。
——およそ巡査は、謹厳以て身を処し、人民の範たらざるべからず……。



巡査服務規定の第一条だ。合宿も、制服も、人民の範となるためである。だが、腹がへっては、我慢が出来ない。更に、芋焼酎で鍛えられた薩摩ッポ巡査達は、酒ッ気なしでは寝るにも寝られない。だから、通用門の前にやって来るおでん屋や夜泣きそば屋を摑まえ、早や幕で一ぱい引ッかけると云うことになる……。

「——喜助、なんぼじゃ？」

ポッと、目もとを赤くした辺見がおでん屋にたずねた。

「ヘイ、三銭五厘で……」

「ウム……。谷山、野村、おはん達も早ようすッがよかぞ。組頭にみつかると、ただでは済みもはん。園田小警部な、郷里ン先輩じゃが、どげんにもならん石頭じゃ、おいは——」

喋り続けていた辺見が、ふッと言葉を呑みこんだ。

「辺見さん！」

「いけんしたとですか？」

谷山と野村が、いぶかしげに辺見を見た。

「あれじゃ……」

辺見が、十四、五間先きを指さした。

——石常……と書いたランプの軒燈が、狭い路地の入口を照らしている……。

その路地の入口に近く、荷車が一台置いてあった。

「あの荷車は、路地の出入りをふさいじょる。往来条例違反じゃ」

辺見の言葉に、谷山と野村は驚いたように顔を見合わせた。

「辺見さん……。そけんこっ、よかではごわはんか。この夜中じゃ、通行人の邪魔にもなりもはん」

「いや、そうはいかん！　あの路地は袋小路じゃ。その入口をふさいでは、万一出火でもあると、大きな障害になることは明らかじゃ。おいは、ちょッと見ちくる……」

突然、喜助が鍋を落した。——カランカランカラン……と、カン高い音が、伝法院裏のしじまを破って響く。

が、辺見は、ちょッと振返っただけで、荷車の方へ歩いて行った。

伝法院屯所の探索方詰め所へ、大願寺裏袋小路の女師匠殺しが急報されて来たのは、それから十分ほど後のことであった。

辺見は、打ちひしがれた様子で、探索方組長庄司小警部の前にうなだれていた。

「——おはん、酒を飲んじょるようじゃな……」

ガランとした探索方詰め所の高い天井に、庄司の声が反響する。——ここは本来、伝法院の庫裡なのである。

「——巡査は休み番といえども屯所内の宿舎に起居すべし……ちゅう規則がある。しかるにだ、おはんは屯所を脱け出し、酒を飲み、女を殺した！」

「違う！　女師匠の小春ば殺したのは、おいではごわはん。おいは小春の家へ行きもした。そいで、小春が殺されちょるのを発見したでごわす」

「ところが雇い婆ァのお豊は、おはんは小春の死体をはこび出そうとしちょッた……と云うちょる。

おはん、小春の死体を抱えちょったそうじゃな」
「いや、抱えちょったのではごわはん！　抱き起こしたところへ、お豊が戻って来たのでごわすッ」
「では、なぜ大八車などを用意したのじゃ？」
「そんこつは、先きほども申上げもした。おいは、荷車が路地の入口ばふさいじょるので、これを注意するため――」
「待て待て待てッ！　あの路地は袋小路じゃ。右側は、突き当りの大願寺の板塀まで石常こと石屋常吉の持ち家。左側は、入口のところが両替商人の小松屋仁吉の家。その裏が女師匠小春の家じゃが、これは小松屋の家作……。あの路地を使うのは、この三軒だけじゃ。となるとだ、大八車が路地の入口に置いてあったちゅうと、この三軒のうちで置いたわけじゃが、石常も両替屋の小松屋も知らんと云うちょる。では、小春が大八車を曳いて来たのかな？　イキな踊りの師匠が、江戸の――いや新東京の町のまン中を、エンヤラヤのヤ……と」
「庄司さん！　小春が曳いて来たかどうか、おいは知りもさん！　ただ、今夜おいは、路地の入口に荷車が置いてあるのを目撃しもした。こいは、間違いなか事実でごわす」
「その事実ちゅうことを、誰が証明する？」
辺見が、ハッと顔をあげた。庄司の、たたみ込むような言葉が続く――
「おはんは、車が置いてあった……と云う。その言葉が偽りでないことを、誰が証明してくれる。証人がなければ、いくらおはんが車はあった……と云うたところで――」
「おりもす！　証人はおりもす！　それも一人ではなかッ。二人……。いや三人でごわす」
「ほう……。それは誰じゃね？」

「それは――」
辺見が、グッと、言葉を呑みこんだ。
――荷車が路地の入口に置いてあったことは、谷山や野村も知っている。おでん屋の喜助も知っている筈だ。
しかし……。辺見にはその名前を口にする決心がつかなかった。もし、谷山・野村の名を表沙汰にすれば、二人は巡査服務規定を破ったことが明らかになる。
屯所の巡査達が、夜中に通用門を脱け出し、おでん、あんかけ、夜泣きそば、担ぎ寿司で空腹を満たし、時にはコッソリ酒を呑んでいることは公然の秘密だった。
だからと云って、この違法行為が明らかになれば、上司としては処罰をせぬわけにはゆかぬであろう……。
谷山・野村は、月給七円の四等巡査だった。これ以下には下りようのない最下級の巡査である。しかしも、この少い月給の中から、郷里の鹿児島へ仕送りをしていることを辺見は知っていた。
だから、辺見には谷山・野村の名を口に出すことが出来ない。
「――辺見さん、どうして名前を云わないんだよう！」
探索方詰め所の雑役婦お源婆ァさんがジレッタそうに云った。
「わたしにはわかるような気がします」
書き役の難波巡査が、シンミリした調子で云う――
「辺見さんが云う証人は、この屯所のものなのでしょう。ただ、それを云えばその巡査に迷惑がかかる。だから辺見さんには云えないのでしょう」

「しかし、場合が場合じゃ。辺見、云うてみい。云わねばおはん、苦しい立場に追い込まれるぞ」
辺見は、鼻下の大きな髭をピリリッと震わせると、かすれた声で答えた——
「おいが云えるこつはただ一ッでごわす。——小春ば殺したのは、おいではごわはん……」

2

伝法院屯所探索方の三羽烏——新宮寺京介、藤井弥太郎、それから門司勝之助は、小春殺しの現場——大願寺裏袋小路の小松屋の家作を調べていた。
京介と勝之助は小春の死体を調べ、弥太郎は雇い女のお豊から事情を聞いている。家の内外は勿論、路地の入口も屯所の巡査がかためていた。
「——辺見のバカもんがア！」
勝之助は、小春の死に顔を見詰めながら、呻めくようにつぶやいた。
「京介どん、おいと辺見は、いっしょに薩摩ば出て上京し、いっしょに巡査になりもした。伝法院屯所へ来たのもいっしょでごわす」
「勝ッつぁんの気持ちはわかるが、まだ辺見が下手人と決まったわけじゃない」
「そげん気休めば云うち貰うても——」
「いや、気休めじゃない。この突ッぱった腕をどう思う？」
小春の死体は、倒れたときのままの姿で、手脚を棒のように堅くしていた。
「京介どん、死体がこうなるには、息が絶えてから七、八時間はかかるのではごわはんか」

「夏場と違って、この寒さだ。幾らか早く突ッぱるとしても、まンず、五、六時間はかかるだろう」
とすると、逆に勘定して、小春は少くとも三時前に殺されたことになる。
「チェストッ！　こいで辺見は助かりもした！　辺見な、六時の点呼ン時には屯所におりもした！」
と、お豊を調べていた弥太郎が振返った——
「ところが、そうはうまくはゆかねェんだ」
「弥太郎どん！　おはんな、辺見ば罪人に——」
「そういきり立つなよ。あたしだって辺見を助けてェやな、屯所の面目もあるしよゥ。だけど——」
弥太郎はお豊をアゴでしゃくった——
「京介……。この婆アさんの話だと、辺見は昼間巡邏ンとき、ちょくちょくこの家へやって来た……と云うんだ」
「じゃ、この辺りは辺見の巡邏区域だったのか!?」
お豊が、京介へうなずき返した——
「はい、門跡裏から新堀のはずれまでが、辺見さんの受け持ちだと仰有っていました」
「それで、今日は？」
「今日は六日でしょ。六の日は休ませて貰うことになってますので、娘ンとこへ行こうと思って路地を出ると、丁度そこへ辺見さんが巡邏でやっておいでした」
「そりゃァ幾時頃だ？」
「二時ちょいと過ぎでしたよ」
「何か辺見と話をしたか？」

「ええ……。根津の娘ンとこへ行くって……。すると辺見さんが、――それでは師匠がネズミにひかれんよう、わしが番をしてやる……ッて」

勝之助が、ガッカリしたように溜め息をついた。――二時過ぎと云うと、小春の死体が固くなる時刻と一致するからだ。

「こいつァまずいや……」

弥太郎が、――もういけません……と云いたげな顔を勝之助へ向けた――

「田舎者の情事と梅雨どき雨は、いつまでもジメジメとしつこくッていけねェからなァ」

「弥太郎どんな、辺見が小春に惚れちょったと云うでごわすか？」

「ご覧の通り、小春はいい女だ。遊芸の師匠で、女のひとり暮らし……。お豊婆ァさんの話じゃ、旦那や情夫らしい男はいなかったと云うことだ。そんな女が自分の受持ち区域内にいる……。辺見でなくたッて、ちょいと、ちょッかいを出してみたくなる。それが人情てェもんじゃねェかなァ」

「そいで、辺見が二時過ぎに、小春ば殺した……ちゅうでごわすか？」

「お豊が娘ンとこへ行っちまった。あとには小春がただひとり……。で、まア辺見は、ソッと小春の袖を引いてみた。ところが、ポーンとヒジ鉄砲を食わされちまった。根が気の短い薩摩ッぽだ。カーッとなって、あと先きの考えもなく小春の首をグイッ……」

「昼のうちに殺した女のところへ、なぜ夜になって――」

「おッと、そこまで云わなきゃならねェのかい？　決まってるじゃねェか。辺見は絞め殺した小春の死体を奥の間にかくして一度屯所へ戻り、暗くなってから死体をどっかへ移すつもりで大八車を曳いてやって来た……」

「弥太さん……」

その時まで黙っていた京介が、ふッと顔をあげた――

「実はいま、その大八車の持ち主を浅吉に洗わしてるんだが……」

「知ッてるよ。さッきお前ェが、車におした鑑札の焼印を調べてから、浅吉をどッかへ飛ばした……。あたしゃ見ていたよ」

その駒形の浅吉が、息をはずませて戻って来た。

「あ、旦那方。あの荷車の持ち主がわかりゃしたよ。三ノ輪の八百屋藤庄ですが、きょうの夕方盗まれたそうです」

「夕方!?」

嚙みつくように、勝之助がたずね返した。

「ヘェ……。薄暗くなりかけた頃にはまだ車はあったそうで……。それが、店を片づけようとした時にはなくなっていたから、盗まれたのは五時から六時の間……と藤庄では云ってるんですが……」

「京介どん！　弥太郎どん！」

勝之助が、すがりつくように、京介と弥太郎の顔を見た――

「辺見な六時の点呼ン時には屯所に――」

「わかったよ、勝之助！」

弥太郎が、苦が笑いをした。

「五時過ぎに三ノ輪にいたとすると、六時の点呼にゃ出られねェと云いてェんだろう」

「それに、日が暮れたとは云え、制服の巡査が大八車な曳いて歩くち云うことな、まずまず出来るこ

つではなかでごわす」
「しかし、夜道だ。それも、三ノ輪から入谷田ンぼ、新堀河岸と辿れば、通行人もまばら。人目につかねェだろうよ」
「いや、おいならもっと手近なところの車ば盗みもす。点呼の時刻を気にしながら、人目につくのを恐れながら、わざわざ三ノ輪まで行くこつはなか！」
二人が激論をしている間に、京介は家の中を調べて廻った。
お定まりの遊芸の師匠の家の構え、格別変ったところはない。ひとわたり座敷を調べた京介は、台所へ入って行ったが、すぐ雇い婆ァさんのお豊を呼んだ。
「なんだか煎じ薬のような匂いがするが……」
「あー、サフランでしょう……」
お豊は、流しの上の棚から、大きな紙袋を取りおろすと、中から、ひからびた干し草のようなものを摑み出した。
「サフランとは、漢方の薬草か？」
「さア、薬かどうか知りませんけど、これを煮出して飲むと、声がよくなるとかッて……」
「小春は飲んでいたのか？」
「さア……。あたしはお師匠さんがサフランを飲んでるところは一度も見ちゃアいませんけど、六の日のお休みで遊びに行って返ってくると、プーンと強い匂いが流れていたりして……」
「さッきお前は、小春には旦那も情人もなかった……と云ったな？」
京介が突然話題を変えた。

「ええ……。だって、一度もそんな男を見かけなかったし、お師匠さんは、めったに外出をしませんでしたからねェ」
「しかし、お前が休む六の日に男が来てたとすると、どうなる」
「六の日にですか……？」
お豊が、ふッと眉を寄せた。
「じゃ、あたしが休む日に限って匂っていたお酒の匂いは……。男のひとが来ていたのかしら……」
「小春はいける口か？」
「いいえ、まるッきし駄目でした……。ですから、お酒の匂いはしていても、お師匠さんは素面でしたよ」
浅吉が、京介に並んでお豊にたずねた——
「お前ェ、どれくれェ小春ンとこにいる？」
「かれこれ三月になりますよ」
「誰の世話で来た？」
「雷門前の桂庵……。相模屋さんのお世話なんです」
浅吉が京介を見た。——どうしましょう……と問いかけている。京介がうなずいた。——相模屋を調べて来い……と命令したのだ。
浅吉が出て行くと、弥太郎が死体の傍らから立ち上った——
「小春は幾つだった？」
「二十四でしたよ。来年は亥年で、ご自分の干支だから、力を入れて稼がなきゃアと仰有ってました

のに……」
お豊が、ソッと目頭を押えた……

3

京介が、吾妻橋ぎわの紅梅そばで天プラそばをすすッているところへ、駒形の浅吉が訪ねて来た。
「ご苦労だったな。どうだった？」
「それが、桂庵の相模屋じゃ、小春ンとこは札付きでしてね」
「と云うと？」
「ヘェ、どんないい婆ァさんを世話しても長続きがしねェ、長くて四月、短けェのは一ト月でヒマを出されるてンで……。いまいるお豊も、そろそろ追い出される頃じゃねェかと相模屋じゃ噂をしていた……てエ話なんで」
「気にいらないなァ！　小春はなぜ、度々雇い婆ァさんを入れ替えたんだろう？」
「ズバリ云って、小春にゃ、何かひとに知られたくねェ内証ごとがあった……てエのはどうです？」
「知りたいのは、その内証ごとだ」
「あッしもそれを考えてみました。もしかすると、夜中に小春の首がニョロニョロと五、六尺ものびる――」
「まさか！」
「で、ねェとすると、やっぱり男……。小春は飛んでもねェ男を情夫にしてたんじゃねェでしょうか？」

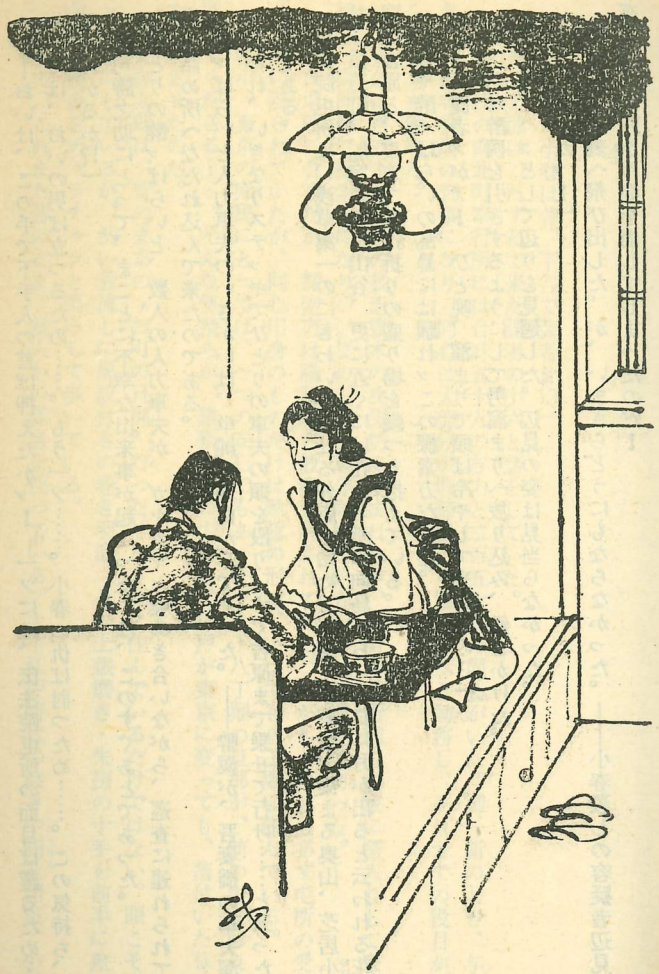
「たとえば？」
「たとえば、太政官政府の大官とか、人相書きの廻った大泥棒とか――」
京介が思わず吹き出した。新政府の大官と手配中の泥棒とはずい分かけ離れたたとえだった。
ガラリと障子戸をあけて、紅梅そばのおかみお富の妹――芸者の小梅が寒そうに座敷着の肩をすくめて戻って来た。
「おや、京介旦那！」
小梅は、寒さも忘れて、嬉しげにニッコリ笑う……。京介と小梅は同じ深川の裏長屋育ちで、つまりは幼な馴染みだ。京介が御一新のおかげで浪人暮らしから抜け出して巡査になり、深川屯所の探索方になった頃、小梅はやぐら下の売ッ子芸者になっていた。
ところが、京介が伝法院屯所へ勤め替えになると、小梅はあッさり看板を返して浅草から褄をとって出た。
早く云えば、小梅は京介のあとを追って、深川から浅草へ鞍替えしたと云うわけである。――実の姉のお富が、伊之助と云うおひと好しのそば職人と世帯を持ち、吾妻橋ぎわで紅梅そばと云う店を持っていたのも小梅には好都合だったに違いない。
「――小梅……」
京介は、そばに寄り添った小梅の両手を、ソッといたわるように握りしめた。
「冷たい手だ……。あまり無理をするな」
「おや……、嬉しがらせて……」

「本心だぜ、おれは！」
「だったら早く、おかみさんにして下さいよ」
「二等巡査新宮寺京介の妻お梅……か。月給九円だぜ」
「知ってますよ」
「――月給九円じゃ三度の飯もクエン……と云うわけだ」
「あたしが稼ぎますよ」
「冗談云うなよ。警視庁巡査が女房を芸者にしておけるかよ」
「ううン、小唄か踊りの町師匠をしたッて、四円や五円は稼げますよ」
「町師匠？　あ、肝腎のことを忘れてた……」
京介は背広のポケットから、枯れたサフランをとり出した。
「こいつを知ってるかい？」
「なんだろう？　センブリかしら？」
「サフランだよ。こいつを煎じて飲むと、声がよくなるそうだが……」
「おや、そう!?」
「お前だって声をよくしたいだろう？」
「そりゃアそうよ。だから、川ッ風の吹きつける物干し台で寒声をとったり、黒豆を煎じて飲んだりするんだけど……。一体そのサフランとかで声をとったのは、どこの誰なんです？」
「大願寺裏の袋小路に住んでた小春ッて師匠さ」
小梅がキョトンとした顔で京介を見上げた。

「住んでたッて、いまはどッかへ行っちまったの？」
「六、七時間前に、あの世へ行ったんだ」
小梅が、ゴクリと生唾を呑みこんだ――
「殺されたんでしょう、そのひと？」
「頸を絞められてな……。なア小梅、遊芸の女師匠は、世話をする旦那なしでもやっていけるものかなア？」
「さア……、小春師匠は幾つ？」
「二十四……」
「そうね、若くて、美しくッて、腕が確かなら、旦那なしでも結構やっていけるでしょうけど――」
小梅はツイッと京介に顔を近づけると、耳の中へ、熱い言葉をささやいた――
「女盛りでしょ。男なしでやっていけるかしら……」
それから小梅は、ポッと頬の辺りを赤くして、シンナリと京介の手を握った。

その頃探索方詰め所では、勝之助と辺見が低い声で話していた。
辺見は、制服を脱ぎ、着物に袴をつけていた。――屯所長の大木市郎太大警部が、探索方組頭の庄司小警部に、辺見を徹底的に調べるように命じた。つまり、辺見は小春殺しの被疑者なのだ。
庄司は涙を呑んで辺見から官服を剝ぎとり、泊まり番の勝之助に訊問させることにしたのである。
「――門司……。勝之助よ。おいの武士道はもうすたりもした」
「いや……。おはんが潔白なれば、すたりもはん！」

「潔白じゃ！　無実じゃ！」
「じゃどん、状況な、おはんに不利じゃ。きょう、二時か三時頃、おはんな巡邏中に小春の家へ侵入し――」
「違う！　おいは、ひとり暮らしの小春の様子ば見に行っち来ただけじゃ」
「そげんこつは、おはんが小春の家を訪ねる理由にはなりもさん！　――巡査は巡邏中みだりに民家に立ち寄るべからず……、こいは巡査服務章定ン中に規定されちょるこつじゃ。状況は、小春に惚れちょッたおはんが、雇い婆ァさんが出て行くのを見届けた上、あの家に行った。しかし、小春はおはんの云うことをきかん。おはんはカッとなり――」
「違う違う違う！　おいは小春が好きじゃった！　が……、好きじゃと云うたこつはなかッ！　おいひとりの胸に納めていたことじゃ」
「辺見……」
勝之助は、辺見の手を握った――
「おいは、おはんを信じちょる。京介どんも、下手人は他にありと考えちょる」
「新宮寺さんが!?」
「そうじゃ。じゃどん、おはんが下手人ではなかち証人も証拠もなか……。いや、小春殺しはあとに廻わすとして、大八車を盗んだのがおはんではなかちゅうことだけでもはっきりすれば、おはんに集まっちょる疑いは半減する。おはん、庄司さんに、証人が二人いるち云うたそうじゃが――」
「勝之助ッ！　それは云うわけにはいかんのじゃ……」
辺見は立ち上ると、苛立たしげに、詰め所の中をせかせかと歩き廻った。



「――おいは、この手で下手人の首ば押えたかッ！　一ツには、伝法院屯所の面目ば護るため……。一ツには、おいの男ば立つるため……。もう一ツ……。小春の仇ば討つため……。この気持ち、おはんにわかるか!?」

門司勝之助にとって、まことに不幸な出来事が起こったのは、このすぐあとであった。

ひとりの酔ッぱらいと、数人の人力車夫が、ガヤガヤと喚めき合いながら、巡査に連れられて探索方の詰め所へなだれ込んで来たのである。

酔ッぱらいと人力車夫のいさかいは、単純な理由からであった。――酔漢が、吾妻橋の車夫溜まりへ現われ、いきなりステッキでひとりの車夫の頭を殴り、すぐ吉原まで乗せて行け……と云ったと云うのである。

伝法院屯所は、浅草第一のにぎわいを見せる仲店を始め、矢場・水茶屋の集まる奥山、芝居小屋の並ぶ猿若町、船宿の多い山谷、更に近くには花の名所の向島から、晦日に月が出ると云われる花魁天国の吉原と、東京でも指折りの盛り場を幾つも抱えている。

喧嘩や酔っぱらいの乱暴には馴れッこの探索方だった。

「――馬鹿者ンがア！　ひと晩、溜まりで頭ば冷やして来いッ……」

勝之助は酔漢を引きずるようにして男溜まりへ放り込み、鍵をかけた。

そして、ハッとして辺りを見廻した。辺見の姿は見当らなかった。

「――しまったッ！」

勝之助は、表へ飛び出した。が、いまさらどうにもならなかった。――小春殺しの容疑者辺見二等巡査は、屯所から姿を消してしまったのだ！

4

「――じゃ、小春は昔、下谷で芸者を!?」

藤井弥太郎は、たずねて来た諜者の小六と話をしていた。

江戸時代の南北町奉行所には合計五十人の与力と二百五十人の同心がいた。御一新のとき、与力の多くは裁判役所の判事になり、同心は大部分が取締組から警視庁へと勤務し、それまでの役目がらから探索方を勤めた。

弥太郎は百五十石どりの貧乏旗本の次男坊に生まれたが、南町奉行所同心の家に婿入りして家督を継ぎ、御同様に探索方になり、いまのところ京介同様月給九円の二等巡査であった。

巡査は屯所に合宿だが、探索方は職務がら散宿を許されていた。しかし、それも必ず屯所の受持ち区域内に限られていたが、同心出身のものだけは黙認の形で、いまでも八丁堀に住んでいる。

それが、東京の庶民にとっては、一つの安心でもあった。――八丁堀の旦那が、前のままおれ達を護ってくださる……。そんな気持ちが、維新の嵐の中でも、江戸が東京に変っても、落付いた暮らしを続けさせたのだ。

藤井弥太郎は、昔のままの〝お町の旦那〟だった。八丁堀に住んでいるだけではない。頭こそジャン切りにしているが、渋い着流しに黒紋付きの巻き羽織、その上銀磨き・朱房の十手を前半に差し、雪駄の裏金をチャラチャラと鳴らして歩いている。

そして、これまた昔のまま、幾人かの諜者を使っている。――江戸時代の渡り中間上州寅、小博奕

打ちの素走り伝助、女郎鞫師あがりのかわせみお滝……。こんな物騒な連中が弥太郎の見る目・嗅ぐ鼻になっていた。

今夜、八丁堀の弥太郎の家へネタを持ち込んだカッパの小六も、弥太郎が同心時代から目をかけている諜者のひとりだった。

小六のネタは、かなり弥太郎を喜ばせた。

「ヘエ、小春は春奴と云う名で、下谷の同朋町で左褄をとっていたんですよ」

「春奴？」

弥太郎は、ちょッと奥の方へ気を使ってから、首を傾げ、低い声で云った——

「同朋町じゃ、おれもちょいちょい遊んだが……」

弥太郎が声を殺したのは、家付きの女房歌江に聞かれたくなかったからだ。

「春奴ッてェ女は知らねェなア」

「なんでも二年ほど前、半歳ほど出てたんだそうで……」

「半歳!?　それじゃ顔を合わさなくても不思議はねェなア。同朋町だって、百二、三十人芸者がいるだろうからな」

「それにしても半蔵と云うのは短いじゃありませんか」

「なる程……。誰かに落籍されたのか？」

「誰でしょうねェ」

「バカ野郎！　それを調べあげて来るのが諜者の役目じゃねェかッ」

「仰有いますがね、世の中こう諸式が高くなっちゃア、あたし達ァ三度の飯が食えねェんで……。飯

を食わンきゃ腹はピーピーでしょう。腹がピーピーだと、そこはそれ、いくら役目でもそうそうは飛んで歩けませんよ、もし飛んで歩かんきゃアならないンなら、まンずまンず腹ごしらえ——」

「わかったよ……」

弥太郎は舌打ちをした——

「いつになったら、その丼飯根性がなおるんだろうねェ」

「へへへ……、そりゃアはッきりしてますよ。世の中がもう一度ひッくり返って、太政官政府なんかぶっつぶれてしまやア——」

「馬鹿野郎！　なんてェことぬかしゃアがるんだ……」

弥太郎は振返って、襖越しに女房の歌江へ声を掛けた——

「おい、五銭ばかり出してくれ……。小六にそばでも食わしてやらなきゃア、この野郎動かねェんだ。——おい、歌江……。聞こえてるのかい？　五銭ほど——」

「こちらは、その日その日の暮らしで手一杯でございます！」

硬い、あらたまった声が跳ね返って来た。

「手一杯たって五銭や六銭——」

「あなたがお出しになればよろしいでしょう」

「あなたがッて、おれは持っていねェから——」

「ホホホ……、御冗談はおよし遊ばせ。下谷とか同朋町とかで芸者遊びをなさるあなたさまが、五銭や六銭……」

弥太郎は、ギクッと声を呑んだ。気の小さい小六は、もう尻をおッ立てて、逃げ出す用意をしてい

る。

ただでさえ女房はおッかないのだが、わけて養子、入り婿はつらい……。

こんな行き詰まった、雨か嵐かと云う場面が、飛び込んで来た駒形の浅吉によって救われた！

「旦那ッ！　へ、辺見さんが逃げましたッ！」

「辺見が!?　泊まりは勝ッつぁんだろうッ？」

「へイッ。門司の旦那は、申しわけに腹を切ると云って、詰め所は大騒ぎですよッ」

「そいつァ大変だッ！　おいッ、歌江ッ！　出役だッ！　今夜は戻れねェかもしれねェぞッ！」

小六が、ホーッと、溜め息をついていた。

弥太郎が探索方の詰め所へ顔を出した時には、屯所長の大木大警部を始め、探索方組長の庄司小警部、巡邏方組長の園田小警部、それに新宮寺京介、門司勝之助が揃っていた。――勝之助以外は、全て、急報によって駈けつけて来たのだ。

京介は、庄司の席のうしろにはり出された大願寺裏袋小路の見取り図をジッと見詰めていた。

「庄司さん、わたしはもう一度、小春の家を調べてみます」

「しかしだ、新宮寺……。小春の家を調べたところで、辺見がどこへ逃げたか、わかる筈がないじゃろう」

「庄司さんは、辺見巡査が小春を殺したとお考えですか？」

「そうは考えとらんよ。寧ろじゃね、大八車を盗んだのが辺見ではなさそうな点などからだ、わしは辺見を白と見ておる」

「わたしもそう考えます。とすれば真の下手人さえ捕まえれば、放ッておいても辺見は自ら現われます」

「しかし、小春の家は、もう充分調べたのじゃろう？」

「まだ見落しているものがあるかもしれません。それをみつけ出したいのです。それに……」

京介が一同を見廻した――

「もしかすると、辺見巡査をさがし出す手掛りが摑めるかもしれません」

「京介どん！」

勝之助が、嚙みつくような表情で顔をあげた――

「小春の家ば調ぶると、なして辺見の居どころの手掛りが――」

「勝っつぁん……。辺見のことは、よく知っていると云ったね？」

「たいがいのこつなら知っちょる」

「東京に、辺見の身よりの者は……」

「いや、身寄りなどひとりもなか！」

「親しい友達は？」

「屯所ン同僚の外は、友達らしか友達はなか」

「そうなると、旅籠か怪しげな女のところにでも隠れる……と云うことになるのだが、それには銭がなければならない」

「ソやア、辺見は制服を脱いで着物ンば着ちょった。銭など一文も持っちょりもさん」

「となると、寺か社の床下ででも寝るより行くところはない。幸か不幸か、小春の家の近くは寺ばか

りだ」

弥太郎が京介へ顔を向けた——

「小春ン家へ近い寺……と云うわけがあるのかい？」

「辺見が勝ッつぁんに云ったそうだ、——屯所の名誉のため、自分の面目のため、更に小春の仇を討つため、是が非でも下手人をとッ捕まえてェ……ッてね。となると、辺見も小春の家から真の下手人をさがし出す手掛りをみつけようとするに違いない……」

「だから、小春ン家の近くの寺にでも隠れてるだろう……と云うのか？」

「気に入らないか？」

「ズーンと気に入ったよ。あたしもいっしょに小春ン家へ行くぜ……」

それから弥太郎は、ジッとうつむいている勝之助の肩をポーンと叩いた——

「しっかりしろよ。もっと辺見を信じてやるんだ。辺見はお前ェに腹を斬らしてまで逃げ廻るようなケチな男じゃねェよ」

5

袋小路の入口には巡査が二人、カンテラを持って立っていた。

路地の奥からは、読経の声が聞こえて来る。

「——小春ン家に、坊主が来てるのかい？」

弥太郎が巡査にたずねた。

「はア、身内ンもンと、近所のもンが集まり、こン先きの東光寺の和尚が来ちょりもす」

巡査のひとりが、薩摩弁で答えた。

警視庁巡査の三分の二は薩摩士族だった。——しかも、幹部は警視総監川路大警視を始め殆んどが鹿児島出身……。伝法院屯所でも屯所長大木大警部、巡邏方組長園田小警部は薩摩。僅かに探索方の組長庄司孫右衛門だけが、系列から云えば賊軍側の会津士族……。かつて東北六藩の盟主として官軍と戦った会津藩の江戸留守居役だった庄司だが、いまでは、会津弁を押えて、薩摩言葉を使おうとしている。

つまり、それほど巡査には薩摩人が多かったし、鹿児島弁は巡査言葉になっていた。と云うことは同時に、——鹿児島弁を喋るからその巡査は薩摩士族である……とは云えないわけなのだ。

「身内!?」

京介が巡査にたずね返した。

「はア、お信ちゅう女ごわす。小春の従姉ちゅうこつで……」

「近所のものとは、石屋や両替屋か？」

「石常夫婦と、両替商人の仁吉と、不動堂の行者南天坊一雲ごわす」

「南天坊一雲？」

すると、ついて来ていた駒形の浅吉が口を開いた——

「この袋小路の向う……。つまり板塀一枚向ッ側は——」

「大願寺じゃないか」

「そうにゃ違いないんですがね、大願寺の境内に、虫食い不動ッてェ堂がありますんで……。本当は

千寿院てェんですがね、南天坊てェなア、そこの堂守り……。小春の家とは塀を挟んで背中合せッてわけですから、南天坊も通夜に来てやったんでしょう」

読経の声が切れた。通夜の枕経が終ったのだ。やがて六十近い老僧が出て来た。これが東光寺の和尚なのだろう。

入れ違いに、京介、弥太郎、勝之助、浅吉の四人が入って行った。

巡査が云ったように、男が三人と女が三人、小春の枕の前に坐っていた。——石常夫婦、小松屋、虫食い不動の南天坊、雇い婆ァさんのお豊、もうひとりが小春の従姉のお信なのであろう。三十五、六の女だった。

勝之助は、ジロリと一同を睨むと、台所から押入れの中まで調べた。だが、辺見の姿は見当らなかった。

「——小春の従姉だそうだな？」

京介がお信にたずねた。

「はい……。両方の母親が姉妹でした。あたしは、お春ちゃんを、実の妹のように思ってましたのに、こんなことになって……」

お信は両手で顔を押えた。

「身寄りはお前だけか？」

「二人共ひとりッ子だもんですから……。これであたしは、本当のひとりぼッちになってしまいました」

「しかし、小春には男がいたはずだが……」

「男のひとが!?」

お信は、ハッとしたように顔をあげた。

「お前、知らないのか？」

「初耳ですよ。お豊さん、お前さん、知っておいでだったかい？」

お信の言葉に、お豊が困ったように京介を見た。

と……、弥太郎がズイッと前へ出た——

「小春は下谷の同朋町で芸者に出ていた。春奴ッて名だ……。そうだな？」

「は、はい……。でも、随分前のことでございますよ」

「なアに、二年足らず前だ……。が、半歳余まりでやめている。そうだな？」

「はい……。それが、どうかしたんでしょうか？」

「男は誰だ？」

「え？」

「小春に芸者の足を洗わせた男だよ」

「それは……」

お信は、おびえたように一座を見廻したが、やがて、低い声で答えた——

「あたしは、知らないんですけど……」

「小春を実の妹のように思ってるんだろ？」

「でも、あたしは去年の春まで、六、七年川越にいたんです」

「川越!?」

「はい……。御一新の騒ぎンとき、亭主といっしょに川越へ……。川越は亭主の郷里だったのですけど、一昨年の暮に死にました。それであたしは、久しぶりに東京へ帰って来たんです。だから、お春ちゃんにどんなことがあったのか知りませんし、お春ちゃんも、話してくれなかったものですから……」

この話は、一応筋が通っていた。

弥太郎は、お信の口から小春の男出入りが浮かんでくると考えたのだが、失敗だった。

お前、よくここを訪ねて来たのか？」

京介かかわって、お信にたずねた。

「月に一度や二度は来ましたよ。たったひとりの従妹ですから……」

「じゃ、そこにいるお豊とも顔馴染みッてわけだな」

「はい、お豊さんには、来る度にお世話になりましたよ」

「小春は何か云っていなかったか、お豊のことを？」

お信は、言葉の意味を解しかねて、首を傾げた。

「お豊は、ここへ来て三月余りになる。ところが小春はこれまでに、四月以上同じ婆ァさんを使ったことがない……。お豊もソロソロヒマを出される頃になっていたわけだ」

「でも、あたしは何も聞いていませんよ」

「そうか……。では、これまでの雇い婆ァさんが何故やめさせられたか……。そのわけが知りたいんだが……」

「さア……。別にわけも理由もなかったんじゃありませんか。お春ちゃんは新らしもの食い……。それだけのことだと思いますよ」

「お前は小春を実の妹のように思っている……と云った。だが小春は、お前のことを、それほど親しくは思っていなかったようだなァ」

京介が、珍らしく皮肉な言葉を投げつけた。

凄まじい断末魔の喚めき声が聞こえて来たのが、その時だった！

「なんだッ、あの声はッ!?」

弥太郎が、先頭になって小春の家から飛び出した。

「――奥でござる！　奥の方から聞こえもしたッ！」

路地の入口に立番していた巡査が、呼びながら駈け込んで来た。

十分後に、奇妙なところから辺見二等巡査の死体が発見された！

袋小路の突き当りは、大願寺の板塀だが、小春の家と両替商の小松屋の建物の間に、もう一ツ、三尺巾ほどの狭い路地がある。この路地は、小春の家をカギの手に囲んで、裏で大願寺の板塀にぶッつかっている。

板塀の下には穴があいていた。地面に接して、もろくなった部分を、もしかすると、犬あたりが掘ったのかも知れない。――いまは、かなり大きな穴になっている。

辺見はその穴を、大願寺側から体半分、はい出して来た恰好で息絶えていた。

「――辺見ッ！　お前やァいけんして、こげん姿にッ――」

われを忘れて辺見を抱え起こそうとする門司勝之助を、京介が押えた。

「――勝っつぁん、落付くんだ。おれについて来い……」

京介は、浅吉と巡査を見張りに残し、弥太郎、勝之助といっしょに、路地を出てグルリと表をひと廻りして大願寺の境内へ入って行った。

とっくに真夜中を過ぎていたが、冴え冴えとした寒月が中空にかかっていて、境内は意外に明るかった。

辺見が殺されている場所はすぐわかった。——虫食い不動の千寿院がめじるしになったからである。

「——こいつァひでェや！」

巡査から借りて来たカンテラで死体を照らした弥太郎が、思わず、叫ぶように云った。——辺見は、右の脇腹を抉られていた。

「可哀そうに！　これじゃ辺見は、文字通り手が出せねェわけだ」

弥太郎の言葉に、京介がうなずいた。

辺見は、塀の穴から向う側へ頭と両手——胸辺りまでを出したところを刺されたのだ。——全く亀の子のような恰好で、手足をひきつらせて絶命したことであろう。

「辺見のバカ ンがァ！」

勝之助が、キリキリと歯噛みをするような調子で云った。

「うしろば尾行られちょったのに気付かなんたら不覚かァ……」

「違うな、勝ッつぁん……」

京介は首を横に振って、カンテラで地面を照らした。

塀ぎわの土はやわらかだった。——穴にほど近いところに、ひとかたまりの、下駄と草履の跡があった。

「勝ッつぁん。辺見の下駄を持って来てみろ」

云われるままに勝之助が、死体の足もとに飛んでいる下駄を拾って来た。

「どうだい、ピッタリ合うじゃないか」

「それがいけんしたちゅうでごわすか？」

「辺見は、誰かとここで立ち話をした……。その相手は草履をはいている」

「それで？」

京介は、無言でカンテラを移動させた。

草履の足跡は、立ち話をしたところから、死体のすぐ横に近づき、そこから千寿院の方へ消えている。

「わかるか？　死体の横で、草履のあとは、グイッと爪先きに力が入っている。と云うことは——」

「そやつが辺見ば刺し殺したちゅうでごわすかッ!?」

「辺見は、安心し切っていたようだ。だから、恐ろしい敵の前で、塀の穴をくぐろうとしたんだ」

——旦那ァ……と、塀の向うから浅吉が呼びかけて来た。

「その野郎は一ッてェ、どこの何者でしょうかねェ？」

「わからないなア……。考えれば考えるほどわからなくなって来る。第一に、屯所を逃げ出した辺見は、どうやってその男と落ち合ったのか……」

「そりゃア、辺見さんの方から訪ねて行ったんですよ」

「——辺見には友達らしい友達はなかった……と勝ッつぁんは云っている。にもかかわらず、小春殺

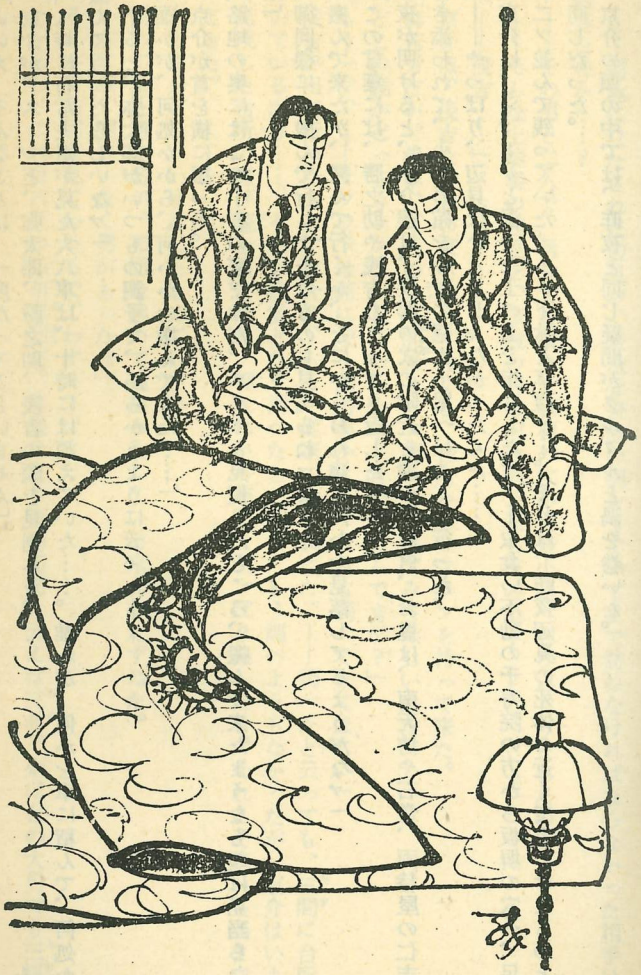
しの下手人になるかどうかで屯所を脱走した辺見が訪ねた相手とはどんな人物なのか……？」
「旦那……。こうなってくると、やっぱり辺見さんは、小春殺しに一枚噛んでいたんですかねェ……？」
「小春殺しの理由は？」
「無くなったものはねェようですから、物とりじゃありませんよ。とすると色恋……」
「浅吉……。お前幾年御用を勤めている。江戸御奉行所以来の岡ッ引きだろう……」
京介は、ゆッくり、冷たい言葉を続けた——
「かなわぬ恋で男が女を殺す。百のものなら九十九までひとりでやる。仲間をつくったりはしない……。殊に、そのために次ぎには自分の命が狙われる。そんな仲間と云うのが考えられるか？」

6

京介達四人の探索方は、おかしなことから小春の家で一夜を明かすことになった。
明る朝、夜明けと共に辺見巡査が殺された塀の穴附近を調べる……。それには小春の家が一番近かったし、そこに探索方が頑張っていることで、下手人が何かを企てるのを防ぐことが出来るからである。
両替商人の小松屋仁吉、石屋の常吉夫婦や千寿院の南天坊も通夜をしていた。従姉のお信と雇い婆ァさんのお豊は勿論のことである。
その席で、京介が誰にともなく、ふッとたずねた——

「——今夜、路地の入口に大八車が置き放しになっていた……。この車がいつ頃からあったか誰か気付いたものはないか？」
「あたくしんとこは商売柄、日が暮れると店を閉めてしまいますので……」
記憶がない……と両替屋の仁吉が云った。
「石常はどうだ？」
「あたしんとこも、夜はめったに客の来ねェ商売ですからねェ……。でもねェ、十日余り前にも、荷車が置いてあったことがありますよ」
「やはり路地の入口にか？」
「ヘェ、今夜のと同じところに……。なんだッて邪魔ッけなところに置きやがッて……と思いましたからねエ」
「いつのことだ？」
「さア……。いつだッたッけ……」
すると石常のかみさんが口を開いた。
「先月の十六日の夜ですよ」
「いやにはッきりしてるが、間違いはないだろうな？」
「だって、十六日は六毘沙……、ほら、毘沙門さまの縁日なんですよ」
すると、石常もピシャリと膝を叩いた——
「そうそう！　あッし達は二人で、縁日から帰って来たんですよ。すると、路地の入口に荷車が——」
「何時ぐらいだった？」

「さア……　かれこれ八時でしたかねェ」
「それから車はどうなった？」
「知りませんねェ。格別気にもしなかったし、いまのいままで忘れてたくらいですからね……。しかし、誰かが曳いていったことにゃ違いねェですよ。その後車を見かけませんからね」
真夜中を過ぎると、石常夫婦と両替屋の小松屋仁吉は半通夜で帰って行った。
残ったのは探索方四人とお信、お豊、南天坊の七人になった。
お豊が、おずおずと京介にたずねた——
「わたしは、どういたしましょう？　もうここにいるのは怖ろしくッて……」
「娘が根津にいたッけな？」
「はい……。でも、ひと先ず桂庵の相模屋さんへ帰りたいんですけど……」
「いいだろう……。娘のところでも、余り居心地はよくないのか？」
「そんなことはございませんよ。娘の亭主もよくしてくれますし……。だから、六ノ日の休みには、必ず根津へ行くんです。でも、まだまだ働けますからね、それで相模屋さんへ行って、新らしい奉公口をめッけて貰おうと思いまして……」
「わかった。すると、先月の十六日にも、娘ンとこへ行っていたわけか？」
「はい、十六日も二十六日も……」
「帰って来るのは？」
「年寄りの足でございます。どうしても十時を過ぎます」
「その時、路地の入口に大八車が置いてなかったか？」



「いいえ、そんなことは、一度だってございません」
京介が、スーッと、弥太郎、勝之助、浅吉の顔を見廻した。
「八時に石常夫婦が見た大八車は、十時には消えていた……。誰かが、何かを車に積んで、何処かへ搬んで行ったらしいなァ」
すると、弥太郎がいつもの調子で、からかうように云った——
「誰かが、何処かから、何かかを搬んで来た……」
京介が首を横に振った。
「路地の奥にはこの小春の家だけだ。ズイッと見廻したところ、搬んで来たようなものは見当らないな」
「御同様に、搬んで行くようなものも見当らねェよ」
「搬んで来たか、搬んで行くか、とにかくおれ達は何かを見落してるようだなァ」
この言葉には、勝之助や浅吉もうなずき返した。
夜が明けると、京介達は、板塀の穴の附近を調べ、お信、お豊は、南天坊や石常、両替屋の仁吉に付き添われて、小春の棺を今戸の隠亡小屋へはこんで行った。
「——やっぱり、辺見はひとりじゃなかったんだ……」
京介は、シットリと湿った土の上を指さした。——虫食い不動の千寿院の方から板塀の穴へ、足跡が二ツ並んで残っていた。——下駄と草履……。それは、昨夜辺見の死体の近くでみつけたものと全く同じだった。
京介の頭の中では、昨夜と同じ疑問がクルクルと渦を巻いた。

——窮地に立たされた辺見が、厳重な警戒の網をくぐってまで訪ねなければならなかった相手は、何者なのか……？
——その男と二人で、何をする積りで板塀の穴から袋小路へ忍び込もうとしたのか？
——そんな土端場の辺見を、草履の男は何故刺し殺したのか……？
「——浅吉……」
京介は、浅吉を小春の家へ連れて行くと、台所からサフランを持って来た。
「御苦労だが、浅草、下谷の生薬問屋を片ッ端から当ってみてほしいんだ」
「どこの誰がどっさりサフランを買ったか……を調べるんですか？」
「もう一ツ、——サフランは何に使う漢方薬か……。これも調べて来てほしい」
浅吉が出て行ったあと、京介は、もう一度家の中を調べた。——調べたと云っても、三間に台所がついているだけ……。それも幾度となく調べたところだ、もう調べようもなかったが、京介はいままで見残した台所の揚げ蓋をあげたり、押入れから布団を引ッぱり出したり、それこそ隅から隅まで調べてみた。
「——京介どん、いけんしたとでごわすか？」
戻って来た勝之助が、布団を眺めて腕組みをしている京介にたずねた。
「小春には、間違いなく男があったぜ」
「そいが、布団ば見てわかるでごわすか？」
「わかるね。これは八反の四布布団だ。普通ひとり寝の布団と云えば三布。余ほどの大男でも三幅半でいい」

「つまり、こいは二人寝の布団ちゅうわけでごわすか？」
「その通り……。しかも、下は八反、掛け布団は絹紬の裏に、表は縮緬。柄がまた折り鶴と来ている。遊芸の女師匠が一人寝するにしちゃア贅沢過ぎるし、おめでた過ぎる」
「そう云えばいま、諜者の小六が、弥太郎どんのところへ、小春のこつで報らせるこつがあるちゅうて来ちょるが……」
その言葉のとおり、板塀の穴の前で、弥太郎は小六から話を聞いていた。
「それが奇妙な男でしてね、同朋町へ遊びに来るときは、いつでも山岡頭巾をかぶっていたッてェんです」
「座敷ではとってたんだろう？」
「いいえ、座敷でも……」
「じゃ、芸者や仲居は、その男の面を見ていねェのか？」
「いや、顔は見せるんだけど、頭巾はとらねェてんで……」
「てエと、頭を見せたくなかったのかな？」
「だからね、あっしゃ、坊主じゃねェかと思うんですがね」
「頭を丸めていても、坊主たァ限らねェや。医者の中にも太鼓持ちにも坊主頭はいる。それにザンギリばやりだ。髷は切ったが髪が揃わねェ。それがなんとか見られるようになるまで頭巾をかぶる……なんてエのがザラにいる当節だ」
「全く、髷を切ったばかりの頭は見られたものじゃありませんからねェ」
「その男の名前は？」

「ちかんねェんですよ。同朋町じゃ、大無人先生で通ってたそうです」
「大無人先生!?　なんの先生でェ？」
「さア、旦那にもわかりませんか？」
「わかる筈が無ェだろ？　それで小春は、その大無人野郎に落籍されたッてェのか？」
「いえ、小春はもともと看板借りの自前だったんで、そこんところは格別のことはなかったようで」
「てエと、小春は大無人野郎に惚れてて、手前ェから芸者をよした。同朋町から姿を消したッてわけか？」
「早く云えばね……」
「それからどうした？」
「そんなことはわかる筈ねェでしょ！」
「筈がねェで済むかよ。小春と大無人とはずーッと続いてたのか、別れたのか？　別れたとするといつなのか？」
「旦那、あたしゃ腹がへってるんですから、そうガンガン怒鳴らねェで下さいよ」
「駄目だ。いまあたしが云ったことを調べて来なきゃ、丼もそばも食わさねェよ」

7

「――京介はモノ知りだがよゥ、こんなのがわかるかい？」
弥太郎ニヤーヤ笑いながら、京介と勝之助のいるところへやって来た。

「この人殺し騒ぎの中で、ひどく楽しげじゃないか」
「まじめなんだ、あたしゃ。いいかい、――大無人……てェなァなんのことだ？」
京介が呆れたように弥太郎を見上げた。勝之助は苦が虫を噛みつぶしたような表情だ。
「どうだ、流石の京介にも大無人はわからねェかな」
「わかる――」
「本当か!?」
「大無人とは一のことだ」
「――一……？」
「坊主の符丁だよ。大と云う字から人を無くすると、残るのは一だ」
「なる程……。じゃ、二は？」
「天無人……。三が王無棒、四は罪無非……」
「罪無非が四なんて坊主らしいねェ。五は？」
「吾無口……。おい弥太さん。大無人がどうしたッてェんだ？」
「なァに、大したことじゃねェよ。ちょいとそんな言葉が耳へ入ったまでのことさ」
町奉行所が明治になって市中取締組となり、更に警視庁と変遷しても、探索方の腕比べ、手柄争いには変りがなく、手持ちのネタは、めったに仲間に教えなかった。
谷山、野村の両巡査が、ウジウジと互いを押出すようにしてヒッソリと入って来た。
「あ……、門司さん……」
年かさの谷山が覚悟したように口を開いた。

「いけんした？」
「実は、昨夜、辺見さんが、ここへ来る前、屯所の裏門ンところでおでんば食うちょるのを、おいと野村が――」
「おでん!?」
「はァ、担ぎのおでん屋ごわす。おいん達が行ったとき辺見さんな、もう食い終っちょりもした。そして、屯所へ戻ろうとして、ふと、路地の入口の大八車に気付き、――こらいかん、交通条令違反じゃ――ちゅうて――」
「バカもんッ！」
勝之助が、憤然と立ち上った。
「辺見が云うちょッた証人とは、おはん達ンこつかッ？」
「多分、そうでごわしょう」
谷山に代って、野村が答えた。
「おはん達、なして、そンこつを昨夜ンうちに云わんかったのじゃッ？」
「しかし、それを云うには、おいん達が屯所ば脱け出し、酒ば飲んじょッたこつを云わねばなりもさん。そうすッと、厳罰ばくわされもす」
「昨夜云わずに今日云えば、罪が軽うなると思うちょるのかッ!?　それだけではなかぞッ。そんため辺見は――」
勝之助は唇を震わせ、声を詰まらせた。
「――あたしゃ、薩摩のことは知らねェよ」

弥太郎が口を開いた——

「が、噂に聞く薩摩人気質ッてェやつは、義を重んじ、仁を尊ぶ……とかッてェじゃねェか。辺見は間違いなく、そんな男だったようだな。お前ェ達の名前ェさえ云えば自分が助かるのに、殺されるまで口を割らなかった。ところで、お前ェ達も鹿児島士族だったッけな？」

「え、それは……。おい達も、いけんすればよかかと、昨夜から相談ば——」

「腰抜けがッ！」

出し抜けに勝之助がジダンダを踏むように畳を蹴った。

とたんに京介が、ふッと、眉を動かした。

「もういい……。お前達、屯所へ戻って謹慎していろ」

京介は谷山と野村を追い出すと、勝之助が足もとを指さした——

「勝ッつぁん、その畳をあげてみよう」

「床下ば調ぶるとでごわすか？」

「勝ッつぁんが足踏みをしたとき、ガチャッと妙な音がしたんだ」

京介と勝之助は畳をあげると、床板をはがした。

「あれ——！　なんでェこれは!?」

床下をのぞき込んで、弥太郎が驚きの声をあげた。

そこには、異様な恰好の外国徳利が、四、五十本横積みになっていた。——京介が聞いたのは、この積み重ねた徳利が崩れる音だったのだ。

「外国酒の容れ物さ」

「異国の酒徳利でごわすか？」

勝之助の言葉に、京介がうなずいた。

「ガラス・トクリさ」

「ビヤ酒の徳利か？」

今度は弥太郎がたずねた。

「いや、ビヤ酒じゃない」

京介はガラス・トクリをとりあげてラベルを見た。——江戸時代、深川の浪人暮らしの中で洋学を勉強した京介は、ミミズのような横文字が読めるんだ。

「これはブランデンの容れ物だ。これもブランデン。これはボルトワイン。こちらのは異国酒でもグッと高級のサンパン酒だ」

「こんな酒を小春は飲んでやがったのだろうか!?」

「飛んでもない！　ブランデン一本、一円五十銭から二円。ボルトワインがまンず五十銭。サンパン酒は一本三円はするだろう……。ここにある容れ物がざッと五十本……。仮りに一本一円五十銭として幾らになる？　七十五円だ」

「いけね！　あたしのお手当て八ヵ月分でも足りねェ」

「遊芸の女師匠が、どれほど稼ぐか知らないが、こんな贅沢な異国酒を、ジャカスカ飲めるとは考えられないな」

「と云うと、このガラス・ビンはどう云うことになるんだ？」

「おれ達が見落していたもの——大八車で搬び込んだか、搬び出そうとしたのが、実はこのガラス・

ビンだったのかもしれない」

明治五年の横浜見聞録によると、――洋人の酒は種類多けれど、何れも多分に飲みても酔うことなし。これわが国の酒とは異り、穀類には非ずして、ランビキにて果物より取りたる酒なれば、気は強れど醒めることは至って早し……とある。

当時の物価は、上白米一升が十銭五厘二毛、上酒一升二十銭、醤油一升十八銭、塩一升二銭三厘、油一升二十四銭……。ところがビールは一本二十五銭、ボルトワイン（葡萄酒）一本五十銭、ブランデンやリキュール酒、ウイスケとなると二円前後……。文明酒は高くついたわけだ。

そんな高価な酒の空き徳利が、どうして小春の家の床下におびただしく積み重ねてあったのであろう……？

京介達は、その謎を解けないまま、巡査を見張りに残して屯所へ引揚げて来た。

そして、パッタリ、正門の前で芸者の小梅に出ッくわした。

「あ、京介旦那！　丁度よかった……」

駈け寄って来る小梅には連れがあった。やはり銀杏返しの芸者姿だが、小梅よりはかなり年上のようであった。

「おれに用か？」

「耳よりな話なんですよ。――ちょッと玉千代姐さん……」

小梅は、うしろの年増芸者を呼んだ。

「京介旦那、この玉千代姐さんはね、一年半ほど前まで、ずッと下谷の同朋町に出ていたんですよ」

「有難い！　じゃ、小春のことを知っているんだな？」

玉千代が、大きくうなずき返した。

京介は、小梅と玉千代を探索方の詰め所へ連れて行った。

「まずたずねる……」

京介は玉千代を見詰めた――

「小春に男はあったかい？」

「ええ、あたしが知ってるのはひとりだけですけど……」

「どこの、なんてェ男だ？」

「不思議なおひとでしたよ。いつでも山岡頭巾で頭を隠して……。勿論、住んでるところなんかわかりゃアしません。名前もわからないんだけど、それじゃ何かと不便でしょ。それで、――わしのことは大無人と云え……ッて」

弥太郎が、しょッぱい顔で顎を撫でた。

「ネタが割れちまッちゃアしようがねェ。実ァさッき諜者の小六が、大無人野郎のことを持ち込んで来やがったんだ」

「住所や仕事は？」

「そいつがどうにもわからねェ。だがよ、頭巾で頭から顔を包み、坊主の符丁で名前を隠してるといやァ、まンずまンず和尚のかくれ遊び……と考えていいんじゃねェかなア」

すると玉千代が首を横に振った――

「いいえ、大無人さんは総髪でしたよ。お坊さんなんかじゃありません」

「総髪？」

京介が驚いてたずね返した。

「ええ……。いちど、春ちゃんとあたしは、大無人さんから舟遊びに連れてかれたことがあるんです。その時、歌の文句にもあるでしょ、――吹けよ川風、あがれよスダレ……ッて。川風で、大無人さんの頭巾の裾がフワーッとまくれ上ったとたん、項まで垂れ下がり、キッチリ揃えて切った髪が見えたんです」

「弥太さん……」

京介が弥太郎へ顔を向けた――

「玉千代姐さんは自分の目で見ているんだ。こいつァ坊主説はひッこめた方がよさそうだなァ」

「あー、あたしゃ最初から、頭を包んでても坊主たァ限らねェ。医者だって、太鼓持ちだって頭を丸くしてるやつがいる……と考えてたんだ。ところでそれが総髪となると、これまたいろいろいるなア。まず考えられるのが武芸の師範……」

「御一新この方、武術で芸者遊びが出来るほど景気のいい先生なんて考えられるかね？」

「とすると、易者……」

「それから？」

「医者……。大道講釈師……。山伏・行者――」

「行者!?」

京介、弥太郎、勝之助が、殆んど同時にハッと顔をあげた。

――虫食い不動の千寿院南天坊……、三人はその顔を思い浮かべたのだ。

「弥太さん、勝ッつぁん。行者なら大無人なんて符丁を知ってる筈だ。しかも、大無人とは一のこと。南天坊の名は一雲だ！」

その時、駒形の浅吉が、顎を突き出すようにして飛び込んで来た……。

8

「――下谷から上野とね、軒並み生薬問屋を訪ねましたよ」

浅吉は京介の前で声をはずませていたが、その声にはハリがあった。――思いがけぬネタを摑んだに違いない。

「なにね、サフランはなににきく薬だか、すぐわかりましたよ」

「いい声が出るのか？」

「いやァ、声なんかよくなりませんよ。サフランは胃袋の薬なんで……」

「胃の薬!?」

これは京介にとっても意外だったらしい。

「それだけか？」

「へェ……。その他の使い道と云えば、外国のことですがね、酒の色付けに使うそうですよ」

「酒の色付け……？」

「そうなんで……。異国酒にサフランの煎じ汁を混ぜると、トロッとした、黄色ッぽい、うまそうな色がついて、その上もともと胃袋の薬でしょ。体にも悪くねェ。だから、養老酒なんて云ってるそうです」

「養老酒ねェ……」
京介が出し抜けにニヤッと笑った——
「そうか……。そんなことだったのかア！」
「京介どん、そげんこつじゃったか……とは、いけんこつでごわすか？」
「早く云えば、小春の家の床下にあったガラス・トクリの謎が解けたのさ。——浅吉……」
京介は、再び浅吉へ顔を向けた——
「最近、サフランがかなりな量売られたッて話は聞かなかったか？」
「それがね、一ツだけあるんですよ」
「何者だ、そいつは？」
「サフランなんて、ここんとこ全く売れねェんだそうですよ。ところがこの一年ばかり、上野山下車坂の広仁堂てェ薬種問屋へ、時々サフランを買いに来るおでん屋があるんで」
「おでん屋!?」
「ヘェ、担ぎ屋台のおでん屋で、名前は喜助ッてェんだそうで……」
「難波ッ！　谷山と野村を呼んで来てくれッ。宿舎で謹慎している筈だ」
しばらくして、書役の難波巡査が、谷山・野村両巡査を連れて戻って来た。
「昨夜、裏門でおでんを食った……と云ったな？」
京介がたずねると、谷山が頭を掻いた。
「実は、おいは焼酎ば飲みもした」
「こらアッ！」

勝之助が嚙みついた——
「お前達は酒まで飲んじょッたのかッ!?」
「いや……、喜助は酒は持っちょりもさん。焼酎だけでごわす」
勝之助は、何をか云わんと、憮然としたが、京介は笑わなかった。
「おでん屋の名は喜助なんだな？」
谷山と野村が同時にうなずいた。
「辺見が大八車の方へ行ったとき、喜助はどうした？」
「何もしもさん……」
野村が答えた。
「いや、なにかした筈だ」
「しかし……、辺見さんが、大八車ばみつけ……、これはいかんちゅうて路地へ……」
「その時だ。喜助が何かをした」
「いや……、喜助は、——あー、鍋ば落して——」
勝之助がまた癇癪をおこして喚めき立てようとするのを、京介が押し止めた。
「その鍋には何が入っていた？」
「いや、空鍋でごわした」
「確かめたのか？」
「いやいや。カランカランと、でかか音がしもしたから……」
「わかった……。浅吉……」

京介は浅吉を呼んだ。
「喜助の家はわかるか？」
「聖天町辺りの長屋だそうで……。なァに行けばわかりますよ。引ッぱりますか？」
「昨夜の辺見の様子を聞きたい……と云ってな。サフランのことなんか云うんじゃないぞ」
呑み込んで飛び出して行った浅吉が、三十分足らずで、おでん屋の喜助を連れて戻って来た。
「――旦那……」
浅吉が、セカセカと京介を隅の方へ連れて行って、声をひそめた――
「驚きましたよ。喜助にゃ女房があるんで！」
「おでん屋だろうが、夜泣きそばだろうが、縁がありゃア、かみさんを持つだろうよ」
「あッしの喋りがまずかったんで……。喜助の女房は、お信ッて名前なんで」
京介も思わず目を見張った。
「顔を合わしたのか？」
「いいえ、お信は小春の葬いで隠亡小屋へ行ってる筈ですから……」
「待て待て。お信なんて、大して珍らしい名前じゃない。同名異人てェこともある」
「ただね、近所の噂じゃ喜助の女房のお信は、二年ほど前まで川越にいたそうですよ」
「小春の従姉のお信も、一昨年の暮まで川越にいたと云ってたッけ」
「もう一ツ、これも長屋内の話ですがね、この一年ばかり、時々、小イキな、見るからに玄人あがりらしい女が喜助ンとこをたずねて来たそうですよ」
「それが小春だと云うのか？」

「云っちゃアいけませんか？」
「いいだろう……。ヨシ、喜助をしめあげるか……」
京介は喜助を机の向う側へ坐らせた。
「喜助……。いま焼酎はいくらする？」
思いがけない質問に、喜助がキョトンと京介を眺めた。
「並じゃいけねェ。上物はいくらだ？」
「ヘェ、あたしは一合当り一銭二厘で仕入れて、一銭三厘で売っています」
「一合一銭三厘、一升十三銭、一斗で一円三十銭てェわけか。ひと晩に一斗売れれば十銭の儲けって勘定だな」
「へへへ……、御冗談で……」
喜助が卑屈な笑い方をした。
「ひと晩に一斗だなんて、売れる筈がありませんよ」
「だから、ブランデン、ウイスケに化けさせたか？」
喜助が、ハッと顔色を変えた――
「だ、旦那……。どうも仰有ることが……」
「焼酎にちょッぴり砂糖を入れて甘味をつける。それにサフランの煮出し汁を混ぜて色付けをすると異国酒ソックリだ。多分、その上に、本物のブランデンかウイスケを、おぼしめしだけ混ぜたかもしれないな。これを買い集めておいた異国酒の空き徳利に詰める。つまり、一本三合として、三銭九厘の焼酎が一円から一円五十銭のブランデンに化ける。おれ達は小春の家の床下から異国酒の徳利をみ

つけた。台所ではサフランに気がついた。そして車坂の薬種問屋で、お前がサフランを買いあさってるッてことを聞いた」

「旦那ッ……」

喜助が、ガックリと机の上に両手をついた。

「恐れ入りました……。確かにイカサマ・ブランデンを造ってたに違いありません。だ、だけど、小春師匠を殺したのは、あ、あッしじゃねェんです」

「わかってるよ……」

京介がクスリッと笑った。

「お前ェは屯所の裏門前でおでんの店を出し、見張りの役をしていた。すると、おでんを食った辺見巡査が大八車に気付いて路地の方へ行ったので、わざと鍋を落して大きな音させ、小春の家にいる仲間に報らせた……と、おれは思うんだが――」

「そ、その通りなんで！　あ、あッしゃただおどかされて、見張り役をやらされていただけなんで……」

「そうかい。可哀そうに、誰からおどかされた？　虫食い不動の行者南天坊にか？」

京介は、ことさらにさりげなく云った。が、――南天坊……の一ト言は、グサリッと、喜助の胸に突き刺さったようだ。

喜助は、身じろぎもせず、息を詰めて、うつむいている……。京介は、黙って、そんな姿を眺めていた。――待っていたのだ。喜助が決心をするのを根気よく待っていたのだ。

「――旦那……」

やっとのことで喜助が口を開いた――

「もう包み隠しはいたしません。存分にお調べを願います」

「お前が鍋で合図をしたとき、小春の家にいたのは？」

「南天坊と小松屋で……」

――うッ……と、勝之助がノドの奥で呻めいた。――小春の家に両替商人の小松屋仁吉がいた……。別の言葉で云えば、――小松屋もニセ異国酒造りの一味だった……。これは、京介にとっても、弥太郎にとっても思いがけぬことであった。

「わかるような気がするな。小松屋が元手を出し、南天坊がニセ酒を造り、お前が売りさばく」

「あたしはほんの走り使いなんで……」

「大八車は、こしらえたニセ酒を搬ぶためだったのか？」

「ヘェ……、あたしが、三ノ輪の八百屋からコッソリ……。どうも相済みません」

「お前ェの女房、お信の役割りは？」

「いえ。か、かかアは別に……。小春師匠の従姉なんで、その縁であたしも仲間に引きずり込まれたようなわけで……」

「小春を殺したのは、南天坊だな？」

喜助はちょッとためらったが、結局コックリとうなずいた――

「小春師匠も悪いんですよ。下谷同朋町以来の深い仲なのに、南天坊に別れ話を持ち出し、手切れ金でもあり、儲けの配け前でもありッてわけで、三百円よこせと云ったんだそうです」

「――だ、そうだ……なんて、他人ごとみたいだな」

「いえ、本当なんですよ。あたしは小松屋から聞かされて、ビックリしちまったんで、小春殺しにかかわりはありませんよ。旦那……、その後かかアのお信とも話したんですが、小春師匠はどうも、辺見さんの親切にほだされていたようですねェ」

京介が立ち上った——

「弥太さん、勝ッつぁん……。済まないが袋小路まで行って貰えないか……。もう南天坊、小松屋も今戸から戻って来てるだろう」

「よし来た！　ところで京介、お前ェはどうする？」

「おれはもう一ツしなきゃならないことがある……」

弥太郎と勝之助が飛び出して行くと、京介は喜助の前へ戻った。

「さ、話を聞こうじゃないか」

「え!?　あたしは何もかも、知ってることはすッかり申上げましたよ」

喜助が、ゴクリと生唾を呑みこんだ。

「辺見さんのことッて……」

「昨夜遅く、辺見は聖天町のお前の家を訪ねて行った——」

「い、いいえ！　おいでになりません！」

「行ったんだよぅ。辺見は、お前に証人になって貰いたかった。——おでんを食ったあとで、路地の入口に置いてある大八車に気付いた……。そのことを知っているのは谷山、野村両巡査とお前だ。谷山、野村は証人にするわけにはゆかない。そこでお前に頼みに行った」

「いいえ、あたしは辺見さんと会ってなんか——」

「お前は辺見を大願寺境内——虫食い不動の横へ連れて行った。多分、——証人にはなる。が、それよりも、小春殺しの下手人を捕まえたらどうだ。心当りがある……てなことを話したんだろう。ワラをも摑む気持ちの辺見は、安々とお前の言葉に乗り、板塀の穴をくぐろうとした。その時お前は辺見の脇腹へドスを——」

「だ、旦那ッ！　そりゃ無茶だッ！　あたしは正直に何もかも——」

「喋ったよ。ただ、自分に都合の悪いことは喋っていない」

「じゃ……、じゃ、辺見さんがあたしを訪ねて来たッて証拠がどこにあるんです？　あたしが殺したッて証拠があるんですかッ!?」

「あるな……」

京介が吐き出すように云った——

「辺見が殺されたとき、小春の家には、おれ達探索方の他に、南天坊と小松屋、お信がいた。つまり、ニセ酒造りの一味でいなかったのはお前だけだ」

「そ、そんなことは証拠にならねッ！」

「浅吉ッ……」

京介が浅吉を呼んだ。

「喜助の履き物を脱がせろッ」

「この草履ですか？」

「そうだ。それを持って大願寺境内へ行き、辺見の下駄の跡に並んだ草履の足跡と比べてみるんだ——

「」

ダッと喜助が飛び上った。きちがいのように屯所から逃げ出して行こうとする……。

が、所詮、それは無駄なことであった。

翌年春浅い二月末……。南天坊と喜助は死罪となり、小松屋は獄死し、お信だけが、西南戦争も終った明治十年の十月に出獄した……。

第三話　改暦二の酉囃子

1

明治七年の十一月中旬……。

浅草の仲店から奥山は、昼間から二の酉の人出にゴッタ返していた。

伝法院屯所の巡邏方——四等巡査高島貢が奇妙な横死を遂げたのは、浅草寺五重の塔横、酉の市の雑踏の中であった。

五時と云えば、冬の日はトップリと暮れていた。浅草橋からお蔵前、更に観音さまの境内から大鳥神社まで、高張り提灯がズラリと立ち並び、明々と灯が入っていた。

と……、五重の塔横に溢れていた人波が出し抜けに揺れ動いた。

「——どけどけどけッ！」

見るからにイナセな若い男が、脱いだ半天をピュンピュンと振り廻わし、群衆を突き抜けるようにして雷門の方へ走った。

そのうしろから、大勢の熊手売りが口々に喚めきながら追いかけて来る。

「――逃がすなッ！」
「――船頭をとッ捕まえろッ！」
「――叩ッ殺しちまえッ！」
熊手売りは殺気立っている。
それを、警戒に出ていた伝法院屯所の巡査達が必死で押えようとした。
「――静まれッ！」
「――乱暴はいかん！」
「――落付けッ！」
こんな騒ぎの中で、熊手売りと揉み合っていた高島巡査が、ギャッと、断末魔の悲鳴をあげ、グズグズッと崩折れてしまったのである。
「――京介どん!?」
駈けつけた伝法院屯所の探索方――新宮寺京介、藤井弥太郎、門司勝之助、そして、南町奉行所以来の御用聞きで、いまは警視庁嘱と呼ばれている駒形の浅吉は、高島巡査の死体を取り巻いて、顔を見合わせた。
「血が出ていねェようだな……」
弥太郎が、つぶやくように云った。
「人を殺すのは、斬ったはっただけじゃないだろう」
「そりゃそうだ。殴り殺す、絞め殺す……。が、高島にゃ、殴ったり、絞めたりした痕もねェぜ」
浅吉が、ソッと京介を眺めた――

「頓死かもしれませんねェ……。とにかく死骸を屯所へ搬んで、医者に調べさせやしょう」
浅吉は巡査達といっしょに、高島の死体を戸板に乗せた。
「――む!?」
京介が、ひしゃげた〝おかめ〟の面を拾いあげた。――高島の死体の下になっていて、いままで気がつかなかったのだ。
他の日なればともかく、酉の市で〝おかめ〟の面は格別珍らしいものではない。縁起ものの熊手には、大なり小なり〝おかめ〟の面がとりつけてある。
しかし、面を見詰める京介の目が光った。
「浅吉ッ!」
「へイッ……」
「高島巡査は殺しだ。念入りに死骸を調べろ」
「旦那……。何か手掛りが?」
京介は面を差し出した。――〝おかめ〟の顔のまン中に、小さな穴が四ツ並んであいていた。両端の穴の間は一寸足らず……。その穴のまわりがドス黒く汚れている。
「――血だよ、これは……」
京介の声が、重く弥太郎や勝之助、浅吉の耳に響いた。
屯所に搬ばれた高島巡査の死体は、素ッ飛んで来た西洋外科医の手で調べられた。その間に京介は、書役の難波に高島巡査の身許を調べさせた。
「――一応のことは判りました……」

十分余りで、難波が探索方の詰め所へ戻って来た。
「もッとも、巡邏方備え付けの記録によりましたので、実家の方の様子は余りはッきりしませんが……。高島巡査はもと直参です」
「幕臣? 旗本か?」
「はい……。父親は長崎奉行所の目付だったようです」
「世が世であれば槍ひと筋か……。高島は当年何歳だッた?」
「二十七歳です」
「じゃ部屋住みのうちに御一新になったッてわけか……」
「はア……、多分……。でも、高島巡査は女房持ちです」
「ほう……。どこにいる?」
「深川です」
「深川!?」
京介は深川の裏長屋で生まれ、深川で育った親代々の浪人者だった。
「じゃ高島は、自分は屯所の宿舎に寝起きし、別に一軒持っていたッてわけか」
当時の巡査は、幹部と探索方以外は全員屯所内の宿舎に合宿することになっていた。
「いや、高島の妻女は、実家の開花楼にいるそうです」
「開花楼の娘か!」
深川育ちの京介は開花楼をよく知っている。江戸の頃から名の通った船宿だったが、維新後店を洋風に改造して、西洋割烹の看板をあげたのだった。

いまでは、上野の精養軒と肩を並べる洋食屋と云われている。
「開花楼の娘婿なら、月給七円の四等巡査で苦労することなどなかっただろうになァ」
すると、探索方組長の庄司小警部が立って来た。
「それがじゃ、高島はこの夏巡査に採用されると、自らこの伝法院屯所を希望したちゅうことじゃ。しかもだ、望みどおりここへ配属されると、こん度は第三巡邏区を是非受け持たせてくれと希望した」
「何か事情がありそうですねェ。もしかすると、高島巡査殺しの動機がその辺りに――」
「新宮寺、おはんは頭から殺しときめてかかっちょるようじゃがー――」
「庄司さん……」
京介は、持ち返った〝おかめ〟の面を庄司の前へ差し出した。
とたんに、弥太郎がクスリッと笑った。
「京介よ。今夜は酉の市だぜ」
「〝おかめ〟の面なんか珍らしくない……と云うのか？」
「そうよ。どこにでも転がっていらァ」
「いや、転がったり捨てられたりはしていない。熊手につけたまま、大事に持って帰るんじゃないかな」
「うン……、そりゃア縁起ものだから……。だがよ、一ツや二ツは落ッこちることだってあるだろうじゃないか」
その時、別室で死体の検査をしていた外科医が戻って来た。
「いけんでごわした、先生？」

勝之助がたずねた。
「人殺しでござるよ」
「やっぱ、殺しでごわすか!?」
「いや、死因が摑めぬので苦労しました。が、飛んでもないところに傷口がござったよ。ここじゃ。ここでござるよ」
外科医は、自分の項を指さした。――俗にぼんのくぼと云われる部位だ。
「ここに、奇妙な刺し傷が四ツ並んどった」
「四ツ!?」
弥太郎が、思わずたずね返した。
「左様……。細い火箸で突いたような傷が一列に四ツ並んでいるのでござるよ」
「先生……」
京介が〝おかめ〟の面を持って前へ出た。
「この面にあいている穴をよく見て頂きたいのですが……」
「あ――！　これじゃよ。これでござるよ。全く同じものと考えられますな」
すると浅吉が首を傾げた――
「人間一匹、こんな小さな傷で死ぬものですかねェ」
「そりゃアあんた、この項のところは、細い針一本を打ち込んでも大の男が一コロじゃよ」
外科医が返って行くと、弥太郎が大きく腕を振り廻した――
「さア勘弁ならねェぞ。屯所から目と鼻ンところで殺しをやりやがった。しかも、殺されたのは屯所

の巡邏方だ。糞ッたれめ、舐めやがってッ！」
「そこだよ、弥太さん……」
京介が弥太郎の前に近づいた。
「高島巡査は、なぜ酉の市の人ごみの中で殺されたんだ」
「それがわかりゃ、下手人がすぐめッからァね」
「いや、おれが云いたいのは別のことなんだ。下手人は、巡査に恨みがあったのか、屯所への——大きく云えば警視庁への反抗なのか、それとも、高島貢なるもと直参の倅を狙ったのか……」
「なる程……。それによって、下手人の割り出し方も違って来るよなァ」
その時、巡邏方組長の園田小警部が、息をはずませて駈け込んで来た——
「庄司どん！　高島巡査な、返り討ちになったでごわすぞッ！」
「返り討ち!?」
庄司はもとより、探索方一同が、啞然として顔を見合わせた。
「そうでごわす。いま、高島巡査の妻女と弟が駈けつけもした。この二人に付き添うて来た開花楼の帳場で竹蔵ちゅう男が、おいの耳に、返り討ちではなかか……とささやいたでごわす」
「どうしておはんの耳に……」
「そりゃ、おいは西洋料理が好きじゃ。時々、開花楼へ出かける。そいで、竹蔵とは顔馴染みなのじゃ」
園田の言葉に、京介と弥太郎がチラッと顔を見合わせた。——月給十五円の小警部が、高価な西洋料理を時々食いに行くなど、出来る話ではない。——巡邏組長どの、高島巡査のかみさんの実家へ、ちょくちょく出かけて馳走になっていたな……。京介と弥太郎は、目顔でそう語り合ったのだ。

それにしても、高島巡査が返り討ちとは、余りにも思いがけないことであった。

2

「——高島の父親は、長崎奉行所の目付けじゃったちゅうことじゃが……」
探索方の詰め所へ呼び寄せた高島の妻峯子と弟の金吾に、庄司小警部がたずねた。
峯子と金吾には、開花楼の帳場竹蔵が付き添っていた。——二十六、七のズングリとした男で、ザンギリ頭を西洋髪油でピカピカに光らせ、しかも髪の乱れを気にして、年中右手で撫でる……と云うにやけた男だった。
「はい。瓦解までお奉行所勤めを致しておりました」
峯子はいかにも士族の妻らしい折り目の正しさで答えた。
「で、瓦解の後は？　東京へ戻ったのかね？」
「いいえ、新らしく出来た長崎商業会所に書記として勤めておりました。ところが、一昨年の暮のことでございます。会所の年忘れの酒宴でささいなことから同僚の方と争いとなり、舅は斬られて亡くなりました」
「斬ったのはもと侍かな？」
「はい……。石川右近……。御一新までは浪人で寺小屋などを開いていたそうでございます」
京介が溜め息をついた。——京介も浪人だったのが、新政府が出来たおかげで探索方として職につくことが出来た。石川右近と云う男も、商業会所の書記となり、ホッとしたことであろう。それなの

に、年忘れのふるまい酒に酔って人を危めるとは、――馬鹿な男だ！
「一昨年の暮と云えば、長崎にはもう警察が出来ていた筈ですな」
京介が峯子にたずねた。
「はい……。石川右近は、酒宴の場から警察へ自首いたしましたが、お取調べの末、無罪と云うことに……」
「無罪!?　なぜ」
「実は、お恥かしいことでございますが、舅はいささか酒乱の気味がございました」
「では、非は斬られた側にあったのですか？」
「舅が出し抜けに右近に斬りつけたと云うことでございます。右近は右脚に傷を受けながら、傍らにあった火箸をとると、とッさの手裏剣に……。それが舅のノドを刺し通して……」
峯子が声をつまらせた。
なる程……。この話の通りだとすると、新律綱領に書かれている正当防衛だ。石川右近は罪にならない……。
「その頃、お前ェ達夫婦も長崎にいたのかい？」
弥太郎が代ってたずねた。
「いいえ、長崎には舎弟の金吾さんだけ……。わたくし共は横浜に住み、夫はフランス語の勉強をしておりました」
「じゃ、長崎には？」
「参りました。でも、遠い長崎のことでございます。わたくし共が半月後に長崎に辿りつきました時

には、石川右近は、既に長崎から姿を消しておりました」
「正当防衛じゃしようがねェよなア」
「でも、わたくし共は、父の仇石川右近のゆくえを探しました。それが武士の掟でございますから――」
「しかし……」
京介が、峯子の言葉を押えた――
「仇討ちは、昨年二月禁制に――」
「その通りでございます。わたくし共は右近をさがして長崎を離れ、たずねたずねて下ノ関へ参りましたとき、仇討ち禁制の政府布告を知りました」
「で……仇討ちは？」
「夫は内心ホッとしたようでございました。もともと非は舅にあるのですから……」
「じゃ、仇討ちの旅は下ノ関までで、東京へ戻ったのですか？」
「はい……。わたくしの実家へ落付き、夫は築地の異人館でフランス語の勉強を続けました。ところが今年の夏、出し抜けに――わしはポリスになる……と申し、十日後には、この伝法院屯所へ勤めることになりました」
「竹蔵……」
京介は、峯子のうしろにいるトンボ頭の帳場の竹蔵へ顔を向けた。
「お前、巡邏方の組長に、高島巡査は返り討ちになった……と云ったそうだな？」
「いいえ……。もしかしたら……と申しましたので……」

「しかし、仇討ちは禁止だ。そのことは石川右近も知っている筈と考えてよかろう。云いかえれば、仇を討たれる心配がなくなったのに、返り討ちにする必要はないだろう」
「でも……、石川右近にしてみれば、やっぱり高島さんに狙われている……と考えているかもしれません」
「お前の判断によると、高島巡査と石川右近は、どこかで顔を合わせたことになるな？」
「ヘェ……」
竹蔵は、ちょッと困ったように光った頭を押えた。
「――高島と石川右近は、互に顔を知っていたのですか？」
京介が、再び峯子にたずねた。
「いいえ……。右近の人相は長崎で幾人かのひとから聞きましたが、会ったことはありません。ただ一ツの手掛りは、舅に斬られたため、右脚をひきずッていると云うことだけでございます。右近の方でも、夫の顔は知らぬ筈と思います」
「この半歳、高島は屯所の宿舎で寝起きしていたのですが、時々深川へ顔を見せに行きましたか？」
「はい、非番の日には必ず……」
「その時、石川右近のことを何か……」
「いいえ。一度も聞いておりません」
「何か、高島が書き残したようなものは？」
「戻って来ると、帳面をとり出し、何か書き物をしていることもございましたが、何を書いていたかは調べてみませんと……」

「あとで、その帳面を見せて頂きに行きます」
やがて、峯子と金吾は、涙を押えて高島の死体を引きとり、深川へ戻って行った。
「――さてと……」
庄司小警部が、京介、弥太郎、勝之助、それから浅吉と、グルリと見廻した。
「どこから手をつける？」
「高島が殺されたときの様子から考えてみましょう」
京介が、すぐ答えた。
「それは、はッきりしちょる。酉の市の熊手売りにケチをつけた男があった」
「一見船頭風の若か男ちゅうこつでごわす」
勝之助がつけ加えた。
「左様々々左様……。いかにもすばしこそうな、ちょッと好い男ちゅうことじゃ。多分、酒に酔うとったのじゃろう。しかし、ケチをつけられた熊手売りは憤った。――叩き殺してしまえ……と船頭風の男を追いかける。男は逃げる……。追いつ追われつだ、五重の塔の横まで来た。折から、酉の市取締りの巡邏方数名がここへ来合わせた」
庄司がまた一同を見廻した――
「はッきりしちょるのはここまでじゃよ。このあとは、巡邏方と熊手売りの揉み合いになってしもうて、出し抜けにギャッと叫んでポリスが一人倒れた。それが高島巡査ちゅうわけじゃ。どう思う、新宮寺？」
「気にいりませんなァ。船頭風の男と熊手売りの喧嘩、巡邏方と熊手売りの揉み合い……。これは偶

然の出来事です。ところが下手人は、奇妙な四本歯の刃物を〝おかめ〟の面でかくし、高島巡査のぼんのくぼを狙って、一撃で倒しています。これは全く、カッチリと算盤をはじいた上での殺しの手段……。この偶然と勘定ずくとの嚙み合せが、あまりにもうまくゆき過ぎている。それがあたしには気にいらないんです」

すると、細身の銀煙管で煙草を吸っていた弥太郎が、ポンと、大火鉢のフチを叩いた。

「あたしゃ、そうは思わねェなァ。辻つまが合ってるよ」

「へェー……。うかがいましょう」

「いいとも。簡単なことだよ。下手人は石川右近さ。やつはかねがね高島を討ちとろうと狙っていた」

「弥太郎さんも返り討ち説か？」

「仇討ち禁制の布告が出て二年足らずだ。――君父の仇は共に天を戴かず……ッてェ考え方はまだまだ根強いと思うね。当然右近の方では警戒もするし、スキがあれば返り討ちにと狙いもする。だから今日も、〝おかめ〟の面で刃物をかくして高島達が巡邏するのを尾行ていた――」

「するとたまたま船頭と熊手売りの騒ぎが持ち上った。この時とばかり、石川右近が高島のうしろへ迫った――」

「そう云うわけ。これでも気に入らねェか？」

「気にいらないね。いま弥太さんが云った通りだとすると、石川右近は幾日も幾日も、高島をつけ廻していたことになる」

「それがどうした？」

「右近はビッコだ。そんな男が、ヒョッコリヒョッコリついて来れば、高島の方で気付かぬ筈はない。第一、毎日高島をつけ廻すなんて大変なことだよ。右近が、すぐ近くに住んででもいるなら別だが――」

そう云いかけた京介が、ふッと言葉を切った。

「いけんしたとでごわすか？」

勝之助がたずねる。

「いや……、右近は、この近くに住んでいるのだ……」

一同がハッと京介を見た。

「――新宮寺！　そう思い付きで無責任なことを云うてはいかんなァ」

そう云う庄司へ、京介が首を横に振った。

「高島は、今年の夏前に、石川右近をこの近くでみつけだしたのですよ。その当時高島には迷いがあったと思います。――武士道を守って仇を討つべきか、布告に従って仇討ちを断念すべきか……。とにかく、右近から目を離すわけにはゆかない……。その時高島はよいことを思いついた。――ポリスになって、毎日巡邏しながら右近を見張る……」

「ええでしょうええでしょう！　その考えは、正にズバリですよ。なればこそだ、高島はポリスになると、この伝法院屯所を希望し、ここへ来ると、第三巡邏区を志願した……ちゅうわけか！」

「浅吉！」

京介が立ち上った。

「第三巡邏区をシラミつぶしに洗い上げてみよう。多分、右脚の悪い士族――石川右近が住んでいる筈だ……」

3

伝法院屯所の第三巡邏区は、浅草寺境内全域と浅草田町一、二丁目であった。区域は広いが、殆んどが寺地。——世を忍ぶ浪士の住みそうなところと云えば限られている。京介と浅吉は、まず田原町の大長屋蛇骨長屋を振り出しに、広小路裏のから傘長屋、北馬道の六角長屋と、片ッ端から洗い立てて行った。

「——いいか浅吉、石川右近は長崎で寺小屋をやった経験がある。だから書道指南か算盤（そろばん）などを教えてるかもしれないぞ……」

だが、こんな京介の考えは、八時過ぎになって、完全に打ちこわされてしまった。——右脚の悪い男は、遂に発見されなかったし、そんな噂さえ聞き出すことが出来なかったのである。

「こんな筈はない！」

「妙ですねェ。あたしも間違いなく石川右近がめッかるものと考げェてたんですが……」

「何かを見落してるんだ。でなければ、高島が伝法院屯所の第三巡邏区を望んだ理由がなくなる」

「旦那。あせらねェで下さいましよ。紅梅そばででもひと息入れようじゃありませんか」

酉の市の浅草は、夜が更けるにつれて、いよいよ人出が多く、それこそ芋を洗うと云う言葉がピッタリの混みようだった。

吾妻橋ぎわの紅梅そばも、今夜はかき入れだ。

「——あ、旦那……」

京介と浅吉が入って行くと、亭主の伊之助と女房のお富がソソクサと近づいて来た。

「——飛んだことでしたねェ！」

「——開花楼の貢さんがねェ……」

伊之助とお富が、殆んど同時にそんなことを云った。

「高島を知ってるのか？」

「いえ、貢さんよりは、開花楼のひとり娘のお峯ちゃんと、うちの梅ちゃんが幼な馴染みでしてね……」

——峯子の方が一ツ年上だが、深川の寺小屋もいッしょ、踊りも同じお師匠さんについていた……とお富は説明した。

「そんなことで、梅ちゃんが芸者になると、開花楼のおかみさんが可愛がって、よく呼んでくれましてねェ……」

「それだけじゃねェんで……」

伊之助が話に割り込んだ——

「お峯ちゃんと高島さんの結びつきにゃ、梅ちゃんが一枚噛んでるんで……」

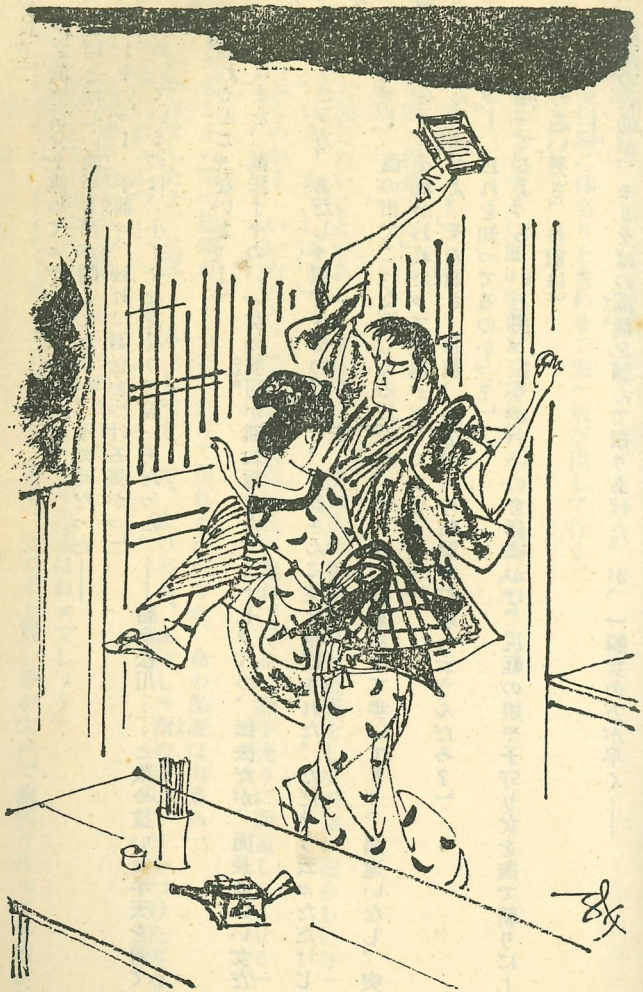
「小梅が仲立ちをしたのか？」

「高島さんとこの御本家てェのが、もと八百石どりのお旗本でしてね」

「八百石と云えば相当なものだな」

「ええ……。ま、御内証も有福だッたとみえ、船宿当時の開花楼へ、ちょくちょく遊びにみえていたそうで……。御本家の御当主が高島兵庫さま……。甥御さんが三人ありましてね、半次郎、三十郎、

それに貢さん……。兵庫さまのお供で、開花楼へ――」
「わかった。そして娘の峯子と高島が好き合った」
「ま、そうにゃ違いないんですがね、先きにお峯ちゃんを嫁にほしいと云い出したのは三十郎さんなんで……。ところが峯ちゃんはこの三十郎さんが大嫌いで、貢さんが大好き。三十郎さんの方へなんと断ろうかと困っているのを知って梅ちゃんが貢さんとこへ素ッ飛んでッた。――あなたは峯ちゃんが好きか嫌いか。好きならすぐ嫁に貰ってくれ……とね」
「小梅らしい強引さだなア。それで高島は峯子を？」
「ヘェ、高島さんの方でも前々から峯ちゃんが好きだったし、折りよく、長崎からお父上も出府されてたんでね、三十郎さんの方へは、――こんなわけだから悪しからず……と、開花楼のおかみさんがポーンと断り、サッと式を挙げちゃッた」
「本家の高島兵庫は何も云わなかったのかな？」
「丁度御一新の直後でしてね、兵庫さまと半次郎さんは北海道の五稜郭で官軍につかまり、向うでおいろいろとやってみたが、士族の商法でうまくいかず、いまはかなり、暮らしに困っておいでのようです」
「いろいろ入りくんでいるようだな。小梅は？」
「開花楼へ素ッ飛んで行きましたよ。峯ちゃんが可哀そうだッてね。なアに、開花楼のおかみさんはしッかりものだから、他人のお前ェが心配することはねェと云ったんですがね、あっし達の云うことなんかきくような梅ちゃんじゃねェ。梅ちゃんに、ハイと素直に返事させるお方はただひとりですか



らねェ」

伊之助が京介を眺めてニヤッと笑った。

とげとげしい喚めき声が聞こえたのが、その時だった——

「——やいッ！　手前ェ、おれに因念をつける気かッ」

喚めいているのは、小イキな身なりの若い男だった。——船宿松川……と染め抜いた半天を着ている。

「自惚れるんじゃないよッ！」

これはまた、滅法イキのいい女の啖呵が跳ね返った。二十七ッ八の、伝法だが、面長のいい女だった。

「きょうの夕方、あたしゃ観音さまの境内で、お前さんに突き飛ばされた。ただそう云っただけじゃないか」

「ぬかせッ！　酉の市でごった返してる浅草だ。ポーッと口をあけて歩いてりゃ、間違いなし、突き飛ばされらァ。それがおれだって証拠がどこにあるんだ？」

「お前さんの面だよ、その面さ。お前、船宿松川の船頭で仁助と云うんだろ？」

「なにおッ！　おれを知ってるのかッ？」

「あー、知ってるよ。ちょいと男ッ振りがいいのを鼻にかけ、尻軽の娘や子守り女を撫で斬りにしている女癖の悪い男さ、お前は」

「この女ッ！」

船頭の仁助が、モリそばの蒸籠を摑んで振りあげた。が、一瞬女の方が早く——

「バカ野郎ッ！」

ドーンと仁助に体当りを食わせて表へ飛び出して行く。

「——待てッ！」

追いかけようとする仁助の手首を、京介がグイッと摑んだ。

「やめろ！」

「なんだ、手前ェッ！」

「伝法院屯所の探索方だ」

「屯所の旦那で……」

「ちょいと聞きたいことがある。今日の夕方、酉の市の熊手売りと喧嘩をしたのはお前らしいな」

「え!?　いいえ、あッしは？」

「違うと云うのか？　いいだろう。これから大鳥神社へ連れて行き、熊手売りに面通しをさせる」

「旦那！」

「もしお前があの時の船頭だとすると、生きて戻れるかどうか、命の保証は出来ぬ」

「わ、わかりましたよ、旦那！　あッしです。だ、だけどね、あッしゃ酉の市にケチをつけたりなんかしちゃアいねェんで……」

「では、なぜ熊手売りから追いかけられたのだ」

「一円の熊手を五十銭まけろと云ったんで……。不思議はねェでしょう」

酉の市の熊手は、もともと高くカケ値がしてある。売り手と買い手が大声で値切り合って半値から三分の一に纏めるのが酉の市の仕来りだった。

「ところが熊手屋の野郎、九十五銭だ、九十三銭だ、九十銭だと刻みやがる。あッしゃア頭にきちまってね、――このどケチ野郎ッ！　こんな貧乏臭せェ熊手が買えるかッ……て怒鳴ってやったんで。すると熊手屋がおこりやがった」

「当り前だ。福を掻き集める熊手を貧乏臭いと云われちゃア、熊手屋がおこるだろうな」

「わーッと熊手屋が集まって来やがった。相手は大勢、こちらはひとり、逃げねェ方がおかしいんじゃねェでしょうか？」

一応、話の筋は通っていた。

やっぱり、船頭と熊手売りの喧嘩は偶然の出来事だった……。とすると、あの騒ぎがなくとも四等巡査高島貢は、遅かれ早かれ、あの奇妙な四本脚の刃物で命を落とすことになったわけだ……。

「――行っていいぜ……」

京介には、これ以上船頭の仁助を引き止めておく理由がなかった。

4

藤井弥太郎は奥山の見世物小屋を、一軒々々調べて歩いていた。

いつもだと、とっくに静まり返っている見世物小屋も、酉の市の夜は真夜中過ぎまで客を入れて、大にぎわいだった。

弥太郎が見世物小屋を調べるには、弥太郎なりのわけがあった。――石川右近は長崎で火箸を投げて高島の父を倒している。また高島の項の傷口も、火箸四本を揃えたような不思議な刃物を投げられたもの……と考えられぬこともない。とにかく、石川右近が手裏剣の名手であることは間違いないようだ。

ところで長崎には、南京軽業と呼ばれる独特の曲芸がある。その曲芸の中の代表的なものの一ツは出刃打ちだった。

――もしかすると右近の野郎、奥山の小屋で、チャッカリ南京服かなんかを着込み、出刃打ちをやってるかもしれねェ……。

弥太郎は、そう考えたのだ。

「――おい！　ちょいと待ちな……」

幾つ目かの小屋の楽屋口で、弥太郎は、ひと目で女芸人とわかる若い女を呼び止めた。

「おらァ伝法院屯所のものだ。この小屋の出し物はなんだ？」

「はい、南京軽業の桔梗太夫の小屋でございます」

「気にいったぜ。じゃ、刃物を投げる芸人がいるだろうな？」

「出刃打ちでございますか？　うちの太夫さんの曲芸は綱渡りと松明の綾取りと白刃の籠抜けでございます。出刃打ちはいたしません」

「おい、包み隠しはためにならねェぜ」

「いいえ、隠しなどはいたしません。あの南京出刃打ちの太夫さんなら、品川の方の小屋に出ているとか聞きましたけど……」

「品川のことなんか、どうだっていいんだ。お前ェの名は？」

「桔梗太夫の弟子で、小萩と申します」

「桔梗に萩か。秋の七草だ。小萩、幾つだ？」
「十八でございます」
「番茶も出花か……」
弥太郎はポンと女芸人の肩を叩いた——
「行ってよし……。ただし、いまのこと、誰にも云っちゃならねェ。御上の御用だ。わかったな」
女芸人が、コックリうなずいて立ち去る。
と……、クスリッと、忍び笑いの声が聞こえた——
「誰だ!?」
「あたしですよ、旦那……」
小屋のかげから、伝法な女の姿が弥太郎に近づいた。——さッき、紅梅そばで船頭の仁助と口論をしていた女だった。
「あれーッ！　お前ェはかわせみのお滝じゃねェか！　いつ出て来た？」
「娑婆へ戻ったのは、もう二タ月も前ですよ。しばらく御牢の垢を落しがてら箱根の湯治場で働いてたんですがね、やっぱり東京が恋しくッて、舞い戻って来たんですよ」
「お滝……。おれとお前ェは長いつきあいだ」
「そうですよねェ、旦那がお南の同心の頃からですもの。七、八年になりますよね」
「こん度はどれくらい勤めて来たんだ？」
「二年と三月……。あたしが御牢へ送られる時、旦那は市中取締組の探索方でしたッけ。出て来てみると、警視庁とかッてェのが出来て、旦那は伝法院屯所の探索方……。同心の頃から、呼び名は幾度

も変ったけど、旦那のお仕事も、仕事ッぷりも変りませんねェ」
「何を!?」
「なんですよ、いまのお調べのやり方!?——おい、名前はなんてェんだ？　桔梗に萩で秋の七草だな。年は幾つだ……。どうだっていいじゃありませんか、放してやる女の子なんだから。相変らずですねェ、旦那の助平根性は！」
「バカ野郎！」
弥太郎が腹立たしげにお滝の頬ッペタを軽く叩いた。
「おれが、お前ェと長いつきあいだッて云ったのはな、そんな憎まれ口を聞くためじゃねェんだ。お滝よ。箱根で稼いでたことは大目に見てやる。もう巾着切りはやめろ。足を洗え。及ばずながら、藤井弥太郎が力になってやる」
とたんに、お滝がプッと吹き出した。
「あたしゃアね、箱根で、宿の女中をしてたんですよ。こんど東京へ戻って来たのも、何か小ぎれいな行商でもしようと思って……」
「じゃ、スリの足は洗った……と云うのか？」
「とッくに……。その証拠に旦那……」
お滝が、ズッシリ手ごたえのする財布を帯の間から取り出した。
「これを拾ったので、お届けしようと、旦那をさがしていたんですよ」
「拾った？　どこで？」
「吾妻橋の橋ぎわに紅梅そばッてのがあるの、御存知ですか？」

「知り過ぎてらァ」
「そこの入口で拾ったんですけどね、よく考えてみると、そのちょいと前にすれ違った、船頭風の若い男が落してッたような気がするんですがねェ」
「わからねェなァ。なんでェ、そのよく考えてみると……ッてェのは？」
「ですからさァ。この財布はあたしが抜いたんじゃない。拾ったんですよ。それでいいじゃありませんか。確かにお渡ししましたよ。じゃまたそのうちに……」
お滝はスイッと、奥山の闇の中へ姿を消した。かわせみと呼ばれる異名そのままの素ばしッこさだ。
「なんでェ、あの女……」
弥太郎は、ひとりごとをつぶやきながら、財布の中を調べてみて、ギョッとした。——小判で三十両入っていたのだ！　紙ぎれに印刷した太政官紙幣の三十円ではない。チーンと澄んだ音が響く小判が三十枚だ。金の値打ちから考えると、二等巡査七、八カ月分のお手当にあたるであろう。
「——それにしても……」
弥太郎が首を傾げた。
お滝は、——船頭風の若い男が落したものらしいと云っていた。そんな男が、三十両と云う大金を、どうして持っていたのであろう……。その点に、弥太郎は割り切れないものを感じたのであった。
その頃新宮寺京介は、開花楼の奥の間の襖の外に立っていた。——中では、高島巡査の通夜が営なまれているのだ。
が……、京介は中へ入ろうともせず、ジッと立ちつくしている。中から聞こえて来る大きな濁み声が、京介の足を釘付けにしていたのであった——

「——さてさて、返り討ちになって死ぬるとは、全く武士の恥さらし、一門の顔へ泥を塗りおったわい……」
言葉の調子から、それが高島貢の伯父兵庫であることは明らかだった。
「われわれは、上野で戦い、会津で戦い、更に函館に渡って苦労を重ねた。全ては、武士らしく、旗本らしく、意地をつらぬき通すためであった。ところがその間、貢は何をしとった？　本家であるわしの意向もただされず、このような身分違いの料理屋の娘を女房に迎え、横浜などでノウノウと惰眠を貪っておった——」
「もし、兵庫さまッ！」
意外にも小梅の声が聞こえて来た。
「身分違いとはどう云うことでございます？」
「わからぬのか？　開花楼の、西洋割烹のと云うとるが、もともとはしがない船宿ではないか。われわれ高島一族は、譜代の旗本。これを身分違いと云うて何が悪い。一族のものの中には、一門の面目を傷つけた貢を叩ッ斬れと云うものもおったくらいじゃ」
「呆れたねェ！　御一新から七年もたっているんですよ。高島家のみなさまには、未だに、四民平等ッてことが判らないとみえますね。全く、どうにもならない石頭揃いだよ」
「さがれッ、芸者の分際でッ！」
「ホホホ……、そんなセリフが、文明開化の東京で通用すると思ってるんですかッ」
ダッと、畳を蹴って立ち上る気配が感じられた。京介は、スッと襖をあけて、中へ入った。
一座は異様な空気に包まれている。

正面には高島巡査の棺が安置されていた。棺に向って右側に、チョン髷頭の老人を上座に、ザンギリの若い男が二人並んでいる。三人共、刀を持っていた。高島兵庫と、二人の甥——半次郎と三十郎なのだ。

若い男のひとりが、刀を鷲摑みにして仁王立ちになり、いまにも鯉口を切ろうとしている。——それが半次郎なのか三十郎なのか、京介にはわからなかった。

棺の左側には、峯子と金吾が、まッ蒼な顔で、唇を嚙みしめている。兵庫から罵られた口惜しさを、ジッと我慢しているのであろう。この二人に並んで、五十過ぎの女が、激しいまなざしで兵庫達を睨みつけている。——開花楼の女将およねだった。

下座の方に、二十人近い男女がひとかたまりになり、ヒッソリと息を呑んでいた。——通夜に集まった開花楼の使用人や出入りのものなのだろう。その人々の中に、小梅が、眉を逆立てて立ち上っていた！

「——おや、京介旦那！」

さすがに小梅はホッとしたようであった。

京介はちょッとうなずくと、刀を握って立っている若い男の前へ行った。

「仏の前であることをお忘れなく」

「なんだ、貴様ッ!?」

「高島貢の同僚です」

すると兵庫が、ふンと、鼻で笑った——

「ポリスか……」

「高島兵庫どのですな……。あなたの言葉に、聞き捨てならぬことがある」

「何ッ、聞き捨てならぬと!?」

「左様……。一門の中に、——貢を叩ッ切れと云ったものがある……と云われましたな？　では、貢殺しの下手人は、高島一門の中に在りと考えてよろしいのか？」

「そ、それは、云いがかりじゃッ！」

兵庫は口惜しげに唇を震わせると、出し抜けに、グイッと金吾へ指をつきつけた——

「金吾ッ、前へ出いッ！」

「は、はいッ……」

まだ幼な顔の残る金吾が、ゴクリと生唾を呑んだ。

「わしは高島一門の本家じゃ。一門のものになり代ってたずねる。貢を討ったは何者と思う？　石川じゃ。石川右近じゃ。父を討たれ、兄を討たれ、無念とは思わぬかッ？」

「それは、口惜しゅうございます」

「では、仇を討てッ！」

「いかんッ！」

京介が、嚙みつくように叫んだ。

「仇討ちは、国法によって禁じられているッ」

「ポリス如きに、武士の掟がわかるかッ」

京介が、クルリッと体を廻し、金吾へ顔を向けると、優しく云った——

「——よーく聞くんだ、金吾さん。武士の掟は破ってもよい……。だが、国の掟は、護らねばならぬ

……」

5

高島兵庫と甥のひとり半次郎は、席を蹴って返り、三十郎だけが残った。

「京介旦那……」

小梅、ソッと京介を通夜の席から外へ連れ出した。

「向う見ずな女だ。あの半次郎と云う男、もうひと言何か云えば、本当にお前を斬ってたかもしれないぜ」

「でしょうねェ。前からあのひとは気が短くて、喧嘩ッ早やかったから……」

「そう云えば、高島と峯子が結ばれたのは、お前のおかげだッてな」

「その代り、三十郎さんからは憎まれましたよ。——あー、そうだ！　三十郎さんと云えばね、兵庫さまや半次郎さんがいきり立っているときも、腕を組み、ジッと目を閉じていたでしょう。怪しいなァ……」

「怪しい!?」

「もともと峯ちゃんを嫁にほしいと云ったのは三十郎さんの方が先きなんですよ。それをあとから名乗りをあげた貢さんに持って行かれちゃった……。その貢さんが死んだ。今度こそ峯ちゃんを自分のものに出来る。そう考えてるんじゃないかしら？」

「事情が違うぜ。前の峯子は白無垢の生娘だった。しかし、いまの峯子は高島貢の後家だ」

「でも、開花楼ッて大きな財産をしょッてる後家さんですよ。悪かアないでしょう」

「おい、小梅……」

京介が小梅を見詰めた——

「お前の云ってることは、大変なことなんだぜ。人殺しがあった場合、おれ達探索方がまッ先きに考えるのは、——この殺しで一番得をするやつは誰だ……と云うことなんだ」

「つまり、貢さんが死んで、一番得をするのは誰か？」

「高島三十郎？」

「それは、峯ちゃんが、うンと云ったときはね……。でも峯ちゃんが首を縦に振るかしら……？」

「となると、誰が得をする？」

「さア、誰かしら？　一番損をするひとはわかってるけど……」

「一番損をする？　誰だい？」

「帳場の竹蔵さん。あのひとはね、今でこそトンボ頭で、帳場に納まってるけど、実は開花楼が船宿だった頃出入りしていた按摩さんの息子なんです。その按摩さんが或る晩浪士に斬られて死に、竹蔵さんは孤児になっちまった。それを、開花楼のおかみさんが、可哀そうだッて引きとって、読み書きから算盤を仕込んだんですよ……」

「それと高島貢と、どんなつながりがあるんだ？」

「峯ちゃんは、ひとり娘ですよ」

京介が、うなずき返した。

「本来なら婿をとって、開花楼を継がせる筈なんですけど、貢さんは、婿入りはいやだと云う。峯ち

ゃんは、どうしても貢さんといっしょになりたいと云う。とうとうおかみさんは、諦めて峯ちゃんを嫁入りさせたんです」

「だんだんわかって来た。おかみは、開花楼を、竹蔵にやらせる積りだったのか？」

「だって、他に持って行くところがないんだもの……」

「ところが貢が死に、峯子が戻って来る。竹蔵の二代目は取りやめになるッてわけか－

「だから一番損をするのは竹蔵さん……」

京介が、ふッと顔をあげた。

「いまの騒ぎの最中、竹蔵は姿を現わさなかったが……」

「あら……」

小梅が、呆れたように京介を見た――

「竹蔵さんは、伝法院屯所の京介旦那ッとこへ行ったんですよ」

「おれのところに!?」

「ええ……。京介旦那が、貢さんの帳面を見たいと云ったとかッて……」

「うン、それを見せて貰いにやって来たんだ」

「峯ちゃんは、その帳面を竹蔵さんに持たせて、屯所へ行かせたんですよ。もしかしたら竹蔵さん、屯所で京介旦那の帰りを待ってるんじゃないかしら？」

「まさかア！」

「いいえ。あのひとの頭は、西洋油で光ってるけど、頭の動きは、どちらかと云うと、鈍い方なんですよ」

京介が苦が笑いをした。

「竹蔵に、この上貧乏クジを引かせちゃア気の毒だ。帰るとするか……」

だが、屯所で、苛立たしげに京介の帰りを待っていたのは、意外にも紅梅そばの亭主伊之助だった。

「――旦那々々旦那！　どこをうろついていたんです。うちは今夜掻き入れなんですよ。それをこんなに待たせるなんて……」

京介の顔を見るなり、伊之助が早や口でまくし立てた。

「おれに用があるなら、難波に云っておけばいいのに……」

「それがね、どうしても旦那にジカに云いたかったんで……。さッきの船頭、何て云いましたか？　ほら、滅法啖呵の切れる女と口喧嘩をして、旦那にとッちめられた……」

「あれは確か、船宿松川の船頭だったが、名前はなんと云ったかなァ。それがどうかしたのか？」

「その船頭がね、小一時間前に、泡ァくらッて、うちへ舞い戻って来やがったんですよ。そして、云うことがいいじゃありませんか、――三十両入りの財布が落ちていなかったか……ッてね」

「三十両!?　大金だなァ」

「そんなものが落ッこってる筈がねェでしょ。だから、知らねェと云うと、――本当か……。正直に云ってくれ……。あたしゃカーッと来ちゃいましてね、――ふざけんな、この野郎ッ！　一昨日来やァがれッ……ッて、表へ放り出しちまッたんですよ。しかし、あとからよーく考えてみると、どうも腑に落ちねェ」

「何が？」

「たかが船宿の船頭でしょう。それがこの年の瀬に三十両てェ大金を持ってたとすると、こいつはた

だごとじゃねェ。あたしはそんな気がして来たんですよ」
「お前にしては、いいカンだなァ！」
「褒めてるんですか、けなしてるんですか？」
「褒めてる積りだ」
「有難てェ！　あッしゃアね、旦那からそう云って貰えりゃ、待ってた甲斐があったッてェもの、本望ですよ」
「しかし、伊之助……」
京介が、ちょいと首を傾げた——
「お前の云うように、たかが船宿の船頭……。本当に三十両なんて大金を落したのかなァ？」
「あッしは本当だと思いますよ。なにしろ目の色が変ってましたからね。それにね、表へ突き出してから、ソッと様子を見ていると、外で待っていた若い玄人女が、ツツッと船頭に駈け寄って行きやがった。そして女が何かたずねると、船頭の野郎、——無かった……と云うように、首を横に振ってましたよ」
「若い玄人女……。芸者か？」
「いいえ、奥山の揚弓場の矢取り女ですよ。へへへ……、実はあッしはこの女を知ってるんですがね、〝花菱〟って店のおこんて女なんです」
「船頭と矢取り女か……。それに大金三十両……。ちょいと気になるなァ」
「お役に立ちそうですか？」
「うン……。調べてみる値打ちはありそうだ」

京介は、奥にいる書役の難波を振返った——
「おい、開花楼の竹蔵ッて男が来た筈だが……」
「はい、この帳面を置いて、——今夜は高島巡査の通夜だから……と、急いで帰って行きました」
「なんだ！　結構融通のきく方じゃないか」
京介は、竹蔵が置いて行った高島の帳面をひろげて見た。——まず頭に日付けを入れ、その下に、短い文章が書き込んである。これは一種の日誌と云えそうだ。ただし、日付けは三日おきになっていた。これは、高島巡査が非番の日に開花楼へ戻り、その度に書き込んだことを物語っている……。
——十月二十九日　五重の塔横にて会う。目礼を交す。健在なり……。
——十一月一日　姿見えず。紫へ廻ってみる。楽屋口にてすれ違う。顔色悪し。風邪には非ざるか。気がかりなり……。
——十一月四日　五重の塔横にて会う。目礼を交す。顔色回復す。安心なり……。
こんなふうな文句が並んでいた。最後は一昨日の十一月十九日付けだった。
——五重の塔横にて会う。紫と談笑中なり。互に微笑して目礼を交す。紫も会釈をなす。艶麗なり……。
「いけんしたとでごわすか？」
いつの間に戻って来たのか、勝之助が横からのぞきこんだ。
「高島巡査が書き残したものだが、ちょいとした謎々だ」
「ふーム……」
勝之助は帳面を見詰めていたが、すぐ吐き出すように云った——

「怪しからん！　高島は巡邏中、女とあいびきばしちょッたごつごわすなッ」
「そう思うか？」
「いつもは、五重の塔の横で会うちょりもした。そこで会えぬときは、高島の方から女のところへ出かけちょりもす。ただし――」
「ただし？」
「二人の仲は、それほど深こうはなか。ものも云わず、目と目を見交すだけじゃ」
「あたしは、そう簡単に割り切る気にはならない。この紫と云うのはなんだ？」
「女でごわす。艶麗でごわす」
「しかし、この女は高島の相手じゃないぜ。――互に微笑して目礼を交す。紫も会釈す……とある」
「わかッた！　紫ちゅう女は、もうひとりの女の尻押しばしちょるのでごわしょう」
「では、――楽屋口にてすれ違う……。この楽屋口とは？」
「なる程なる程！　いよいよはッきりして来もした。楽屋口とは、奥山の見世物小屋の裏口のこつでごわしょう。つまり、高島の相手の女も、紫ちゅう女も、女芸人でごわす」
それから勝之助は、――そうかア……と云うように腕組みをした。
「京介どん、こら考えなおす必要があるようじゃ。高島巡査な、女芸人をめぐるいざこざのため、命ば失うたのかもしれもはんぞ。こらもう一度始めから――」
勝之助が、あとの言葉を呑みこんだ。――駒形の浅吉が、つんのめるようにして飛び込んで来たのだ――
「旦那方ッ、殺しですぜッ！」

「場所はッ!?」
京介がたずねた。
「御厩河岸の石置き場で……」
「殺されたのは？　下手人は？　喧嘩か？」
「喧嘩じゃねェようです。下手人はわかりませんが、殺されたのは、松川ッて船宿の仁助ッて船頭です」
まだ詰め所にいた紅梅そばの伊之助が、――ひえッ……と、驚きの声をあげた。
「新宮寺の旦那！　あの船頭ですよ。三十両ロですよ。いま思い出したんですが、確かに仁助と云いましたよ！」

6

十二時が迫っていたが、お蔵前通りの人波はまだ続いていた。二の酉のにぎわいは、まさに最高潮と云うところであろう。
が、一丁横に入った御厩河岸は、暗く、淋しかった。
川岸近く、四角にきざんだ切り石が積み上げてある。――新政府では、大川端を石積みにして、洪水を防ぎ、船着き場をこしらえる予定だったのである。
その切り石の蔭に、船頭の仁助が冷たくなっていた。
が、不思議なことに、血は流れておらず、頸を絞めた形跡もない。

「浅吉、カンテラで死骸の首筋を照らしてみろ」
「旦那……、まさかァ」
「念のためだ。調べてみろ」
「ヘェ……」
浅吉が、巡査からカンテラを借りて、死体へ近づけた。
「あ！」
浅吉が呻めき、
「京介どん！」
勝之助が息をはずませた。
死体のぼんのくぼに、あの奇妙な傷があったのだ！　巾一寸ほどで、火箸を突き刺したような傷口が四ツ、一列に並んでいる。高島巡査の傷と、全く同じものだった！
「――京介ッ！　どこだァ!?」
弥太郎が、喚めきながら、素ッ飛んで来た。
「藤井の旦那！　こちらですよ」
浅吉が、カンテラを振った。
「あー、済まねェ、遅くなって。船頭の仁助が殺されたッてェのは本当か？」
「本当のこつでごわす」
勝之助の死体を指さした。
「しかも、高島巡査ば殺した下手人に、仁助も殺されもした」

「えー!? そいつァまた妙なことだなア」
「いや……」
京介が首を横に振った。
「これで、やっと筋が読めて来た」
「筋? おい、京介、筋とはなんの筋だ?」
「高島巡査は、偶然巻き起こった熊手売りの騒ぎの中で殺されたのではない。あの騒ぎも高島殺しの下手人が書いた筋書きだった」
「なんだと!?」
「船頭の仁助は、下手人から銭で頼まれ、わざと熊手売りにケチをつけた。熊手売りが怒る。仁助は悪態をついて逃げる。熊手売りが追いかける。五重の塔の脇で、巡邏中の巡査隊と出会うた。巡査は、必死になって熊手売りを押し止めようとする。その中に、高島巡査も混っていた。下手人は〝おかめ〟の面に刃物をかくして、高島の背後に迫り、グサッと一撃で倒す……。文句があるかい?」
すると、勝之助が、どうも納得出来ないと云うように、顎を撫でた。
「京介どん……。熊手売りは、喧嘩早い職人揃いじゃ。しかも何十人と揃うちょる。そげん中へ、たったひとり乗り込んでケチばつくる。こらァ命がけの危か仕事じゃ。いかに仁助が向うみずでも、そげんこつを引き受けるとは考えられもはん」
「女だよ……」
「え?」
「仁助には女があった。その女のために、どうしても銭が必要だったとするとどうだ」

「それが本当のこつなら――」
「本当か嘘か、奥山の〝花菱〟ッて矢場で働いてるおこんて矢取り女に聞いてみようじゃないか」
「なる程、そげん女がいるとすると……」
「仁助は下手人から三十両で頼まれたらしい。ところが悪銭身につかずだ。小判をいれた財布をどこかで落した――」
「ちょい待ちだ!」
弥太郎が、ズイッと京介と勝之助の間へ割り込むと、懐中から重い財布を取り出した。
「これが仁助の財布だ」
あッと驚く京介達を、弥太郎はニンマリと見廻した。
「京介は仁助が財布を落したと云ったな」
「云った。紅梅そばへ、仁助が、財布が落ちてなかったか……と飛び込んで行ってる」
「やっぱり、紅梅そばか……。あたしゃこの財布を、お滝ッて女からあずかった。お滝は、――紅梅そばの前で拾った……と云ってるが、あたしゃお滝がスッたのだと思っている」
「女スリか?」
「かわせみのお滝……。二ツ名の女巾着切りだが、本人は足を洗ったと云っている」
「小イキで伝法ないい年増だろう?」
「京介はお滝を知ってるのか?」
「いや……」
京介は、紅梅そばでの出来事を手短かに物語った。

「つまり、お滝は五重の塔の横で、逃げる仁助に突き飛ばされた。それがたまたま紅梅そばで出会ったもんだから、なんとなくからみたくなった。その仁助が、――そいつァ済まなかったな……とでも云えば、それでケリがついたんだが、仁助はそばの蒸籠を振りあげた。お滝が、ドーンと仁助に体当りをくわせて逃げる……」

「その時、財布をはたきゃがったに違げェねェ。それをあたしンとこへ届けやがった。ふざけた女だ」

「いやァ、お滝の手は、女巾着切りの手じゃない。今夜だけは、神の手だった……。あたしにはそう思えるんだ……」

京介は、倒れている仁助を見詰めながら、シミジミとした調子で言葉を続けた。

「仁助はどうしても銭が必要だった。だから下手人から頼まれた危い役目も引き受けた。そのだいじの銭を財布ぐるみお滝にスリとられてしまった。仁助は途方に暮れた。こうなっては、もう一度下手人に、銭をせびるより方法はない」

「わかったよ。相手は人殺しの弱わ味を持っている。仁助にしてもせびりいいわけだ」

「ところが下手人にしてみれば、――これでは先きが思いやられる。この際ひと思いに……と云うことになる」

「で……、この石置き場へおびき出されて殺された」

「つまり、高島殺しの片棒をかついだ仁助に死罪の判決を下したのが、お滝の手だった」

「だから神の手かァ……。しかしよゥ京介、どうせ判決を下してくれるなら、仁助よりは下手人の方にして貰いたかったなァ」

その時、現場一帯を調べていた巡査のひとりが近づいて来た。

「石の蔭に、これが落ちちょりもした……」

そう云って巡査が差し出したのは、黒塗り金紋散らしの印籠だった。紋は丸に鬼蔦……。

「見せてみろ……」

京介は印籠を受けとったが、ふッと眉を寄せると、印籠を鼻へ持って行き、紐や房の匂いを嗅ぎはじめた……。

7

「――冗談じゃありませんよッ！　おこんが何処へ行ったのか、それを知りたいのは、旦那方よりあたしの方なんですからねッ……」

矢場〝花菱〟の女将お妻が、カン高い声を、ガランとした探索方詰め所の天井に響かせた。――詰め所はもともと浅草寺の本坊伝法院の庫裡だった。だだッ広く、天井が高い……。

お妻は、唇が薄く、受け口……。つまりは歌麿好みの小股の切れ上った大年増だった。――それが、目のまわりを、ポッと、赤くしている……。

「出来上ってるのかい？　相当飲んでるようだなァ」

弥太郎が、大火鉢の縁に脚をあげて、お妻を振返った。京介と勝之助は、下働きのお源がいれたお茶を飲んでいた。

――十二時を過ぎて、かなり寒い……。

「お酉さま景気かい？　今夜はだいぶ稼いだんだろう」

「飛んでもない。足抜きをしたおこんには二十円も前貸ししてあるんですよ。ちッとばかり稼いだって、どうにもなりゃアしませんよ」

京介が、トンと、湯呑みをテーブルの上に置いた。

「本当かな、逃げたと云うのは？　かくまったって、すぐ判ることなんだぜ」

「旦那、あたしゃ、口惜しくッてしようがないんですよ。おこんのやつが夕方、風邪ッ気で頭が痛いと云うんです。お酉さまで、せわしいんだけど、矢取り女はだいじなタマですからね、――そりゃアいけないね。あッたかくして休んでおいで……ッて、今夜は働かさなかったんですよ。ところが駒形の親分がおこんに御用があるッておいでになったんで、女部屋へ行ってみると、荷物ごとおこんのやつ、姿を消してたんですよ」

この話に嘘はなさそうだった。

「お前さん、仁助ッて船頭を知ってるか？」

「知ってますよ。時々うちにも遊びに来ます。色男振った、いやな男ですけどね、遊びは割りかし綺麗な方で――」

出し抜けにお妻の顔がサッと引きしまった！

「旦那ッ！　仁助ですよ、おこんを連れ出したのは！　仁助が来ると、おこんはソワソワしてました。そうですよッ、あの二人はとッくに出来てたんですよッ！」

「だろうな……。だがおこんはいま、仁助といっしょじゃないぜ」

「どうしてそんなことわかるんです？」

「仁助がいるところを知ってるからさ」

「でもね、仁助をとッちめれば、おこんのいどころを吐きますよ」

「無理だなァ……。仁助は吐きたくッても吐けねェ」

「どうしてです。あたしに会わせて下さいな。二十円の女に足抜きされて黙っちゃいられませんよ。仁助はどこにいるんです？」

「あの世さ」

「えッ!?」

「仁助は殺されたよ。あの男と最後に会ったのはいつだ？」

「昨夜ですよ。弓を引きに来てたんです。あ……、おこんが相手をしてましたよ」

「何か変った様子はなかったかい？」

「いいえ……」

「浮き浮きしていなかったか？　たとえば、どっかから思いがけない大金が転がり込む……なんて様子は？」

「いいえ……」

仁助が殺されたと聞き、お妻は酒の酔いもどっかへ吹ッ飛んだのか、短い言葉で答えるだけだった。やがてお妻は浅吉に送られ、よろめくような足取りで帰って行った。

「――おこんがおったら、仁助は雇うたのが何者か、わかったかもしれもはんなア」

そう云う勝之助に弥太郎が幾度もうなずき返した。

「世の中はうまくゆかねェように出来てるのさ。しようがねェ。今夜は屯所で寝るとするか……」

探索方は職務柄屯所外居住を許されていた。だから弥太郎は江戸以来の八丁堀の同心屋敷に住んで

いたし、京介と勝之助は下宿をしている。

京介の下宿は黒船町の質屋鈴や長十郎の離れ、勝之助は新堀河岸の古道具屋の二階を借りていた。質屋や古道具屋に寝ぐらをつくるのも探偵に便利だったからだ。

もうひとり、駒形の浅吉はその名の通り駒形町で女房に髪結いをさせている。

だから、屯所には探索方の寝部屋はなかった。仕事の都合で屯所に泊まるときは、巡査達の宿舎に転がり込むか、詰め所の火鉢のそばでうたた寝をするかだった。

十一月の夜は長い……。火鉢のそばで、赤ケットを肩から捲きつけて眠っていた勝之助が、ふと顔をあげると、京介が机に向かい、ランプの下に高島の帳面を拡げていた。

「京介どん……、いま何時でごわす？」

「四時をちょいと廻ったところだ」

「おはんな、眠らんのでごわすか？」

「どうもこいつが気になったのでなア……」

京介は帳面を持って、火鉢のそばに移った。

「気にすッこつはなか！　そいは、高島が女とあいびきばしたこつを――」

「いや、そうじゃない。おれは大体の謎を解いた積りだ。高島が五重の塔の横で目礼を交していた相手は石川右近だと思う」

「父の仇と、目礼ば交すッ!?」

「いや、それ以上だ。高島は相手の健在を喜び、風邪を引いた様子に心配している」

「そげんバカなこつがッ！」

「いや、おれには高島の気持ちがわかるような気がする。高島は浅草で石川をみつけ、ポリスとなって、毎日の巡邏で、石川の動静を確かめていた。それが、仇討禁制下に於けるセイ一杯の行動だったのだろう。ところが、毎日、きまった時刻に、きまった場所で顔を合わせているうちに、高島は石川に対し、奇妙な親しみを抱くようになった……」

「それが五重の塔の横でごわすか？　あそこは広場じゃ。石川が住みそうな家はなかッ」

「しかし、毎日きまって出ているものがある。尤も、雨や雪の日は休業するが……」

「む？　元気のよかときにいつも出ちょるものと云えば、鳩の豆売りの婆ァさんか、砂絵描きの女か、大道易者か――」

「それだよ」

「え!?」

「おれは、石川右近は書道・算盤の指南をしているのではないかと思った。だが、これは間違っていた。易者を見落していたんだ。五重の塔横の広場には、いつも四、五人の大道易者が出ている。その中に石川右近がいる……とおれは考える」

「ふーム……。とすると、紫と云うのは、どげんこつでごわす？」

「楽屋口とあるからには、見世物小屋に違いがない。おれは、奥山の見世物小屋を一軒々々考えて見た。すると、紫にかかわりのある小屋がみつかった。――長崎渡りの南京軽業桔梗太夫一座……」

「長崎!?　桔梗太夫でごわすか？」

「桔梗の花は紫だ」

あッ……と、勝之助が目を見張った。すると、勝之助の横で丸くなっていた弥太郎がムクムクと頭

を持ち上げた——

「畜生ッ！　あたしゃ付いていねェなア。実はな、あたしゃ今夜、その小屋の楽屋口で、桔梗太夫の弟子で小萩ッて女をとッつかまえ、いろいろと話を聞いたんだがよゥ、桔梗太夫が紫で、石川右近にかかわりがあろうなんて、これッぽッちも気がつかなかったなア」

京介が、大事をとって、注意深く答えた——

「石川右近と桔梗太夫の間にどんなつながりがあるか……、果して桔梗太夫が紫なのか……。調べてみなきゃアわからない。いま云ったことは、全ておれの想像なんだから……。万事は夜明け待ちだよ」

「そうかア！　こいつァ力を入れてかからなきゃアならねェな。下手ァすると、デけェ魚を逃がすかもしれねェからなア……」

ところが、夜が明けてしばらくすると、魚の方から三尾揃って、探索方の詰め所へ飛び込んで来た。

——男一人と女二人だ。

「石川右近です……」

五十がらみの男が、落付いた声で名乗った。

「それから、これはわたしの娘、南京軽業師の桔梗と、もうひとりは揚弓場〝花菱〟で働いているおこんさんと云います……」

探索方一同は毒ッ気を抜かれた形だ。かろうじて京介が右近と応対した。

「これはこれはわざわざどうも……。実は今朝、お前さんを迎えに行く筈だったんだが、手間がはぶけたよ」

「いや、桔梗の小屋へおいでになっても、わたしはいなかった。実は、今朝一番の蒸汽車で横浜へで

も逃げる積りで、新橋ステーション前の相模屋と云う旅籠屋に、昨夜から泊まっていたのですよ」

「いま、逃げる……と云ったようだが……」

「左様……。高島貢どのが、何者かの手にかかって命を失うた。この場合、第一番に疑がわれるのはわたしだ。わたしは、身に覚えのないことじゃから平気だったが、娘の桔梗が心配しましてなア。しばらく横浜にでも行っておれ……と云う。ま、それもよかろうと思いましてな、昨夜のうちに相模屋へ行ったのだが……」

今朝まだ暗いうちに、桔梗太夫が二人曳きの人力車で相模屋へ乗りつけ、父親石川右近の横浜行きをやめさせたのだと云う……。

「そのわけは、父上の無実がはッきりしたからでございます……」

桔梗太夫が右近に代って、そう云った。

「どう無実が証明されたんだ？」

「昨夜遅く、仁助と云う船頭さんが殺されたと聞きました。しかも、高島貢さんと同じ不思議な刃物で刺されて……」

京介が、——その通り……と、うなずき返した。

「つまり、下手人はひとり……。ところがその時刻に父は相模屋にいました。このことは、旅籠の方が証人になって下さいます。父が下手人である筈がありません」

「だから、逃げる必要はないッてわけか？」

「はい。わたくしは父を迎えに参りました。そして、わけを話しておりますと、襖一枚となり部屋で、わッ……と女の泣き声が……」

「それが、おこんだッたのか？」
右近と桔梗太夫とおこんが、同時にうなずいた。
「あたしは、仁助さんを、相模屋で待ってたんです」
おこんの声は涙に震えていた。
「お前、〝花菱〟の前借を踏み倒したんだッてな？」
「仕方がなかったんです。昨日、仁助さんの手に、思いがけないお金が入りました。それであたしの借金を綺麗に払って、天下晴れて世帯を持とう……。そう話し合っていたんです。ところがそのお金を仁助さんが落しちゃったんです。そうなっては、逃げるより仕方がありません」
「それで、しめし合わせ、相模屋で落合うことにしたのか？」
「いいえ、二人で奥山を脱け出し、御厩河岸の近くまで行くと、仁助さんが急に立ち止まって、――お前はひと足先きに、新橋ステーション前の相模屋ッて旅籠へ行ってろ。おれはすぐあとから行くから……ッて」
「なぜ突然、そんなことを云いだしたのだ？」
「わかりません。お酉さまで、大変な人出だったんです。その中で急にそんなことを云ったんです。あたしは、二人いっしょだと、誰か知り合に出会ったとき都合が悪いので、別々に行く気になったんだろうと思い、云われるとおり、先きに相模屋へ行きました。だのに、あのひとは……」
おこんの言葉は、すすり泣きにかすれた。

8

「――石川右近が、自ら現われたそうじゃのゥ……」
そう云いながら、屯所長の大木大警部が探索方の詰め所へ入って来た。
「それがですなア、状況は石川右近に有利でしてなア……」
庄司小警部が、残念そうに答えた。
「石川に、怪しか節はなかちゅうわけか？」
「はア、新宮寺が取調べましたるところ、石川の曰くですな、――高島貢は心の友であった。毎日顔を合わせ、互の無事を確め合っていたのに、目の前で貢が倒された。わしは腸を引き千切られるような思いじゃ……、そう答えちょるのでごわす」
「世が世であれば、討つものと討たるるもの……。それが心の友とはのゥ……」
京介が前へ出た。
「所長……。高島は、もともと非は父にありと考え、仇討ちは最初から気乗り薄でした。そこへ仇討禁止令が出た。妻女の峯子が、――夫はホッとしたようだった……と云っているのは真実だと思います。いや、ホッとするよりも寧ろ、――これでいいのだ。よかったなア……と、石川へ微笑みかける気持ちになったのだと思います。それが石川にも通じ、石川は石川で高島を、――好もしい男よ、心の友よ……と思うようになったのではないでしょうか？」
「そン気持な、おいにもわかる。が、それなればじゃ、高島殺し、船頭殺しの真の下手人は何者じ

や？　新宮寺、高島貢な、こン屯所の巡邏方ぞ。屯所の面目にかけ、こン下手人だけは、是が非でも捕えねばならぬのじゃッ」
「わかっております……。そのために、罠をかけました」
「罠!?」
大木大警部が驚いて訊ね返したときに、駒形の浅吉が駈け戻って来た。
「あー、新宮寺の旦那！　うまくゆきましたよ……」
「開花楼に人は集まっていたか？」
「いいえ、昼過ぎの出棺なんで、まだ内々のものだけしか集まっていませんでした」
「高島一門のものは？」
「しょッぱい顔をして、棺の前にぶッ坐っていましたよ。いくら悪口を云っても、身内のものの葬いですからね、出ねェってわけにはゆかねェんでしょう。本家の高島兵庫を始め、高島巡査にとっては従兄の三十郎、半次郎、三人顔を揃えていました」
話しながら、浅吉は真新らしい手拭いで、額から首筋の汗を拭いた。浅草の伝法院から深川の開花楼まで、往復走り通したのであろう。十一月の末だと云うのに、ひどい汗だ。
「三人は、紋服であろうな？」
「へェ、お葬いですからねェ。紋付羽織袴でした」
「紋どころは？」
「へェ、それが三人共、例の印籠と同じ丸に鬼蔦なんで……」
「例のことは、誰に話した？」

「御棺のある奥の間へ入って行きますとね、高島一門の三人の外に、開花楼のおかみと帳場の竹蔵が出棺の仕度をしており、それを小梅姐さんが手伝っていました」
「峯子と金吾は？」
「その時はいなかったんですがね、帰るときには白無垢を着て出て来ましたよ。別の座敷で着替えをしていたんでしょう」
「それで？」
「小梅さんに話しましたよ、こんな風にね。――新宮寺の旦那を見かけなかったか？　変ンだなア、こちらへみえてる筈なんだが……。いや、大急ぎ報らさんきゃならねェことがあってね……。実は、石川右近の隠れてるところがわかったんだ。それがね、外ならぬ小梅姐さんだから話すんだが、右近は奥山の、南京軽業の小屋にかくまわれてるんだよ……てね」
「外の者に聞こえたかな？」
「ヘエ、あたしゃ内証ばなしをするように喋ったんですが、みんな聞き耳を立てていますからね、聞こえたと思いますよ」
浅吉は話しながら、汗を拭いた手拭いをたたみなおそうとした。
「おい、ちょいとそれを見せてみな……」
何を思ったのか、京介が手拭いをとって拡げた。――まン中に、図案化したナイフとフォークがぶッちがいになっている。その右側の上に――西洋割烹　明治三年創業……、左下に――深川仙台堀開花楼……と染め抜かれている。
「この手拭いは、開花楼のだな？」

「ヘエ、あッしが汗をかいてたもんで、おかみが出してくれたんですが……。それが何か……？」
「うン、冬の汗も、浅吉親分は伊達にはかかないなア」
「え？　あたしにゃア一向に……」
「いまにわかるさ」
すると大木大警部が、いぶかしげにたずねた——
「新宮寺、おはんがかけた罠ちゅうのが、いまの話のこつか？」
「はい……、大きな魚を隠れ場所からおびきだし、網に追いこむ罠です」
「網を仕かけた場所は？」
「南京軽業、桔梗太夫の小屋です。ボチボチ魚が、網に入る頃でしょう」
「では、急がねば、魚が逃ぐるぞ」
「大丈夫です。勝ッつぁんが見張っています」
桔梗太夫の軽業小屋は、伝法院屯所から二丁ほど離れていた。
表には極彩色の絵看板があがり、派手なノボリが十本余り並び、ハタハタと風に鳴っていた。
昨日が二の酉で、遅くまで人出があったせいか、きょうはいつもに比べて、ちょいと淋しいようだが、それでも水茶屋の女達の呼び声を打ち消して、群衆の足音が続いていた。
奥山は、一年中、朝から夜まで、東京の庶民達に親しまれる盛り場だった。
しかし、表のこんな華やいだ空気とは打って変って、楽屋では、切迫した、険悪な空気が漲っていた。
白鉢巻き・白襷の高島金吾が、開花楼の帳場の竹蔵と共に刀を構えていたのだ。それに対して、足

の悪い石川右近をうしろにかばい、南京軽業の桔梗太夫が、キッと、逆か手に握った短剣を振りあげていた。——いわゆる南京出刃打ちの構えだ！
「動いてごらん！　この短剣が、ノド笛へグサリッと……。わかっているだろうねッ」
「うるせッ！」
竹蔵が喚めき返した。
「さ、金吾さん！　あんな女、こわかァありませんよッ。早く右近をッ！　右近を斬るんだッ！」
「だけど……、相手が刀を持っていない」
「刀？　刀なんて、持っていない方がいいッ」
「違う！　それは卑怯だッ！」
「バ、バカなッ！　女の短剣がこわいんだろッ！」
「いやッ！　尋常に、立合いたいんだッ！」
「グズッ！　間抜けッ！　よーしッ。では峯子さんに代ってこの竹蔵がッ——」
「ええ加減にせんかッ！」
出し抜けに、勝之助が中に割って入った。
「な、なんだ、お前はッ」
竹蔵が、いきり立った。
「おいとは昨夜、顔ば合わせちょる。伝法院屯所の探索方詰め所でな」
「あ……、探索方の旦那で……。折角ですが手を引いて頂きましょう。これは、仇討なんですからッ」
「明治六年二月七日、太政官達、第三十七号……。古来父兄の仇を復するを以て子弟の義務となすの

風習あり、右は私憤を以て国家の大法を破るもの――」
「そんなことは知っちゃアいないッ！　おれは仇を討つんだッ！」
竹蔵が、勝之助をすり抜けようとした。その前に、ぬッと京介が立ちふさがった。
「竹蔵ッ、どうでも金吾さんに右近を斬らさなきゃア都合が悪いようだなア」
「な、なんですッて!?」
「高島貢殺し、船頭仁助殺し、覚えがあろうッ！」
竹蔵が、ギョッと、京介を見詰めた。
「その上、高島殺しの罪を、石川右近になすくりつけようと云う魂胆。悪い野郎だよ、お前は！」
「違う！　おれじゃないッ！」
「悪あがきはよせッ！」
京介は、竹蔵の顔の前で、パッと開花楼の手拭いを拡げた。
「よく見ろ！　ここに、四本足の凶器が染め抜いてある」
「えッ!?」
「フォークだよ。西洋割烹の帳場だ。フォークなどは幾らでも手に入る。それに、お前、按摩の息子だってな」
「そ、それがどうしたと云うのだッ!?」
「ぼんのくぼの急所を知ってた筈だよ」
「知らん！　知らん！　こじつけだッ！」
「では、これはどうだ？」

京介が、ポケットから印籠をとり出して示した。
「見ろ見ろ見ろッ！　それが何よりの証拠だッ。その印籠はおれのではないッ。高島三十郎のだッ。三十郎が下手人だッ」
「お前、これがどこに落ちてたか、知ってるようだな？」
「あ……」
「お前は仁助殺しの現場にこの印籠を置いていった。三十郎を仁助殺しの下手人にするためにな」
京介は、印籠を鼻に当てて匂いを嗅いだ。
「西洋髪油の匂いだ。お前は年中頭を撫でている。その手で握りしめていたから、紐や房に匂いが移った……。観念しろよ。悪いことは出来ねェもんなんだ……」
竹蔵の手から、ポロリと刀が落ちた。
取調べに対して、竹蔵はスラスラと素直に白状した。
竹蔵は、開花楼の二代目になれるものと思っていた。そこへ高島夫婦が戻って来た。それがまじめ一方に勤めて来た竹蔵が狂いだす原因だった。
――貢を殺して、峯子を女房にしよう……。竹蔵はそう考えた。貧乏クジを一ッ気に跳ね返して、金と女を一度に握ろうと企てたのだ。
高島貢殺しの手段は、京介達が考えたとおりだった。
その片棒をかつがせた船頭の仁助が、かわせみのお滝に財布を抜かれたのは、竹蔵の計算外の出来事だった。
仁助は矢取り女のおこんを足抜きさせて、新橋へ逃げようと、蔵前通りを急いでいた。そして、屯

所へ高島貢の帳面をとどけようとしてやって来た竹蔵とバッタリ顔を合わせたのだった。

二人にとっては、運の悪い出会いと云えよう。

仁助は、もう一度銭を出させようと、おこんと別れて竹蔵を強請った。仁助は先き先きを考え、仁助を消そうと決心した。

竹蔵は仁助を石置き場に待たせて屯所へ帳面をとどけると急いで引き返し、切り石の蔭にしゃがんで待っている仁助の背後に忍びより、フォークを仁助の項に突き立てた。

「――なまじッかあたしが按摩の仲で、命のツボを心得ていたのがいけなかったんですよ……」

竹蔵は取調べる京介に、シミジミとした調子で云った。

裁判では死刑を宣告され、翌年の五月、竹蔵は市ガ谷の監獄所で若い生涯を閉じた。

第四話　西洋柱ごよみ

1

明治七年師走二十日の夜……。

お蔵前森田町のランプ問屋南部屋へ、三人組の強盗が押し入ったが、賊のひとりが、主人の花輪高右衛門に一ト太刀浴びせられ、一物も奪わずに逃去した。

この訴えが伝法院屯所へ届けられたのが、それから十五分ほどして……。

「とうとうこちらへ来おったかァ……」

探索方組長庄司小警部が舌打ちをして腕組みをした。

実は、先月の末以来、下町一帯を、三人組の押込みが暴らし廻っている。いままでのところ、神田・下谷方面だけであったが、とうとう今夜浅草へやって来たと云うわけである。

「しかし、一銭もとられなかったちゅうのは、不幸中の幸いじゃ、早速、全力をあげて探偵をしてくれ……」

庄司の言葉に、探索方では、新宮寺京介、藤井弥太郎、門司勝之助、それに駒形の浅吉が、手わけ

をして飛び出した。

巡邏方では、休み番のものまで全員狩り出して、浅草一帯に非常検問所をこしらえる。

もともと年の瀬のことではあり、巡邏方ではその前から、特別の警戒線を張っていたが、まだ、三人組に、警戒の網を破られた様子はなかった。

警戒と云う点では、伝法院屯所の受け持ち区域は、大変網が張りやすかった。なぜなれば、四方を川で囲まれているからだ。——江戸の名物隅田川が南側を流れている。東は吉原に続く日本堤に平行して音無川。西は柳原土堤添いに神田川。そして北には、門跡さま——東本願寺脇を新堀川が東西に走っている……。

この四ツの川にかかっている幾つかの橋……。そこさえガッチリ固めれば、浅草からは絶対に逃げ出せない！

ましてや今宵の賊のひとりは、南部屋の主人に斬られた手負いだ。姿を変えて橋を渡ろうとしても、警戒の巡査から見とがめられるに違いない。

「——狙いは、寺や社の床下、空き家敷、それから、大川端の草むらだ……」

京介は、賊をさがす巡査に注意した。——御一新から七年たっているが、旧旗本や大名屋敷は、あちらこちらに、空き屋のままで放置されている。また、廃仏棄釈の嵐につぶされた寺は、無住のまま立ち腐れている。いずれも、無頼の徒や泥棒にとっては恰好の隠れ家である。

更に、大川端……。夜は人通りがなく、四、五尺もある雑草が霜枯れて、この中にしゃがまれると、ちょッとみつからない……。

だが……、黒船町の河岸を巡査四、五人と調べていた駒形の浅吉が、出し抜けに、大きな声で喚め

き立てた——

「旦那ッ！　新宮寺の旦那ッ！　いましたぜ——ッ！」

京介は、枯れ草の中に突ッ伏している若い男を見た。——まだ、体にはあたたかみが残っているが、脈は止まり、心臓の音は聞こえない。

ジャン切り髪が乱れ、凄まじい死にざまだが、やくざなりの男ッぷり、案外こんなのが玄人女には持てるのかもしれない……。

「ここでは暗くて駄目だ。とり敢ず、屯所へはこぼう……」

黒船町河岸から伝法院屯所は三丁余り……。男の死体は戸板に乗せられ、巡査の手で屯所へはこばれた。

「——傷は、肩口と脇腹の二カ所だ……」

ランプの灯を近づけて、京介が云った。

「命とりは、どちらじゃね？」

庄司小警部がたずねる。

「脇腹の傷でしょうな。かなり深かそうだし、着物の濡れぐあいから考えると、血もかなり出たようです」

「南部屋の主人が、賊にひと太刀浴びせたそうじゃが、それが、この男じゃろうか？」

「肩口の傷が、そうかもしれませんな」

それは、浅吉が呼んで来た南部屋の主人高右衛門によって証明された——

「確かに、今夜の三人組のひとりに相違ございません」

「じゃ、お前さんがひと太刀斬りつけたと云うのは——」

「この男です。丁度、手近かなとこに刀がありましたので……。でも、殺しては可愛そうと考え、わたくしは軽く肩先きに入れた積りですが……」

庄司小警部が、京介にかわってたずねた——

「おはん、もとは武士か？」

「はい……。お恥かしながら、小田原藩士でした」

「みごとにひと太刀、左肩口に極まっちょる。しかし、この脇腹の傷は——」

「覚えがありません……。わたくしは、先刻も申しましたように、命を奪うほどのこともないと考えておりましたので……。それに、もしかして賊の首領が申しましたことが事実だとすると、後々面倒なことになるのではないか……と考えましたので……」

「賊の首領が、何を云うたのじゃね？」

「それが……」

高右衛門は、ちょッと云い難そうに辺りを見廻した。——いつか、戻って来た探索方、弥太郎や勝之助と高右衛門のまわりに集まっていた。

「云い難そうですな……。が、この際です。どんなことでもいいんです、聞かせて頂きましょう」

京介が、高右衛門を促した。

「実は、今夜九時頃、表戸を激しく叩く音がいたします。——どちらさまで……？　と、伺いますと、——わしは伝法院屯所の探索方藤井弥太郎だ——」

「何をッ!?」

弥太郎が、仰天してたずねた。
「はい、――藤井弥太郎だが、取調べの筋がある……とのことなので、何も疑がわず大戸の潜りをあけますと、それが三人組の押込みだったので……」
「ちょ、ちょいと待ってくれ」
弥太郎は、高右衛門の言葉を押えた。
「念のために聞くが、お前ェ、この顔に見覚えがあるかい？」
そう云って弥太郎は、自分の鼻を押えた。
「いいえ。一向に……」
「だろうな……。あたしゃ伝法院屯所の探索方藤井弥太郎さ」
「えーッ！　では、藤井さまと仰有るのは実在のお方でしたか!?」
「どうだ、そのニセ物野郎とあたしと、どちらがいい男だ？」
「さア……、それはどうも……」
高右衛門が、困ったように言葉を濁ごした。
「でも、そう云えば、ニセ物も藤井さまと同じように着流しの巻き羽織で、十手を持っておりました。左様……、羽織の紋は、確か、梅鉢……」
「冗談じゃねェ！　天神さまのお札くばりじゃあるめェし、梅鉢なんて野暮な紋つきが着て歩けるかッてんだッ……」
高右衛門が帰っていったあとも、弥太郎は口惜しげに、周囲のものに当り散らした。
「なんでェ、お源婆ァ！　こんななまぬるい茶を江戸ッ児が呑めるかッ。――おい難波ッ、探索方の

ニセ物は、どれくれェの罪になるんだ？」
「ばア、半年ほど前に、ニセ巡査が、かたりをして捕まりましたが、終身懲役になりました」
「よーし、じゃ、今度のニセ弥太郎は死罪だ。糞ッ！　晒し首にして、本物との違いを世間さまに見て貰わなきゃア、腹の虫が納まらねェ！」
京介が、クスクス笑いながら、弥太郎の肩を叩いた。
「そう憤るなよ。東京中に探索方多しといえども、三人組の首領が名乗ったのは藤井弥太郎……。それだけ弥太さんの名は売れてるッてことになるんだ」
「うん……、なにしろあたしゃ、南町奉行所以来の探索方だからなァ」
「と同時に弥太さん……。首領は案外、弥太さんの近くにいるやつかもしれないぜ」
「えーッ!?　おい。驚かすなよ、京介！」
「いや、弥太さんはいまだに着流しに巻き羽織……。そしていつでも十手を持っている」
「それは、長年の同心暮らしで、これが一番働きやすいからなんだ」
「テキは、それを知っていて、巻き羽織姿で、藤井弥太郎と名乗った……」
「けッ！　いよいよ勘弁ならねェ。名前ばかりか、姿形までおれに化けやがったのかァ！」
京介は、難波のそばへ行った。
「他所での三人組の手配書は来ているか？」
「はい、来ています。他所でも、最初――屯所のものだ……と大戸を叩いていますが、藤井さんの名をかたったり、同心姿になったりしたのは、今夜が始めてのようです」
「いよいよ弥太さんを知ってるやつに違いないな。だから、伝法院屯所の区域内で仕事をするときに

限って弥太さんの名を使ったんだ。難波、三人組のいままでの仕事は？」
「はい、ちょッと待って下さい……」
難波は、書類棚から、手配書の綴りをとり出した。
「最初が、麹町平河町の質屋桝屋で、十六円二十七銭を奪いましたが、十一月二十二日の夜です。次ぎが神田佐久間町の水油渡世、平屋大野平三郎方から三十二円四十七銭五厘を強奪。十一月二十九日の夜です。それから下谷黒門町西洋書籍渡世、丸屋丸高弥兵衛方より、金貨・小判をとりまぜ百二十一円と四十五両六十五銭を強奪――」
「そいつァ大金だなァ」
「それが本月六日夜のことですが、七日後の十三日夜には、本所横網町の竜念寺と云う寺に押入り八十九銭……」
「百二十一円と四十五両六十五銭の次ぎが八十九銭とは、手当り次第だなァ」
「そして、また七日目の今夜がランプ屋の南部屋でしたが、これは一文も奪っていません」
「難波！」
京介が、キッと書役の難波を見詰めた。
「もう一度、三人組が押込みをやった日を云ってくれ。最初が、先月の二十二日だったな？」
「はい、次ぎが十一月二十九日で、三度目が本月六日。それから十三日。そして今夜です」
「間違いはないだろうな？」
「はァ、警視庁の公文書ですから確かです」
すると、横で庄司小警部がうなずいた――

「この前が、十三日じゃったことは間違いなかじゃよ。その日はだな、大学南校へ行っちょる甥が、ドンタクで遊びに来とった。そこへ浅吉が、横網町の寺に三人組が押し込んだと報らせて来たことを覚えちょるよ」
「十三日は、ドンタク？」
ドンタクとは、日曜日のことだ。
「うン……。それがどうしたと云うのじゃ？」
「七日おきですよ、庄司さん」
「む？　最初が先月の二十二日で、二十九日と、本月六日……。なる程」
「十三日。それが本日は二十日……」
「七日おきじゃねェ！」
「そして今日もドンタク……。即ちソンデーです。更に、先月二十二日も、二十九日も同じくドンタクだったわけです」
「とするとだ、三人組はドンタク毎に押込みを働いちょるのか!?」
勝之助が首をひねった。
「すると京介どんな、ドンタク毎に休む仕事をしちょるやつが三人組じゃと――」
「と、考えたくなるじゃないか」
「しかし、横浜辺りでは、ドンタクに休む日本の商人もボチボチおるちゅうことじゃが、東京ではまだ――」
勝之助が云うとおり、その頃はまだ日本人には日曜を休む習慣はなかった。太政官政府を始め商人

まで、江戸時代のまま一の日と六の日に休んでいたのだ。
「しかしな勝っつぁん……」
京介は庄司小警部を振返った——
「いまも庄司さんが云ったように、東京でも大学南校あたりじゃ、ドンタクに休んでいる」
「それは、異人教師が休むからではなかか」
「逆のことも云えるんじゃないかなァ。異人屋敷で働いている日本人は、いやも応もなくドンタクは休みだ」
弥太郎がうなずいた——
「あの殺されてた男は小弁慶の着流しだ。着こなしと云い、寸の詰まった仕立てと云い、素ッ堅気とは受けとれねェ。やっぱり異人館か、異人の商店に雇われてるもの——たとえば料理人、雑役、下男、馬丁——」
出し抜けに、下働きのお源婆ァさんが、おかしな歌をつぶやいた——
「——異人館の馬丁さんは小弁慶の揃い……、東京娘を迷わせる、トコトットットット……」
「なんじゃ、その歌は!?」
庄司小警部が、渋い顔でたずねた。
「東京・横浜で流行ってるんですよ。横浜じゃ、——ハマの娘を迷わせる……ッて歌ッてるそうですがね」
「つまりだ、馬丁仲間では、あのような小弁慶の着物が流行っちょるちゅうわけかア……」
その時、死体の着物を脱がせ、持ち物や、死体の体を調べていた駒形の浅吉が、京介へ声をかけた

「旦那……。ちょいと、これを見ておくんなさい」
京介が土間に横たえられている死体に近づくと、浅吉が死体の左腕を指さした。——その二の腕に、〃おはつ〃と女の名が刺青されていた。
京介のうしろから弥太郎ものぞきこんだが、すぐ、——けッ……と舌打ちをした。
「女房か情婦か知らねェが、押込みをする悪党にしちゃア甘めェ野郎だ」
「いや……」
京介は弥太郎へ笑いかけた——
「この女故に、押込みを働いたのかもしれない。何れにしても、〃おはつ〃をさがし出せば——」
「おッと、京介……。おはつなんてありふれた名の女は、この広い東京だ。ごまんといるぜ」
「おはつはごまんといても、この男のおはつはただひとりだ。——浅吉、明日、下町一帯の湯屋を洗ってくれ。そうだ！」
京介が、ふッと思いついたように、一段と力を入れた——
「川向うはいいから、築地へ行ってくれ」
「京橋・日本橋辺りを飛び越してですか？」
京介が、大きくうなずき返した——
「築地の居留地附近の湯屋で、——左腕に〃おはつ〃と彫った馬丁らしい男……と聞き込みをやってみてくれ……」

2

「――おや、いらッしゃい！」
紅梅そばの亭主伊之助が笑顔で京介、弥太郎、浅吉の三人を迎えた。
「もう店を閉めてるかと思ったんだけどよゥ」
弥太郎が、ニヤッと笑った。
「吾妻橋の紅梅そばも年の瀬で苦しいとみえ、遅くまで稼ぐじゃねェか」
「ちょいと、藤井の旦那！」
奥から女房のお富が飛び出して来た。
「なんて憎らしいことを仰有るんです！　うちじゃアね、多分旦那方がおなかをすかして、遅くおいでになるだろうと、わざわざ火を落さずに待っていたんですよ」
「へへへ……、嬉しがらせるじゃないか」
「旦那……」
亭主の伊之助に代った――
「今夜、森田町のランプ屋へ三人組の押込みが入ったでしょう。しかも、その片割れがひとり黒船町河岸で殺されていた……。こう云う商売をやってますとね、人の出入りが多いから、いろんな噂が耳へ入るんですよ。――どうせ今夜中にケリがつくようなまやさしい出来事じゃねェ……。そう考えましてね、せめて温ッたけェそばでも食べて戴こう……ッてお富と相談しましてね――」

「有難う……」
京介が頭を下げた。
「弥太さんだッて、悪気があって云ったことじゃないんだ」
「あたしゃアね、どう云うもんか、腹にもねェことを云う性なんだ」
弥太郎が、おかしな云い釈をしたとき、お富の妹――浅草芸者の小梅が戻って来た。
「おや、京介旦那！　あー、よかった！」
「おれに、何か用か？」
「神田の明神さまへ行きましょうよ」
「今から!?」
「何云ッてんですよ。今日と明日は明神さまの年の市。今夜は夜どおしですよ」
「しかし――」
そう云いかける京介の言葉を、弥太郎が押えた――
「行ってやれよ、京介……。殺されたやつが生き返るわけのものでもなしよ。三人組の探偵は万事明日だ。お前ェがいやなら、おれが小梅といっしょに行ってもいいんだぜ」
「弥太さん、それも腹にないことか？」
京介は苦が笑いをしたが、それでも、熱いそばを一杯すると、小梅といっしょに紅梅そばを出た。
「嬉しいねェ！　京介旦那と明神さまへ行けるなんて……」
小梅は本当に嬉しそうだった。
十一時を過ぎて、さすがに、大川から吹き上げて来る師走の風は冷たい。

「ねェ、相乗車にすればよかったかしら？」
「寒いのか……」
京介は、着ているトンビを拡げて、小梅の肩を包んでやった。
小梅が、京介を見上げ、ニッコリ笑って、ソッと体を寄せる……。どこから見ても、好き合った同士の霜夜の道行きだ。
と……、うしろから、急ぎ足で、京介達を追い越して行った男女があった。
「――じゃ、お前さんはうちのひとを見捨てて逃げたんだねッ！」
女の声が京介の耳に入った。――低いが、鋭い声だった。――その女は、寒さを防ぐためか、白い手拭いを吹き流しにかぶっていた。
「いや……、兄貴から云われたんだ。――三人じゃ目につくから、お前ェだけ先きに行けッて……」
人通りの絶えた夜更けの道だったので、男の言葉も、ハッキリ聞きとることが出来た。――それにしても、抱き合うようにした京介と小梅の姿に、あとから来た男女は安心をしていたに違いない。それでなければ、こんな重大な話は出来なかった筈である。
「小梅……」
京介は、小梅にささやくと、立ち止まって、両手で肩を抱きしめた。
「ど、どうしたのよ、京介旦那!?」
「騒ぐな……。おれは、あしこへ行く二人連れに用がある」
「なんだァ……。京介旦那にしては、おかしいと思った……」
話しているうちに、男と女は、黒船町河岸の方へ曲って行く。

「小梅！　年の市はまたにしよう。お前はここから帰れッ！」
そう云うと京介は、ツツツ……と、夜の町を走った。
河岸への曲り角へ来て、様子をうかがうと、もう、男女の姿は見えなかった。
だが、京介は慌なかった。姿勢を低く、相手から見られぬようにして、枯れ草を分けながら、小弁慶の着物の男が殺されていた場所へ近づいて行った。
すると、果して、ボソボソとささやく声が聞こえる――
「この辺りなんだよ、おいらが別れたのは……。やっぱり、兄貴が連れてッたんだよ」
「でも、怪我をしてるんだろ？　どっかその辺りに――」
女が、ギョッと声を呑んだ。――京介が、ぬーッと、立ち上ったからだ。
「糞ッ！」
突然、男の方が、パシッと、小さな紙包みを京介へ投げつけた。とっさに、サッと顔をそむけたものの、ピシッとコメカミに当った紙包みから、パーッと、白い粉が飛び散った。
目つぶしだったのだ！
京介は、思わず左手で目をかばった。
その瞬間、男と女は、パッと左右に別れ、枯れ草の中を、脱兎のように走った。
京介にしては、思わぬ不覚であった。――ちょいと、相手を甘く見過ぎたのだ。
「――待てッ！」
京介は、女の方を追った。――男よりは、女の方が捕まえやすい……と思ったのだったが、これがまた計算違いだった。女は、まるで忍者のような素ばしこさで河岸ッぷちの草原を駈け抜け、忽ち姿

を消してしまった。
勿論、その時には、男の方も消えている。
京介の手に残ったのは、女が落して行った手拭いが一本……。
「――京介旦那！」
小梅が、駈け寄って来た。
「なんだ。まだいたのか？」
「だって、心配なんだもの……」
「新宮寺京介、今夜は飛んだドジを踏んでしまった。弥太さんや勝ッつぁんに話したら、大笑いをされるだろう」
そう云いながら、京介は、拾った手拭いを拡げた。――揚げ羽の蝶の紋を染め抜いたイキな手拭いだった。
「あら！　これは三寿若師匠の――」
「知っているのか、この手拭いを!?」
「ええ、それは籔ノ内の踊りのお師匠さんのヒキ手拭いですけど……」
浅草寺境内の東側、隅田川との間に幾つかの町がある。――南から、花川戸、山ノ宿、山ノ宿六軒町、聖天町、金竜山下瓦町……。その山ノ宿六軒町と聖天町に挟まれた狭い地域を、俗に籔ノ内と云ったのだ。
確かに手拭いには、――籔ノ内　坂東三寿若……と染めてあった。
「この三寿若は男か女か？」

「女ですよ。それも、三寿若とは云っても、もう六十近いお婆ァちゃん……」
「遊芸の師匠か？」
「踊りですよ。浅草の芸者衆も大勢習いに行ってますし、女の子のお弟子も多いし、なかなか評判のいいお師匠さんなんです」
「お前も行くのか？」
「ええ……、月に六日、浚ってもらってます」
「亭主は？」
「さア……、御亭主ねェ……」
「ないのか？」
「三寿若師匠も、もとは芳町に出ていた芸者衆なんですよ。ですから、正面切って亭主と云っていいかどうか知りませんけどね、それらしいひとが、いたにはいたんだそうです。でも、二十五、六年も前に死に別れたとか……」
京介は、ちょッと考えたが、すぐ小梅を見た――
「三寿若は、ひとり暮らしなんだな？」
「ええ、内弟子の若い女の子が二人いますけど……」
「まだ、起きてるかな？」
「え？」
「ちょいと、ききたいことがあるんだ」
「京介旦那……」

小梅が、困ったように京介を見上げた。
「いま云ったように、三寿若師匠には、二十五、六年前に、旦那があったんですがね、子どもが出来たんですよ。それで、スッパリ芸者をよして――」
「踊りの師匠になった？」
「ええ……。女手一ツで、そのお子さんを立派に育てあげたんですがねェ、このお子さんがまた大したものでねェ、いまは裁判役所の権中判事とか……」
「ほう……、これは美談だなァ！――しかし小梅、権中判事のお袋さんでも、大書記官のお腹さまでも、こちらは御用の筋だ。調べるものは調べなきゃアならない。わかるか？」
京介と小梅は、川風の中を引返した。
三寿若は眠っていたが、すぐ起きて来た。
小梅が恐縮して詫びを云うと、三寿若は手を振った――
「なんだねェ、御上の御用に夜中も夜明け前もあるものかね。お役に立つことなら、なんなりとも……」
三寿若はそう云って、京介が差し出した手拭いを受けとった。
「はい、確かにこれは、去年の秋の総ざらいのときに配ったヒキ手拭いですけど……」
「その時に配った数は？」
「三百本染めさせました」
「三百本!?」
「はい、お弟子さん達全部と、総ざらいに来て下すッたお方にはみんな……、それが誰と誰だった…

…？　と云われても、ちょッと思い出せませんけど……」
「その中に、おはつと云う名の女がいた筈なんだが……」
「――おはつさん……ですか？」
三寿若は、コックリ、うなずいた。
「三人いましたよ」
「三人!?　年は？」
「そうですねェ……。一番年かさは、代地河岸の船宿〝川よし〟のお初さんでしょう。確か今年十三――」
京介が、ガッカリしたように溜め息をついた――
「実は、ある男の二の腕に〝おはつ〟と彫ってあったのだが……」
「ホホホ……。十三では、男の腕に名前を入れさせるには、ちょッと早や過ぎますわねェ。あとのおはつさんは、十と九ツ……。これじゃお話になりませんよねェ」
京介は諦めて、話を変えた――
「もう一ツ伺いたい。師匠の知り合いに、異人屋敷に出入りしているものはいないだろうか？」
「異人屋敷ですか!?」
「或いは、異人の方から働きに来ているところでもいいんだが……」
「さア……。あたしは異人さんのことは……。心当りがありませんねェ……」
そう云った三寿若が、持っていた手拭いをふッと鼻へ近づけた――
「まア！　いい匂いだこと！」

「匂い!?」
京介が、急いで手拭いを受けとり、鼻へ近づけた。——ぷ——ンと、甘ずッぱい匂いがする。丁度、百合の匂いに似ていた。
「旦那……」
三寿若が、京介を見上げた——
「それは、舶来シャボンの匂いじゃありませんか……？」

3

「——な、な、なんじゃとッ!?」
探索方組長の庄司小警部が、口髭を震わせて京介を見詰めた。
「では……、では、権中判事どのの御母堂を訊問したちゅうのか!?」
「はア……。いけなかったでしょうか？」
「好いも悪いもッ！　も、もしもだ、権中判事どのから、正式に文句を云うて来たら、どうする積りじゃッ!?」
「文句を云って来るでしょうか？」
「えーい、もう！　新宮寺、ち——と頭を冷やして来い、頭をッ。おはん達は、藤井のニセ物、ニセ探索方が現われたので、頭へ来ちょるのではないかッ」
「はア……。では、お言葉に従って、頭を冷やして来ます」

京介はクスリッと笑うと、大火鉢のところでムッツリとお茶を呑んでいる勝之助に目くばせして、探索方の詰め所を出た。
「——京介どん……。いけんする積りじゃ？」
勝之助が雷門近くで、京介に追いついた。
「庄司さんに云われたから、頭の風通しをよくして来る」
京介はそう云って、朝の空を仰いだ。——空はまッ青に晴れ渡り、太陽の光はまぶしく、日溜まりにいるとポカポカと、汗ばみそうな温かさ……。小春日和りと云うやつだ。
「頭の風通し!?」
勝之助が、目玉をむき出して、訊ね返した。
「髪床だよ。ジョージ床へ行ってくる」
「三人組の探偵中に髪床とは……。ち——と、のんき過ぎるのでは……」
「いや、これも探索の一ツなんだ。髪の手入れはともかく、ジョージ床でシャボンのことをたずねてみる積りなのさ」
その時、弥太郎が、十手の朱房をヒラヒラさせながら、セカセカとした足どりで蔵前の方からやって来た。
「ほう、弥太さんにしては珍らしく、朝ッぱらから御活躍のようだなァ」
「あた棒よ。三人組の首領は、おれのニセ物なんだぜ。こいつばっかりはあたしの手でお縄にしなきゃア、浅草の仲店から奥山をデけェ面して歩くことが出来ねェ」
「で、何か手掛りが？」

「いやア……」
弥太郎が、いまいましげに舌打ちをした。
「実はあたしゃ、森田町のランプ屋へ行って来たんだ」
「昨夜三人組が押入った南部屋でごわすか？」
勝之助がたずねた。
「そうなんだ。何か手掛りになることで、話し忘れてることがありゃアしねェかと思ってな」
「そいで、何かごわしたか？」
「無ェよ……。何しろ、主人（あるじ）の高右衛門は腕が出来る。賊のひとりをズバッと斬ると、あたしのニセ物の首領が、——いけねッ！　逃げろッ……と喚めいて、一番先きに逃げ出したッてェんだ。話しにならねェ」
「南部屋は、主人と小僧二人が男。あとは女ばかりちゅうこつでごわしたなァ」
「だから、賊が逃げるのを追いかけもしなかった……と云うんだが、京介……、これじゃア手掛りにもならねェよなァ」
そう云われて、京介が、ちょっと考え込んだ——
「そうでもないだろう。その首領らしい弥太さんのニセ物は、士族ではなさそうだな」
「だろうな。士族なら、高右衛門と立ち合ってたかもしれねェ。たとえ立ち合わねェまでも、子分より先きに逃げ出すようなことはねェだろう。相手は、高右衛門の外は女子どもばかりなんだからな」
「とすると、こう云うことになる。賊の首領のニセ藤井弥太郎は、ドンタクの日に休めて、弥太さんのことをよく知っている平民の男……」

「はてなァ……？」

弥太郎は、ピッタ、ピッタとおでこを叩いて考えた——

「あたしを知っていて、ドンタクに休める野郎なァ……」

「西洋料理にゃ異人が働いている。そんなところで、異人の弟子になっている料理人の見習い給仕人はどうだ？」

「あたしゃアね、生まれて三十年、四ツ足の肉を食ったことはねェし、従って、西洋料理屋たァつきあいはねェよ」

「西洋服屋は？」

「べら棒め！　巻き羽織の同心姿は藤井弥太郎の金看板だ。モモ引きのお化けみてェな西洋服にゃ縁が無ェよ」

「じゃ、舶来雑貨屋は？」

「勘弁してくれよ。あたしゃ江戸ッ子だ。コーモリ傘をさしたり、シャッポをかぶったり、飛んでもねェことだ」

「しかし弥太さん、なんかある。なんか弥太さんが忘れてるものがあるんだ。急ぐことはない。三人組……、と云ってもいまは二人だが、そいつが動くとしても次ぎのドンタクは二十七日だ。ゆッくり思い出して貰いたいなァ」

「わかったよ。思い出すよ。糞ッたれめッ！　思い出さずにおくものかッ……」

丁度その頃、探索方の詰め所を、坂東三寿若が訪れていた。——運悪く、詰め所は書役の難波も、下働きのお源婆ァさんもおらず、庄司小警部ひとりが、大火鉢に向かい、苦が虫を嚙みつぶしたような表情で、煙管のガン首を火鉢の縁に叩きつけていた。

「あのゥ、お願い申します……」

三寿若が、丁寧に小腰をかがめた。

「む！　なんの用じゃッ!?」

庄司小警部の機嫌は、かなり悪かった。

「はい。新宮寺さんと仰有る旦那は……」

「新宮寺ッ!?　いまはおらん！　頭を冷やしに行っちょるッ。出直せッ！」

「おや、おつむを!?　それは生憎なことですねェ……。じゃ、また……」

三寿若は、庄司小警部の権幕に、度胆を抜かれて帰って行った。

しばらくすると、お源婆ァさんが、用達しから戻って来た。

「おや、庄司さんおひとりだったのですか？」

「ひとりじゃったら、悪いのかね？」

「いやだなァ！　いい加減に機嫌を直して下さいよ。何も三寿若師匠のことで、そんなに憤ることはないじゃありませんか。いまだって、師匠の方からわざわざ訪ねて来るくらいなんですから……」

「何ッ!?　いまなんちゅうた？」

「いえね、師匠の方から——」

「待て待て待て！　で、では、いましがたここへ来た婆ァさんは……」

「ええ。三寿若師匠ですよ。御存知なかったんですか？」

「あー！　こら、万事窮すじゃよ……」

庄司小警部は、頭を抱えてしまった。

屯所で、そんなことがあったとは知らず、京介は浅草広小路西仲町の髪床屋ジョージ床にいた。

西洋床に二タ通りあった。一つは、横浜で異国人から散髪の技術をならって東京で店を開いたもの……。もう一ツは、江戸の頃からの髪床屋で、見よう見まねでザンギリを始めたものであった。

その意味では、ジョージ床は本物中の本物西洋床と云えるであろう。

表の入口の上には、扇形の大きな看板が出ている。——上には、右書きで〝西洋髪挟処〟……。髪を切るとも揃えるとも云わず、挟むと云ったのはどう云う意味であろう。看板の下には、〝英吉利人ジョージ・バーボン〟と二行に書き、その間に縦書きで、——髪はさみ……、ひげそり……、髪あらい……と書いてあった。

もう一ツ、入口には、赤と青と白の三色に塗り分けた飴ん棒のお化けみたいのが立ててある。これがいかにも文明開化めいた雰囲気を感じさせたものだ。

看板通り、ジョージ床は英人ジョージ・バーボンの経営だった。

この頃は、異国人が日本人と雑居することは禁じられていた。従ってジョージは、築地の居留地にあるホテル館住まいで、昼間だけジョージ床へ出勤して来た。

職人は巳之助と定吉の二人。——巳之助は横浜仕込みだが、定吉は東京で雇われた見習い職人だった。

「——ジョージは？」

京介が、官員風の男の頭を刈っている巳之助にたずねた。

「昨日から横浜ですよ。多分、けさの蒸汽車で戻って来て、築地のホテル館へでも寄ってるんでしょう」

すると、商人風の男の髭を当っていた定吉が口を出した——

「とにかく、夕方までにゃ必ずやって来ますよ。今日のあがりを掻き集めにね……」

「そんなシブいのかいジョージは？」

その問いには巳之助が答えた——

「ジョージは日本人を信用しねェんですよ」

「日本で店を持って、日本人を客にして、日本人の使用人を信用出来ないのか？」

「異国人はみんなそうじゃねェんですか？　日本人をだまし、日本人をごまかし、日本人から搾れるだけ搾って、自分達は贅沢三昧……。ダジョカン紙幣駄目ね、小判よろし……なんてね、日本の大判小判が、随分持ち出されてるそうですよ」

「いろいろと詳しいじゃないか」

「横浜にいましたからね、異人共の悪どいやり方は見たり聞いたりしてますよ。ま、それに比べりゃア、ジョージなんかましな方じゃねエですか……」

京介はうなずきながら、大きな鏡の前の木函の中から石ケンをとりあげて匂いを嗅いだ。

「船来のシャボンだな。これは東京でも買えるのか？」

「さア……。こいつはジョージがアメリカから取り寄せてるリリー・シャボンとかッてエんですから、東京の船来雑貨屋にあるかどうか……。たとえあッても、西洋シャボンなんて、高くてとても手が出ねエでしょう」

京介は石ケンを函へ戻した。

「お前、江戸ッ子か？」
「いいえ、浜ッ子ですよ。定吉は神田ッ子だそうですがね」
京介はチョッキの胸ポケットから懐中時計をとり出した。——もうすぐ十一時になる……。
「——ほう！」
巳之助が、京介の時計を見て、ニッコリ笑った。
「いい時計ですね？　スイッツルですか、ドイツですか？」
「時計も鎖もスイッツルだよ」
「じゃ、あたしのと同じだ……」
巳之助も、ポケットから、ザラザラッと鎖の音をさせて時計をとり出した。
「横浜でね、髪挟みの師匠がくれたんでさア。フランス人ですよ、ルイ・ベレールッてね」
「異国人の中にも、話せるのがいるじゃないか」
「でも、このルイだって、銭儲けは忘れませんでしたよ。歌麿だの北斎だのッて浮世絵を二銭五厘ばで買い集め、何十枚も持って帰りましたがね、あちらじゃこの絵が、五十倍にも、六十倍にも売れるんだそうですよ」
その時、探索方の書役の難波が、急ぎ足でやって来た。
「難波、お前も髪挟みか？」
「いいえ、門司さんから、ここにおいでと聞いてお迎えに参りました」
「おれを!?」
「はア、浅吉が、若い娘を連れて戻って来て、新宮寺さんを待っています」

「若い娘？」
「はア……、居留地の近くの湯屋の使用人だとか……」
「そうかッ！」
京介は巳之助を振返った。
「悪いが、出直すことにする。ちょいと、せわしくなったのでなア……」

4

「——旦那！　ズバリ、お見込みどおりでしたよ」
浅吉が、京介を待ち受けていた。
大火鉢のそばには、十七、八の娘が、青い顔で、まるで吐き気でもするかのように、口を押えていた。
「この娘さんが湯屋の？」
「ヘェ、築地明石橋ぎわの柳湯で働いてるお波さんてエんですがね、——おはつ……てエ刺青をしている男に心当りがあるてんで、いッしょに来て貰って、いま、死骸の顔を——」
「あ——、それは気の毒だったなァ！」
京介には、娘が青い顔をしているわけがわかった。——この年で、殺しの死体を見せられたら、間違いなく気分が悪くなる筈だ。
「で、あの男だが、見覚えがあるのか？」
「はい……、留吉さんです」

お波が、泣くような声で答えた。
「留吉？　仕事を知っているかね？」
「異人館に住みこんでいる馬丁さんです」
京介が、横にいる弥太郎や勝之助の顔を見た。——異人館の馬丁さんは小弁慶の揃い……。あのはやり歌がドンピシャリと当ったわけである！
「居留地には、異人館が沢山あるが、どこの異人館かわからないか？」
「はッきりとは知りませんけど、なんでも蒸汽車の道をつくる異人のところだとか云ってました」
「お前さんとは、よく口をきいたのか？」
「はい……。馬丁さんは、毎日お湯に入りに来ますから、お馴染みなんです」
「刺青のおはつのことを話さなかったか？」
「いつだったか、刺青をひやかすと、——この女はおれの女房だ。浅草で働いてる……ッて」
「浅草で!?」
「ええ……。それから、こんなことも云ってました。——随分苦労させているから、こん度のクリストマスには、横浜見物に連れて行ってやる積りだ……ッて」
「クリストマス!?　いけねッ！」
京介が、はじかれたように庄司の前へ行った——
「庄司さん！　次ぎのドンタクは二十七日ですが、その前の二十四日、二十五日が危いですよッ」
「そりゃまた何故じゃね？　いままでは正確に七日七日、ドンタク毎に押込みを働いちょるではないか」

「ところが、二十四日はクリストマスイブ、二十五日はクリストマスデー……。二日共、異人館は休みになります！」
「クリストマス？」
「つまり、ヤソの誕生日です！」
「しかし、新宮寺……。異人館に雇われちょッた馬丁の留吉は死んだ。とするとだ、あとの二人が、これからも、押込みを続けるじゃろうか？」
「続けると思います。留吉は下ッ端。首領が残っているのですから……」
「としてもだ。馬丁の留吉なき現在、必ずしも、異人の休みの日に仕事をするとは限らんじゃろう」
「わたしは寧ろ、ドンタクに押込みを働いたのは、首領の都合ではないかと考えます。見殺しどころか、手足まといとなると、脇腹を抉って殺してしまうような留吉の都合とは考えられません……。とにかく、殺された男の身元が割れました。おはつと云う女が浅草で働いてることもわかったのです。この筋を手繰って、なんとかクリストマスイブまでに——」
とたんに弥太郎が溜め息をついた——
「京介よゥ……。浅草で働いてる女は、とてもじゃねェが、数え切れねェぜ」
「弥太さん……。おれ達は、ニセ弥太郎をとッ捕まえようとやッきになっているんだぜ」
「済まねェ。そのあたしが弱気になっちゃいけねェことは百も承知だ。だけどよう、仲店の二十軒茶屋、奥山の水茶屋、矢場、見世物小屋、川筋に出て船宿、猿若町の芝居茶屋、田原町から広小路、花川戸へかけての小料理屋、もう一ツ吉原ッてェ大物がある。ここで働いてる女の中にゃ、おはつなんて名の女も多いことだろう。その中からたッた一人の留吉の女をさがし出す。それも、クリストマスイ

ブまでと云やァ、ここ二、三日のうちでなきゃアいけねェ。なんだか、気が遠くなるような気がするぜ」
「わかるよ、その気持ち……」
京介もうなずいた。
「あの三寿若師匠が、ヒキ手拭いの配り先きを思い出してくれるといいんだが……」
庄司小警部が、困り切って頭を掻いた。
「実は……、坂東三寿若がけさ、ここへやって来たのじゃよ」
「え!? では何か手掛りが――」
「それがだ、わしゃあの婆ァさまが三寿若じゃとは知らんかったものじゃから、怒鳴りつけて追い返してしもうたのじゃよ」
京介と弥太郎、勝之助が、思わず顔を見合わせた。
「いや、全く済まん！　庄司孫右衛門、一代のしくじりじゃよ」
「いいえ、とにかく、手配けをしておはつをさがしてみましょう」
京介は、浅吉を振返った――
「お前は、仲店のみやげ物屋から二十軒茶屋を当ってみてくれ。おれは、大川筋の船宿と料理屋を洗ってみる」
すると、勝之助が立ち上った――
「おいは、奥山を受け持ちもす。矢場、風鉄砲の射的場、水茶屋は引き受けもした。弥太郎どんないけんする？」
「あたしゃグッとイキ筋といこう。山谷界隈の芸者連中を調べて、吉原へ足を伸ばしてみるよ」

それぞれ受け持ちを決めて、四人の探索方は屯所を出た。
京介はまず籔ノ内の坂東三寿若をたずねてみた。
生憎、三寿若はいなかった。
「――お師匠さんは、伝法院屯所へ行くと云って出かけたんですけど……」
留守をしていた若い内弟子が、首を傾げてそう云った。
「おれはその伝法院屯所の探索方なんだが、師匠は何か云っていなかったか？」
「なんですか、大事なことを忘れていた……とかって……」
やっぱりそうなのだ！　三寿若は、何かを思い出して、わざわざ報らせに来てくれたのだ……。
残念だが仕方がない。一ツ間違うと、万事がグレハマになって行く。それが探偵と云うものなのだ。
京介は、またあとで来ると云って三寿若の家を出た。
それから聖天町、六軒町、山ノ宿、花川戸の船宿と料亭を歩いたがおはつと名乗る女にも、それらしい女にも出会わなかった。
花川戸から吾妻橋の橋づめに出た京介の足は、ひとりでに紅梅そばへ向いていた。
「おや、京介旦那……」
京介が中へ入るのと、小梅が二階から降りて来るのがいっしょだった。
「どんな塩梅なんです、三人組の方は？」
「なにかしら、大きな壁にぶっつかったような気分だよ」
「困ったわねェ！　ニセ物に出られた藤井の旦那も気が気じゃアないでしょう」
「頭へ来て、カリカリしてるよ。それもまァ、おはつと云う女がみつかれば、なんとか壁を突き破る

ことが出来るんだが……」
「おはつ……ッてひとですか？」
「うン。多分イキ筋の女らしい。なにしろ、小弁慶の袷で女の子を迷わせる馬丁さんの方からゾッコン打ち込むッて女なんだが、芸者か料理屋の仲居に、そんな女の心当りはないかなァ」
「こう云っちゃアなんだけど、おはつなんて女のひとは、どこにでもいそうな気がするんだけど……、さて、それではどこに？　と云われると……」
「心当りはないか？」
小梅はうなずいたが、奥から亭主の伊之助が顔を出した。
「おはつッて女なら、ひとり知ってますよ」
「どこにいる!?　浅草でなきゃア駄目なんだが……」
「浅草も浅草、観音さまのお膝もとの馬道ですよ」
「商売は!?」
「牛鍋屋〝三笠〟の女中で……」
「有難てェ！」
京介が腰をあげた。
「まだ、その女、〝三笠〟で働いてるんだろうな？」
「いるもいねェも、あたしゃ昨夜〝三笠〟でおはつを見ましたよ」
「お前、おはつを知っているのか？」
「知ってる……と云っていいかどうか。実はあたしはひとりで時々牛鍋を食いに行くんですよ。女房

のお富は四ツ足をいやがるんでね」
「それが〝三笠〟か？」
「ええ……。おはつは時々あたしのかかりになって、牛を煮てくれる……。それだけのことなんですがね」
「昨夜も牛を食いに行ったのか？」
「いいえ、〝三笠〟の四、五軒先きに、そば十人前ばかり出前に行ったんですよ。するとね、〝三笠〟の入口に近い暗がりで男と女が人目を避けるようにして話をしている……。ちぇッ、うまくやってやがらァと思ってよく見ると、女はおはつなんで……」
「男は？」
「どッちかと云うとやくざッぽい様子でしたね。なにしろ暗くて、顔はよくわからなかったけど……。あ、そうだ！——兄貴は……とか、——留吉は……とか云ってましたよ」
「それは、幾時頃のことだ？」
「そう……。あ、旦那と藤井の旦那がみえたでしょう。あのちょいと前に、あたしは出前から戻って来たんですよ」
小梅が、息をはずませて、前へ出た。
「京介旦那！　その二人は昨夜黒船町の河岸で見た……」
「うム、そうらしい……」
京介は腕を組んだ。
「男が〝三笠〟へおはつをたずねて行った。その頃留吉はもう殺されていた……」

「あの男は、三人組のひとりじゃないわね」
「どうして？」
「三人組のひとりなら、仲間が殺されたのを知らない筈はないでしょう」
「おれは、仲間のひとりだと思う……。そいつは留吉がランプ屋の高右衛門に斬られたことを知っていた。また、三人で黒船町河岸の草ッ原へ逃げたことも知っていた。知らないのは、留吉が殺されたことだけだ」
「それじゃ話の辻つまが――」
「合うんだ。あの男は、――ここでおれは別れた……と云っていた。しかも、懐中に目かくしの包みまで持っていた。あいつは三人組のひとりさ。首領から、――手負いを抱えて三人いっしょでは人目につく。留吉はおれが引受けるから、お前はひとりで逃げろ……と云われた。男は逃げた。そのあとで首領は留吉を殺した……」
「だから、留吉ッてひとの殺されたのを知らないのね」
「それどころか、男は留吉の情婦おはつのところへ、様子をききにいった……」
京介は、伊之助の肩をポンと叩いた――
「助かったぜ。これから〝三笠〟へ行ってみる……」
ところが、おはつは〝三笠〟にいなかった。
「――きょうは休んでいますよ……」
応対に出たお千と云う女中が京介に答えた。
「どうしてだ？　何かわけがあるのか？」

「そりゃア、たまには好きな人と、ゆっくり話もしたいでしょうからねェ」
お千はそう云って笑った。
「お前、どうしてそんなことを知っている？」
「だって、いまさッきまで、おはつさん家へ行ってたんですよ。あのひと昨夜、気分が悪いッて早や帰りをしましてねェ……」
――それは嘘だ……と京介は考えた。留吉を黒船町河岸へさがしに行くための口実だったのだが、お千は知らないのだ。
「あたし、心配だから、たずねてみたんですよ」
「おはつはどうしていた？」
「青い顔して、ふさぎ込んでいましたよ。それでも、何ンだかだと世間話をしていると、トントントン……と、裏木戸を叩く音が聞こえたんです。とたんに、おはつさんたら、ポッと頬を紅くして、ソワソワしはじめるじゃありませんか。ハハーン……と思いましたよ。だからあたしは、馬に蹴られないうちに、さッさと帰って来ちゃったんです」
「男を見たか？」
「いいえ……。そんな野暮な……。あたしは気をきかした積りですからねェ……」
「おはつの家は？」
「山谷堀……。高札場の近くで、油屋の路地を入った二軒目ですよ」
京介は、その足で山谷へ向かった。
おはつの家はすぐわかった。

が……、京介が出入口の格子戸へ手をかけたとたん、——キャーッ……と、悲鳴が聞こえ、続いて坂東三寿若が、転がるように中から飛び出して来た！

5

おはつは、庭に倒れていた。——庭と云っても、路地裏の仕舞家のこと、ほんのひと握りの庭で、青木や八ツ手の葉が、霜にちぢこまっている……と云う程度。

それでも一応は板塀に囲まれ、木戸もあったが、おはつは木戸に近く、八ツ手の葉の下に倒れていた。その頸には、グイッと絞めあげた、奇妙な黒いアザが残っていた。間違いもなく、これは絞殺だ！

「——いけんして、こげんとこに殺されていたのでごわしょう……」

急報によって、屯所から弥太郎、勝之助、浅吉も駈けつけたが、その勝之助が、京介にたずねた。

「牛鍋屋〝三笠〟の女中で、お千と云う女の話では、——トントンと裏木戸を叩く音が聞こえると、おはつはソワソワと始めた……と云うことだ」

「裏木戸ちゅうのは、あれでごわすか？」

勝之助は、木戸の扉を指さした。京介がうなずき返す——

「お千は、おはつの情夫が来たのだと考え、気をきかせて出て行く……。おはつも、恐らくは留吉だと考えたのであろう。イソイソと扉をあけた。ところが入って来たのは——」

「わかったよ、京介の云いてェことが……」

弥太郎が、したり顔で云った——

「入って来たのは留吉を殺したやつ……。つまり三人組の首領だってェんだろ？」

「その通りだ。そいつは、何かうまいことを云っておはつに近づくと、巧みに背後へ廻り、安心し切っているおはつの首を絞めた。多分、おはつは、グーともスーとも云えなかっただろう」

「どうしてそこまでわかる？」

「路地の奥とは云え、入口の油屋から二軒目、しかもまッ昼間だ。ギャッと叫べば、誰かに聞こえた筈……」

弥太郎が、二、三度うなずいた。京介の判断に文句はなかったのだ。

「しかしよう、この頸のアザは気にいらねェなア」

確かに気になるアザであった。——平打ちの小さな輪をつないだ形になっている。

「刀の下げ緒ではごわせんか？」

勝之助の考えに、京介は首を傾げた——

「下げ緒にしては、模様がはッきりし過ぎている。もっと硬いものじゃないかなア」

「とすると……、硬編みの真田紐はどうでごわす？」

「こんな、輪つなぎ模様の真田紐があるだろうか？　とにかく……」

京介は浅吉を呼んだ。

「このアザを写しとっておいてくれ。形も大きさも、そッくり同じに……」

「じゃ、アザに墨を塗って、懐紙で押えて写しましょうか？」

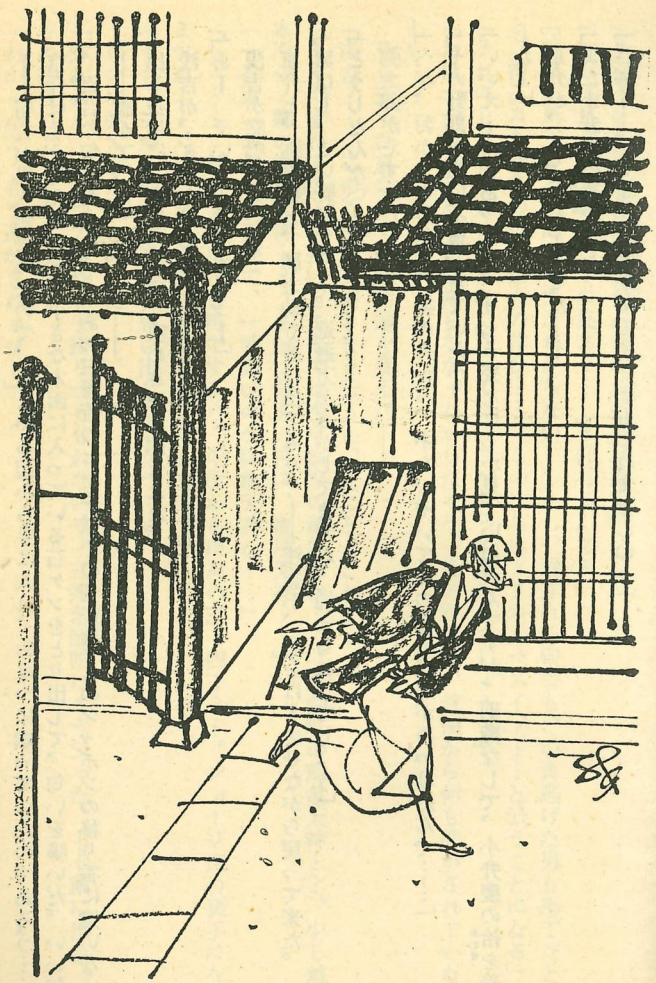
「うン……、形は逆になるが、それでもいいだろう……」

それから京介は、弥太郎・勝之助を促して座敷へ上った。——そこには、坂東三寿若が、気抜けし

たような様子で坐っていた。
「師匠は、どうしてここへ……？」
京介が三寿若にたずねた。
「実は昨夜、子ども弟子の三人の他には、おはつッて名に心当りはない……と申上げたでしょう。ところが今朝、ふッと、ここのおはつさんのことを思い出したんですよ」
「それを昨夜思い出してくれてたらなア……」
「済みません……。何分、お弟子さんでもなし、お稽古仲間でもなかったものですから……。おはつさんは、今年の春まで、うちの裏の長屋にいましてねェ、芸ごとが好きだとかッて、時々、お稽古を見に来ていたんですよ。そんなわけで、総ざらいのときも手伝いに来てくれましてね――」
「それでヒキ手拭いも……」
「はい、確かに差し上げました。わたしはそのことを、今朝になって思い出し、早速伝法院屯所の探索方詰め所へ――」
「報らせてくれたのか!?」
「はい……。すると、金筋の入った西洋服を着た、御年配のポリスさんから、――新宮寺は出かけちょるッ。出直せッ……て叱られましてねェ」
聞いていた弥太郎が、大げさに溜め息をついた――
「やーれやれ、庄司さんだぜ、それは……。困ったもんだなア、あの爺いさま！　そんときこの家のことがわかっていりゃア、おはつは死なねェで済んだかもしれねェ」
「いや、庄司さんには悪気があったわけじゃない。寧ろ、おれが昨夜、権中判事どのの御母堂坂東三

寿若師匠を調べたと云うんで、イライラしてたんだろうよ」
「ふン、その三寿若師匠を怒鳴りつけてりゃア世話はねェ。とにかく、年の割りにゃそそッかしい爺さまだよ」
すると、今度は三寿若が溜め息をついた――
「あたしも、屯所からすぐここへ来ればよかったんですけど、丁度観音さまの前で、顔見知りの芸者衆に出会いましてねェ、誘われるままに水茶屋で、甘酒を呑んだり、お喋べりをしたりして、つい遅くなってここへ来たもんですから、一ト足違いでこんなことに……」
「ひと足違い!?」
「はい……。多分、あのひとが下手人ではないかと……」
「見たのか!?」
「あたしが路地へ入るのと、男がその裏木戸から飛び出して来るのとが、いっしょだったんです」
「どんな男だッ!?」
京介が、せき込んでたずねた。
「さア、頬ッかぶりして、その上、顔をかくすように横を向いて逃げて行ったので、どんな顔だか……」
「体つきは？」
「五尺、四、五寸でしょうか？　痩せてはいましたが、素ばしッこそうな男でした」
「な、な、な……」
弥太郎が顔をつき出した。

「その野郎、羽織は着ていなかったか？」
「あー、着ていましたよ。それも黒紋付！」
「紋は？」
「さア……、何しろ、スーッとすれ違っただけですから……」
「梅鉢じゃなかったかなァ。見たところ、天神さまのお札売りッて恰好……」
「そうですねェ……、お札売りか、でなきゃ、雨に出会ったお祭りの役員衆……ッて姿でしたねェ、紋付きの羽織を着て、頬ッかむりしてるんですから……」
弥太郎が、イマイマしげに京介を見た。
「やっぱり、ニセ物野郎だよ」
「そうらしいなア……」
「畜生め！　留吉ばかりか、女まで殺しやがった！」
「弥太郎旦那といたしましては、どうするね？」
「どうもこうもあるもんかッ！　とッ捕まえて、二ツに折って、クシャクシャに揉みのよ、チーンと洟をかんでやりてェようなものだッ」
京介は苦が笑いをして、座敷の中を見廻していたが、部屋の隅の鏡台に気付くと、その前に行って、腰を降ろした。
「ほウ……、こりゃア大したものだ……」
京介は、鏡台の前の化粧品を、一ツ一ツ手にとって眺めた。——舶来香水に、西洋の粉白粉、異国の棒紅……。どの一ツをとっても、牛鍋屋の女中が使うようなものではない。



——留吉が異人館勤めなので、そこいら辺から手に入れ、おはつに贈っていたのであろう……。

京介はそう考えながら、小さな木函に入っている石ケンをとり出して、匂いを嗅いだ。いい匂い……。百合の匂いだった。——あの三寿若のヒキ手拭いの匂いは、このシャボンの移り香に違いない……。

「——誰かアッ!?」

出し抜けに、板塀の外で、喚めき声が聞こえた。

浅吉が、ダッと、裏木戸から飛び出して行く——

「あ！　そいつ、逃がすなッ！」

浅吉が怒鳴っている。

京介と、弥太郎と、勝之助も表へ出てみた。——浅吉が、息をはずませながら戻って来た。

「素ばしッこい野郎で……。巡邏方がさがしてますが、捕まらねェでしょう」

「どうしたんだい？」

弥太郎がたずねた。

「ヘエ、おかしな野郎が、塀の外から、中をのぞいてるのを巡邏方がめっけたんで……」

「その野郎、黒い羽織を着ていたか？」

「いいえ……。あッしゃ、うしろ姿だけしか見ていねェんですが、羽織なしで、小弁慶の袷を着てましたよ」

京介が、ふッと眉を寄せた——

「また小弁慶の袷か……」

「旦那……。いま逃げた野郎も馬丁かもしれませんねェ」

「そうなると、いよいよクリストマスイブが危い」

「やっぱり、三人組は馬丁の集まり……と仰有るんで？」

「首領が馬丁かどうかは、まだわからない。しかし、殺された留吉も、いま逃げた男も馬丁だとすると、押込みをやるのは異国人の休日……。この次ぎはクリストマスイブ……と云うことになる」

「それにしてもいまの男、なんだって、ここへやって来たんでしょう？」

「おはつが殺されたことを知らなかったからだろう。その野郎は、首領から何も聞かされていないらしい……」

そう云った京介が、突然話題を変えた——

「浅吉……、この近くの天神さまと云うと、どことどこだ？」

「そうですねェ……、近いところでは浅草橋際の第六天神……。西仲町の鶴亀天神……。少し離れて、本所仲ノ郷の業平天神……。あとは湯島天神に、亀戸天神……」

「一番遠いのが亀戸天神で、一番近いのが鶴亀天神か……」

「ヘェ……。鶴亀天神は西仲町ですから、屯所からほんの三、四丁……。ジョージ床の裏手になってますが……。なんだッてまた天神さまなんか……？」

「うン、三寿若師匠の言葉を思い出したんだ」

京介は弥太郎へ顔を向けた——

「弥太さん、こいつア案外な手掛りかもしれないぜ。三寿若師匠はこう云った、——雨に出会った祭りの役員のよう……とね」

「わかったよ。もう逃がさねェぜ！」

弥太郎が腕まくりをした——

「下手人は、天神さまの氏子……。それも役員をしてるやつに違げぇねぇ！」

6

「全く、新宮寺に会わせる顔がなかじゃよ」

組長の庄司小警部が、年の瀬だと云うのに、額の汗を拭いた。

「今回はツイていないんですよ」

京介が、庄司小警部を慰めるように云った。

二時さがりの探索方詰め所……。いつもなら弥太郎あたりから軽口の冗談も出る頃なのだが、今日はみんな、ムスッとした、難しい顔をしている。

何しろ二日続きの殺しだ。しかも、殺されたのは、東京の下町を荒らし廻っている三人組の一人と、その情婦……。更に、ランプ屋への押込みに際しては、藤井弥太郎の名前を名乗っているのだ。

これでは生来のんき坊主の弥太郎とは云え、冗談などの云えるわけがない。

「それにしても、何故おはつまで殺しやがったのかなア……？」

弥太郎が頬杖をついてつぶやいた。

「そらア、おはつの口から、三人組のこつが明るみに出るこつば恐れたのでごわしょう」

勝之助が答えたとき、巡査がひとり駈け込んで来た。

「連絡に参ったでごわす！　先刻、山谷堀の人殺し現場から逃げ出した怪しか男は、目下、田原町、並木町、諏訪町、堀田原を結ぶ地域に追い込み、追跡中でごわす」

「そいつァお手柄だ！」

弥太郎が立ち上った。

「京介、勝ッつぁん、あたし達も行こうじゃねぇか。その野郎をとッ捕まえて搾め上げりゃ、あたしのニセ物もわかるッてものだッ。さ、行こうぜ！」

せッかちの弥太郎が、十手を握って、まッ先きに飛び出して行った。——続いて、勝之助、浅吉も出て行く。

が、京介は逆に、庄司小警部のうしろにはり出されている受持ち区域の地図の前へ行った——

「こいつァ大変だ……」

京介の口から、思わず溜め息が漏れた。

「大変とは、何がじゃね？」

庄司小警部が、煙管に刻みを詰めながら訊ねた。

「いまの連絡では、田原町、並木町、諏訪町、堀田原を結ぶ地区……と云うことでしたね？」

「うン……。つまりだ、浅草広小路の南側ちゅうことじゃよ」

「庄司さん、ひと口に広小路の南側と云いますが、これは相当広い地域ですよ。まず田原町が一丁目から三丁目まで……。その南に真砂町、堀田原……。田原町の東側には東仲町、茶屋町、並木町……。並木町の南には材木町、駒形町、そして諏訪町。その諏訪町と堀田原の間には、猿屋町、福富町……。それだけじゃないんです。これ等の町にとり囲まれた中には、西仲町、三間町、福川町、寿町……」

「ざッと数えて、十五、六カ町じゃねぇ」

「しかもこれが、堀田原を除いて、江戸の頃からの町屋で、ビッシリと家が建てこんでいるんです。それも、田原町一丁目の胴切り長屋を始め、同じく二丁目のヘッツイ長屋、福川町の丁字長屋、寿町の六尺長屋など、百人からの有象無象がとぐろを巻いてる長屋があちらこちらにある。と云うことはですね――」

「藤井には気の毒じゃが、逃げた男は、なかなか捕まらんちゅうことかね」

京介が、ゆっくりうなずき返す。

「しかし、新宮寺……。だからと云うて、放っておくわけにはゆくまい」

「運がよければ、弥太さんがお縄に……。そうなるといいんですが……」

「おはんは、狩込みには行かぬのか？」

「さっきの弥太さんと勝ッつぁんの話を考えてみたいんです」

「さっきの話？」

庄司小警部が、いぶかしげに、訊ね返した。

「――なぜおはつまで殺したのだろう……と弥太さんが云うと、――三人組のことが明るみに出ては困るからだろう……と勝ッつぁんが答えました」

「うム……、そんな話をしとったようじゃが……。それがどうかしたのかね？」

「わたしに解せぬのは、なぜ首領が、――おはつから秘密が漏れるかもしれぬ……と考えたか、と云うことです」

「それはだ、留吉の腕の刺青から屯所でおはつをさがし出す……と考えたからじゃろう」

「しかし、殺されたのが留吉だとわかったのは、寧ろ偶然なのです。三人組がドンタク毎に罪を重ね

ていることに気付いたのも偶然なら、小弁慶と馬丁を結びつけたのも、偶然お源婆ァさんがはやり歌を唄ったからなんです」

「そう云えば、ドンタクに気付いたのは、わしが、――大学南校に行っとる甥がドンタクに遊びに来た……ちゅうたのがキッカケじゃったが……」

「その意味で、今回の探偵の最高の殊勲者は庄司さんと云うことになりますなァ！」

「いやァ、それほどでも――」

そう云いかけた庄司小警部が、ハッと真顔になった――

「いやァ、いかんいかん！　わしゃ坂東三寿若で大失敗をしちょる。こら帳消しじゃよ、こらァ……」

「いやァ、気にすることはありませんよ……」

京介は笑いながら、庄司小警部から離れ、大火鉢のそばに腰を降ろした。

「――お源婆ァさん、お茶をくれんか……」

だが京介は、格別お茶を呑みたかったわけではなかった。――庄司の話相手から逃れて、静かに考えたかったのだ。

――首領は、留吉の口をふさいで安心していた筈だ。いや、留吉の口さえふさげばもう心配はないと考えて消した筈である……。

――首領は、留吉の身許が割れるとは夢にも考えていなかったし、従っておはつを殺す必要はなかったのだ……。

――それが、真ッ昼間、危険を冒して、おはつを殺しに行った。

その理由はなんだろう？

——屯所が留吉の身許を割ったことを知ったからだ！　そして、遠からず留吉の情婦おはつが屯所の手におちる……と考えたからに違いない！

「——はてなァ……!?」

京介が、思わず、ひとり言を云った。

「む？　何がはてなじゃ？」

庄司小警部が、自分の席を立って、大火鉢の傍らへ近づいた。

「留吉の身許が割れたことを知っているのは、誰と誰でしょう？」

「それは、われわれ探索方はみんな知っとるじゃろう」

「しかし、探索方が表の者に、探偵の状況を喋るようなことは考えられないでしょう」

「とすると、屯所の巡邏方かな？　巡邏方の中には、いろいろと探偵状況を知っとるものもいるじゃろう？」

「そらア、われわれの仕事を手伝ってくれていますから……」

「こう云うてはなんじゃがね、巡邏方のポリスの質は玉石バラバラじゃからねェ。薩摩の下級士族あり、旧幕臣あり、佐幕大名の家来あり、長屋暮らしの浪人あり——」

「わたしも親代々の浪人者でしたよ」

「いやいや、おはんのことを云うたのではないのじゃよ。そう云えば、わしは会津士族、賊軍じゃよ。つまりじゃね、玉あり、石あり、中には銭に転んで、屯所の内状を流すものがないとは——」

「そんなことは考えたくないですなア」

「しかしだ、銭は別として、屯所の動きなどをだ、得々と喋るものが——」

「それは考えられます。現にわれわれだって、紅梅そばなどで——」

京介が、急に口をつぐんだ。

「新宮寺……」

「いや……、おはつと云う女が牛鍋屋の〝三笠〟にいる……と教えてくれたのが、紅梅そばの親爺なんです」

「伊之助か？」

「その前にわたしは紅梅そばで、小梅やおかみのお富に、——おはつと云う女を知らぬか……、おはつに心当りはないか……とたずねています。その時、店には幾人かの客がいました」

「そげんことを云うなら、藤井も、門司も、浅吉も、浅草一帯をさがし廻っちょる。二十軒茶屋を一軒々々訪ねて、——おはつちゅう女はおらんか……。奥山の矢場や水茶屋でも、——おはつちゅう女はおらんか……」

「それが廻り廻って三人組の首領の耳へ……」

「左様々々左様……。従ってだ、——なぜ首領が知った……などと云うことは、こら問題ではなかですよ……」

そう云われても、京介は、まだスッキリしないシコリが残っていた。

それから一時間余り、弥太郎が、寒そうに巻き羽織の袖を掻き合わせるようにして帰って来た。

その弥太郎の肩に、白いものがポツポツとついていた。

「ほう、雪か？」

京介が、驚いたように云う。

「いやなものが降りだしやがったよ。それにめッきり日が短くなりやがって、もうボチボチ薄暗くなって来た」
「そう云やァ、今日は小至だ」
「ショウジ？」
「冬至の前の日だよ。明日は一年中で一番日が短いんだ」
「あー、南瓜を食って、柚湯に入ェる日かァ。だけど、冬至はまだいいんだ。南瓜や柚だからね。今日は二十一日、納めの大師だよ。黒船町の大師堂に、ゾロゾロゾロゾロ参詣人がやって来るんだ」
「悪い条件が重なったわけか。たださえ広い町屋だ。その上、日は短い、雪は降る、人出は多い……」
「泣かせるぜ、全く。網を張ってる方の身にもなってみろってんだ」
「或いは、魚は既に網を破って逃げたかもしれないな……。勝ッつぁんや、浅吉は？」
「まだどッかで、通行人を調べてるんだろうが、まンずめッからねェだろうなァ……」
すると、庄司小警部が咳ばらいをした。
「藤井……。みつからないだろう……では済まされませんよ」
「しかしねェ、庄司さん――」
「いや……。たとえ、町屋が広かろうが、納めの大師で人出が多かろうが、雪が降ろうが、日が短かろうが、伝法院屯所探索方としてはだ、骨が舎利になっても……。よし、もしおはん達が投げ出すなら、この庄司孫右衛門ただひとりでも――」
とたんに庄司小警部が咳込んだ。――寒さが厳しくなると、喘息気味になるのだ。
「ま、そう力まないで下さい……」

京介が、庄司小警部にお茶をくんで差し出した。
「こん度はあたしが応援に行きます」
「いやァ、あたしだって行くさ」
弥太郎が洟水をすすりあげた。
「あたしゃアね、別に探偵を投げて戻って来たんじゃねェんですよ。この犯人をとっ捕まえてェのは、誰よりもあたしなんですからね。わかってるでしょう。名前をかたられた口惜しさがどんなものか。あたしゃ、腸が煮えくり返るような気がしてるんですよ」
弥太郎は、喋りながら、机のひきだしから紅唐辛子をとり出すと、二ツに割っては足袋の中へ入れた。
「弥太さん、何をしてるんだ？」
「こうやっとくと、雪ン中に突ッ立ってても冷たくならねェのさ……。寒いときには、足袋に紅唐辛子を、右手は懐中に……、こうして手足をかじかまねェようにするのが張込みの心得だ……ッてね、かけ出し同心の頃、先輩から教えられたものさ……。さ、出かけべェか」
「うン、すッかり暗くなったなァ」
すると、隅の方で机に向っていた書役の難波がふッと顔をあげた――
「新宮寺さん……。ちょッと思い出したことがあるのですが……」
「どんなことだ？」
「さッきの、――どうして首領がおはつのことを知ったか……と云うことですが……」
「いいだろう、あのことは……。おれの思い過ごしだ。幾らでも首領の耳へ入る機会があった。巡邏

方の口から、探索方の探偵中にも、紅梅そばの客にも――」
「ジョージ床の職人や客の口からも……」
「ジョージ床!?」
「昼間、新宮寺さんをお迎えに行ったとき、わたしがうッかり、――浅吉が居留地近くの湯屋の女を連れて戻って来ました……と」
「あー、そんなことを云ったッけなァ……。しかし、ジョージ床の巳之助や定吉が――」
京介が、あとの言葉を呑みこんだ。
そんなことにはおかまいなく、弥太郎がトントントンと足踏みをした。
「へへへ……、足が爪先きからポカポカして来やがった。寒いときにゃ紅唐辛子に限るなア……」
「弥太さん……。旦那は舶来ぎらいだったな。異国料理……、西洋服……、舶来雑貨……。みんなきらいだろ?」
「アタ棒よ! こう見えても藤井弥太郎は江戸ッ子だ」
「しかし、ジャンギリの手入れだけは、西洋床へ行くだろう?」
「あー、ジョージ床へなア。こいつばかりは髪床屋の見よう見まねじゃいけねェ。トラ刈りにされちゃうからなア」
「ジョージ床の巳之助や定吉は弥太さんのことをよく知っている……」
「そりゃア、二年この方、ジョージ床が出来たときからの馴染みだからなァ」
そう云ってから、弥太郎が、いぶかしそうに京介を見詰めた。――庄司小警部や、難波も、京介の考えを測りかねているようだ。

「京介……、おれが、ジョージ床と馴染みだったら、どうだッてェんだい?」
「ジョージ床は、西仲町……。鶴亀天神と裏表なんだ。当然、天神さまの氏子……。もしかしたら、当節はやりの髪挟み処……、役員を押しつけられ、梅鉢の紋がついた羽織があるかもしれない」
「だ、だけど京介、ジョージはイギリス人だ。それに、居留地の外に住むことは許されていねェ。氏神さまの役員なんて――」
「だから、巳之助か定吉が名代を勤めているかもしれない」
「京介ッ!」
弥太郎が息をはずませた――
「じゃ、三人組の首領は巳之助か定吉だと云うのかッ!?」
「まだ、はっきりしたことは云えない。決め手になる証拠がないんだからな……。しかし、気になることがもう一ツある。シャボンだ」
「シャボン!?」
「ジョージ床で使っている百合の匂いのするリリー・シャボンと云うやつ、それと同じものが、殺されたおはつの鏡台の前にあった」
「そんなシャボンなんか、舶来雑貨の店へ行けば――」
「いや……」
京介が首を横に振った――
「巳之助に云わせると、――リリー・シャボンは、主人のジョージがアメリカから取り寄せてるもので、他にはない筈……と云うことなんだ」

「なんだか、段々妙な心持ちになって来やがったなア。そう云やァ、巳之助、定吉も異国人の店に雇われており、ドンタクは休みッてわけだなア……。京介、もしあいつ等の中のひとりだとすると、巳之助だろうか？　それとも定吉だろうか？」

京介がニンマリ笑った——

「動かぬ証拠を押えるまでは下手人扱いは出来ないんだ。これから、何かをさがしてみようじゃないか……」

7

勝之助は、雪の中に立っていた。暗い空から果てしなく舞い降りてくる雪は、もう踝近くまで積もっている、——場所は、浅草広小路から東仲町へ入ったところだ。

勝之助はそこで、もう三時間余り検問を続けている。——京介ほどの判断力はなく、弥太郎ほど融通はきかないが、真面目一方で粘り強い……。それが勝之助のとりえだった。

「——こら、待てッ！」

薩摩ッぽの勝之助は、ぶッきら棒な言葉で通行する男を片ッ端から取調べた。が……、いままでのところ、身許の怪しいものも、行動の不審なものもいなかった。

京介と弥太郎が東仲町へ入って行くと、勝之助が、男を離してやったところだった。

「何んでェあの男？」

弥太郎が、闇の中へ素ッ飛んで行く男のうしろ姿を見送りながら勝之助にたずねた。

「胴切り長屋の徳次郎ッて男ごわす」

「妙じゃねェか。胴切り長屋は田原町だ。ところがやつは、反対の西仲町の方へ行ったぜ」

「そいが、かみさんな、産気づいたちゅうて……。こん先きの産婆ッとこに——」

「待てよ。この先きッて……、取りあげ婆ァさんがいたッけな？」

「なんじゃとッ!?」

「変ンだよ。あたしゃ町奉行所時代から浅草一帯を廻ってるが、この辺りで産婆と云やア、田原町二丁目に一人……」

「胴切り長屋のすぐ近くではごわはんか！」

「その通り……。その他にゃ同じ田原町の三丁目と門跡裏……。この附近じゃ並木町にひとりいるな」

「田原町三丁目も門跡裏も胴切り長屋の近くじゃ……」

「そこだよ。近くに二軒も三軒も取りあげ婆ァさんがいるのに、なぜこんな処をウロウロしてるんだろ？」

「こな糞ッ！　あん男ば、ひッ捕えてくるるッ！」

勝之助は雪の中を、さッきの男が消えた方へ、まッしぐらに駈けだして行った。

「あたしゃ、めッからねェ方に賭けるよ……」

弥太郎が京介に云った——

「この雪の中をマゴマゴしてとッ捕まるようなら、下らねェドブ鼠さ」

「反対に捕まらなければ？」

「でッけェ魚だったかもしれねェ……と云いたそうだなア」

「或いはねェ……。——おいッ、弥太さん！」
京介が、西仲町の方を指さした。雪の中を提灯が一ツ近づいて来る。——しかも、その提灯には梅鉢の紋がついている！
「京介！」
弥太郎が、スッと京介から離れる。
提灯が近づいて来た。
「——待ちな……」
弥太郎が、提灯を持った男の前に立ちふさがった。うしろから京介が、ピタリッと男に寄り添う！
「あ！　なんだ、旦那方ですか！　ヒヤッとしましたぜ、追剝ぎかと思って……」
男の方から、弥太郎と京介を眺めた。——ジョージ床の定吉だった。
「どうしたんだ、いま頃？」
京介が定吉にたずねた。
「いえね、ジョージが今日のあがりをとりに来ましてね、これから築地のホテル館へ帰ェるんですよ。——サダキーチ、リキシャ、ヨビナサーイ……、なんてね。雪だッてェのに、人使いが荒れェですよ」
「俥宿へ行くのか」
「へェ……。広小路の……。最初はね、夕方五時までで帰っていいッて約束だったんですがね、いつの間にか六時になり、七時になり……。明るいうちに帰ェったことがねェんですよ」
「帰るッて、お前、通いか？」
「へェ、家は下谷車坂なんで……」

「そうか……。巳之助は？」
「巳之さんは、住み込みなんで……」
浅吉がやって来た。
「あー、旦那方、どうかしたんですか？」
「いや、ジョージ床の定吉と話をしてたんだ」
京介は、定吉の持っている提灯を指さした。
「その提灯の紋……。梅鉢はお前ンとこの紋か？」
「いいえ。こりゃア、裏の鶴亀天神の祭りンときに、役員が持つ祭り提灯なんで……。夜道は暗いでしょう。だから店にあったのを……」
「わかったよ。ものは相談だがね、よかったら、その提灯を貸してくれないか？」
「いいですよ。なァに、暗れェたって雪あかりでしょ。平ッちゃらですよ。どうぞ……」
「済まン……」
京介は、提灯を受けとって定吉を放してやった。
「おい、京介……」
弥太郎が、定吉を見送りながら、京介にささやいた——
「定吉は、違うのかい？」
「違うなァ……。三人組の首領——梅鉢の紋付きを着たニセ弥太郎なら、同じ紋のついた提灯を持って歩くようなことはしないだろう」
「じゃ、巳之助……？」

「うン……、いま、ふッと思い出したことがあるんだ、ジョージ床へ行ってみよう」
そのジョージ床の近くまで来ると、勝之助が雪の中に突ッ立ち、苛立たしげに、辺りを睨んでいた。
「どうしたんだ、勝ッつぁん!?」
「いやァ、さッきの男ごわす」
「胴切り長屋の徳次郎とかッて男か?」
「左様……。この辺りで、チラッと見かけたのじゃが、どこへ潜り込みおったか……」
「そのうちに、ネズミは巣から出て来るさ。そう苛々しなさんな……」
京介は、そう云って勝之助をなだめると、ジョージ床の前へ行った。
英吉利人の店だ。表はガラス戸だったが、もう、ピタリッと閉めて、内側には白い幕が引いてあった。
が、灯りはついている。——ジョージが人力車を待っているし、巳之助もいる筈だ。
「——おい、巳之助……」
京介が、ガラス戸を叩いた。
「——ヘェ……。相済みませんが、髪挟みなら、もう仕舞いましたので……」
「いや、伝法院屯所の新宮寺だ。ちょいとあけてくれ……」
「あー、旦那で! ただいま開けますから……」
巳之助が、ガタガタと掛け金をいじっていたが、やっとのことでガラス戸をあけた。
「巳之……、だいぶ手間どったな」
「え? いえ、掛け金の調子が悪いもんですから……。何か、御用筋で?」

「気になるか?」
「な、なんのことで? あたしは、別に……」
「いい度胸だ……」
京介は、ポケットの時計をとり出すと、ピンと鎖を引ッぱった。
「どうだい、これ!」
「ヘェ……。昼間も拝見しましたが、いい時計ですね……」
「時計じゃねェ、鎖だ! こいつを背後から頸にひッかけて、グイッと絞める」
「な、なんのことで?」
「お前ェが、おはつを殺したときの話さ」
巳之助は、ギョッと息を呑んだが、すぐ、不敵な笑いを口許に浮かべた。
「いやですよ、そんな冗談! あたしは、おはつなんて女——」
「お前は、鶴亀天神の氏子だな?」
京介が、急に話題を変えた。——相手の意表をついて質問を変えて行く。これが取調べのコツである。
「いいえ、あたしはもともと横浜生れですから、本牧の山王さまの氏子なんで……」
「そうかな? おれが調べたところでは、この店は鶴亀天神の氏子。しかも役員とか——」
「いいえ、御承知のようにここの主人は英吉利人なんで……。天神さまの役員なんて飛んでもねェ! ドンタク毎に横浜に帰って教会へ行く。こん度だって、二十四日はクリストマスイーブで、横浜帰り……。ヤソ教ですからね、ジョージは。天神さまとは、かかわりありませんよ」

「ところが……」
京介は、持っていた祭り提灯を巳之助の前に差し出した。
「この提灯は、ここのものなんだ」
「いいえ、うちにゃ、そんな提灯は――」
「あるんだよ。いましがた定吉が持っていたのを借りて来たんだ……。ジョージはどうした？」
また、京介が質問を変えた。
「へェ……。ジョージは、さッき帰りましたよ、築地のホテル館へ……」
「変ンだなア……。定吉が人力車を呼びに行ってるのに……」
「俥が遅いんで、待ち切れなかったんでしょう」
「異国人が、この雪の夜、築地まで歩いて帰ッたのか？」
「いいえ。多分、途中で辻車でも――」
「定吉は通いだッてな？」
京介が、三度話題を変えた。
「へェ……。定吉は女房持ちですから……」
「お前ェは住み込みだな？」
「へェ……」
「この頃はジョージの帰りが遅い……。だからドンタクの日しか動きがとれない」
「旦那……。お話がよくわかりませんが……」
「とぼけるなよ。祭りの役員提灯がある以上、梅鉢の紋をつけた役員羽織もある筈だ。ドンタクの夜、

それを巻き羽織にして、藤井弥太郎のニセ物になった……。仲間の馬丁留吉達も、異人館勤め、ドンタクしか自由はきかない」
「旦那……。もッとはっきり仰有って戴きましょうか？　何ンだか、あたしが悪いことを――」
「しているのさ！　盗み……、殺し……、三人組押込みの首領はお前だ」
「馬鹿々々しい！」
巳之助が、ふンと横を向いた。
「お前、決め手になる証拠がないとタカをくくッてるようだな……。浅吉ッ」
京介は浅吉を呼ぶと、おはつの頸のアザを写しとった懐紙を出させた。
「さ、この墨のあとに、お前の時計のクサリを置いてみろ。ピッタリ合わなかったらお慰みだ。――これは、殺されたおはつの頸に残っていたアザを写したもんだッ！　巳之助ッ、時計を出せッ」
「いやだッ」
「何ッ!?」
手の平を返したような巳之助の言葉に、京介がキッと身構えた。
「さすがだ……。褒めてやるぜ」
「野郎ッ！　やッぱり手前ェがあたしのニセ物かッ!?」
弥太郎が、十手を構えた。
「仰有るとおりだ。おれがニセ・ポリス、ニセ探索方、三人組の親玉さ。手足まといの留吉をばらし、おはつの口をふさいだのもおれさまだ」
「こな糞ッ！　よくも探索方の前で高言をッ」

勝之助が眉を逆立て、摑みかかろうとした。
「おッと！　慌てるなッ！　おれを捕まえると、お前達は腹切りもんだぜ」
「なんじゃとッ!?」
「お前達の出よう一ツで、英吉利人ジョージ・バーボンの命がなくなる……。嘘じゃアねェよ。ジョージはホテル館へ戻ったのじゃねェ。さッき、仲間の徳次郎が飛び込んで来た」
「徳次郎ッ!?」
「そうよ　探索方に追ッかけられてると云うんで、こいつァいけねェと考え、ジョージを人質にしたんだ」
京介が前へ出た——
「考えたなア、巳之助！」
「おれも命がけだからな。おれを捕えようとすればジョージを殺す……。異国人が殺されたら、太政官政府はデングリ返るような騒ぎになるぜ」
「だが、ジョージを人質にして、何処まで逃げられる？」
「大きなお世話だ。アメリカへ行くか、清国へ飛ぶかは出たとこ勝負だ。——おい、徳次郎！　出かけようぜ。ジョージを連れて来な」
が……、奥から、オズオズと出て来たのは、徳次郎——胴切り長屋に住んでいると云っていた男ひとりだった。
「徳ッ！　ジョージはッ!?」
巳之助が、慌ててたずねた。

「やめたよ……。おれはもう、お前ェにゃついて行けねェ」
徳次郎が、ボソッと答えた。
「な、なにを云うんだッ!?」
「お前ェ、留吉を殺した上、おはつまで殺した……。この次ぎはおれを——」
「馬鹿野郎ッ！　そんなことより、ジョージは——」
その英吉利人ジョージが、表から入って来た——
「ミノスーケ……、あんた、悪いひとね！」
「けッ！　糞くらえッ！」
巳之助が、ダッと、表へ飛び出そうとした。が……、勝之助の大きな手が、パシーッと、巳之助の横ッ面をはり飛ばしていた。
巳之助は、死にもの狂いに暴れ廻ったが、所詮は無駄な抵抗であった。
「——弥太さん……」
京介が弥太郎を呼んだ——
「このニセ探索方は、弥太さんがお縄にする筈だったな」
「有難てェ！　——やいッ、巳之ッ！」
弥太郎が、ピューッと、捕り縄をさばいた。
翌年春の裁判で巳之助は、——異国人の贅沢な生活に腹が立った。異国人に比べると日本人の暮らしは獣なみだが、それと云うのも結局は銭がないからだと考え、押し込みを働くようになった……と述べたが、新律綱領に死罪を宣告された。

徳次郎も、死罪の筈であったが、これは死一等を減ぜられて無期懲役となった。——自分の命を助けてくれたから……と英吉利人ジョージが減刑を願い出たからである。

春浅い二月の末、巳之助は市ヶ谷の刑場で処刑され、それから半月ほどして、徳次郎は、まだ雪の深い北海道へ送られて行った……。

昭和45年4月1日　発行

著者　島田一男
発行者　矢貴東司
印刷者　堀内文治郎
発行所　株式会社 桃源社
〔103〕東京都中央区日本橋螺殻町1—12
電話（666）4001～2番
振替東京 64351番

開化探偵帳

¥ 320.
〈検印省略〉

落丁・乱丁の節は
お取替え致します

（用紙特漉　北越製紙・市川工場）

1970 ©

(分) 0293 (製) 070020 (出) 5180

發行人：黃　春　男
發行所：聯　城　書　局
地址：台北市中山北路二段93巷9－1號
電話：516542　516735
印刷所：光楊圖書印製有限公司
住址：台北縣板橋鎮埔墘里二段三九四號
電話：九六四五六八
郵購：台北郵劃撥帳戶第14792
中華民國　年　月　日第　版
登記證：內版台業字第一七三二